

398

2

事故本

アハロ-シ

p9-12

S60.1.7

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

始



冊 62 49

398-2



洗心洞後學石崎東國著

大塩平八郎傳

東京大阪 大鐙閣藏版

大正  
10 22  
内交

大鹽中齋先生肖像

大鹽中齋先生肖像

大鹽中齋先生肖像

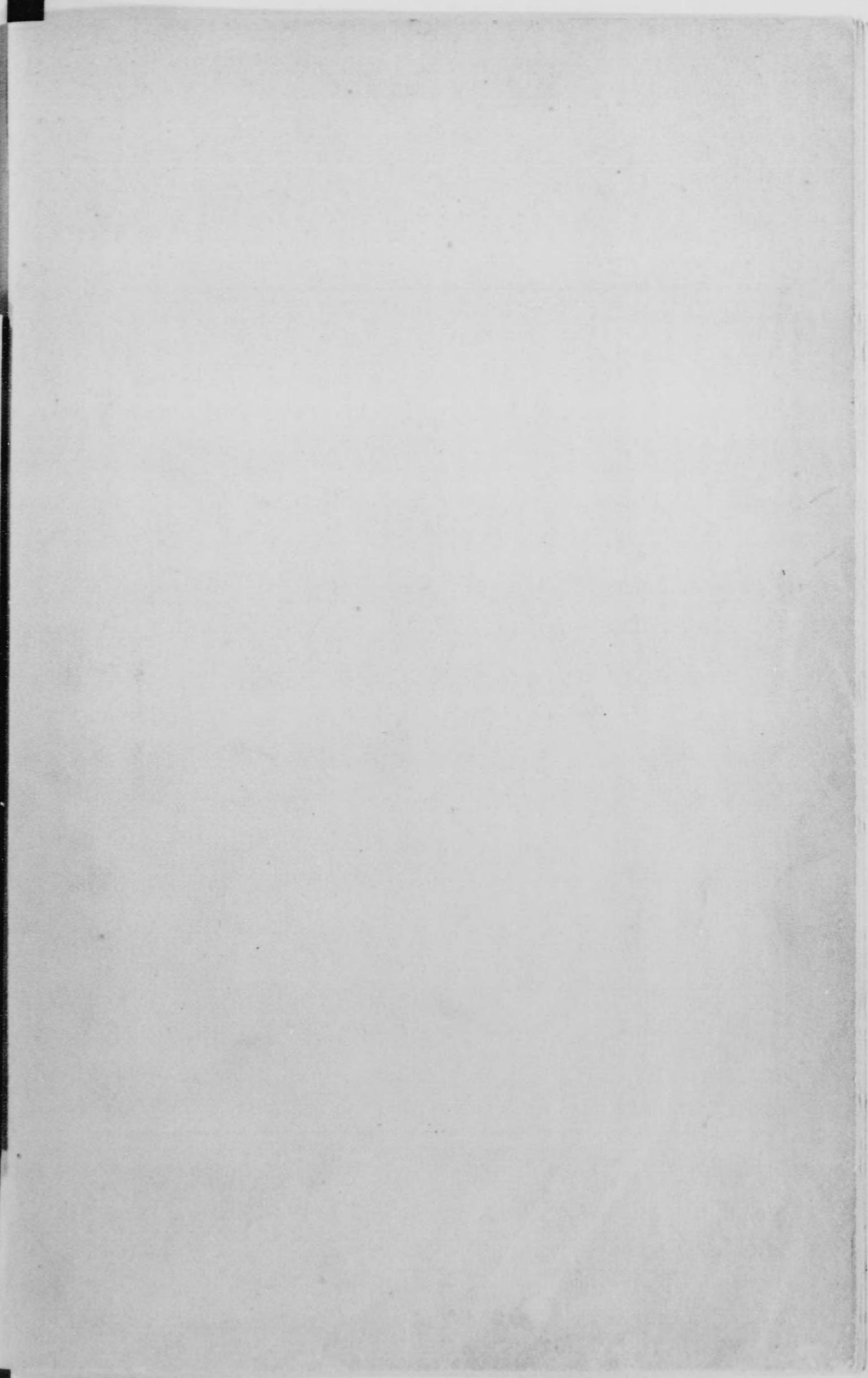
大鹽中齋先生肖像



大塚中齋式半百翁

王陽明先生肖像





四海の人々をうたぐり天禄をくだらん小人  
唯我れは先づわが奥告事者人の聖人深  
天下後世人の君人の長人の老を法戒せむ  
東照神君も輝寒孤獨にひて天阿をさみ  
いかに思ふは是に改め奉るとは作らばは二  
百五十年太平の同遊と上たも人驕奢を  
を極太切改め獲る法役人も徳徳を公教を  
て極美に不興向女中同徳を道徳仁徳をも  
はき徳きふきて立別れ事き改種一人一家を  
飛くは文をの勢形を運く其れを如何に  
性も運分用金月也と年貢法役の甚き  
若しと書て吾を稱へ徳を成せし用也  
四海の國務も善事人の上を志す家と  
天子は其れを東も西も陽も陰も賞罰し徳  
惟我れは先づわが奥告事者人の聖人深  
天下後世人の君人の長人の老を法戒せむ  
東照神君も輝寒孤獨にひて天阿をさみ  
いかに思ふは是に改め奉るとは作らばは二  
百五十年太平の同遊と上たも人驕奢を  
を極太切改め獲る法役人も徳徳を公教を  
て極美に不興向女中同徳を道徳仁徳をも  
はき徳きふきて立別れ事き改種一人一家を  
飛くは文をの勢形を運く其れを如何に  
性も運分用金月也と年貢法役の甚き  
若しと書て吾を稱へ徳を成せし用也  
四海の國務も善事人の上を志す家と

天子は其れを東も西も陽も陰も賞罰し徳  
惟我れは先づわが奥告事者人の聖人深  
天下後世人の君人の長人の老を法戒せむ  
東照神君も輝寒孤獨にひて天阿をさみ  
いかに思ふは是に改め奉るとは作らばは二  
百五十年太平の同遊と上たも人驕奢を  
を極太切改め獲る法役人も徳徳を公教を  
て極美に不興向女中同徳を道徳仁徳をも  
はき徳きふきて立別れ事き改種一人一家を  
飛くは文をの勢形を運く其れを如何に  
性も運分用金月也と年貢法役の甚き  
若しと書て吾を稱へ徳を成せし用也  
四海の國務も善事人の上を志す家と

天子は其れを東も西も陽も陰も賞罰し徳  
惟我れは先づわが奥告事者人の聖人深  
天下後世人の君人の長人の老を法戒せむ  
東照神君も輝寒孤獨にひて天阿をさみ  
いかに思ふは是に改め奉るとは作らばは二  
百五十年太平の同遊と上たも人驕奢を  
を極太切改め獲る法役人も徳徳を公教を  
て極美に不興向女中同徳を道徳仁徳をも  
はき徳きふきて立別れ事き改種一人一家を  
飛くは文をの勢形を運く其れを如何に  
性も運分用金月也と年貢法役の甚き  
若しと書て吾を稱へ徳を成せし用也  
四海の國務も善事人の上を志す家と

天子は其れを東も西も陽も陰も賞罰し徳  
惟我れは先づわが奥告事者人の聖人深  
天下後世人の君人の長人の老を法戒せむ  
東照神君も輝寒孤獨にひて天阿をさみ  
いかに思ふは是に改め奉るとは作らばは二  
百五十年太平の同遊と上たも人驕奢を  
を極太切改め獲る法役人も徳徳を公教を  
て極美に不興向女中同徳を道徳仁徳をも  
はき徳きふきて立別れ事き改種一人一家を  
飛くは文をの勢形を運く其れを如何に  
性も運分用金月也と年貢法役の甚き  
若しと書て吾を稱へ徳を成せし用也  
四海の國務も善事人の上を志す家と





## 自序

陋撰大鹽中齋先生年譜稿本成る、即ち先輩諸賢の濶覽に供するの書を作り、又之を以て自序に代ふ。

肅啓 大鹽中齋先生年譜此頃漸く脱稿致し候につき奉供高覽候、御承知被下候通り、大鹽先生事蹟調査は洗心洞學會設立以來の計劃に有之、既に十年の星霜を経て史料も相當蒐集いたし、時々陽明誌上にも發表いたし参り候事に候へども、多く断片的に相成纏り申さず、因て大正四年頃より大鹽研究なる命題の下に筆を執り、昨年三月頃までに凡そ十二冊を書き上げ候、然るどころ之は命題の既に大鹽研究と稱する如く、批評論傳體と相成、史實としてよりは寧ろ講論に重きを爲すやに相見え、著者としての自分には言ふべきだけ存分に言ひ現したるには満足され候も、史實としての先生を顯はし、且つ

他の史實上に於ける先生を求むるものには些と變なるものと相成候事に氣付き、其方はそれきり終に之を止め、更に昨年四月大鹽平八郎先生年譜略を編纂するに決し起筆仕候、勿論材料は大鹽研究に現はれ候ものに取り候へども而も年譜となれば這は又容易ならざる困難を發見いたし候、由來年譜は事蹟人物相當顯著なるものにて却々困難も有之哉に候處、御承知の通り天保の一舉幕府役人の力めて事蹟を塗抹し、當時社會人心より先生を忘れしむるを以て一時の政策としたる上、當時の交友門人等の中にも或は累の身に及ばんを恐れて晦滅に力めたる後なれば、眞實文献の徵すべきもの少なく、其の僅にあるものは評定所吟味書裁決書の如き現在今日に存し候へども、それすら畢竟拷問の結果にあらざれば、臆病者の讒誣構陷到底悉く信すべからず、即ち巷間の傳説却て之より眞實を傳ふるものすらあり、是等の材料を基礎として作られたるもの天満水滸傳、天保太平記、鹽賊傳、梅匪凡、大鹽平八郎言

行録、大鹽平八郎實記、青天霹靂、鹽賊回天記、等數限りも無之候へども、傳説は傳説なり、年譜編輯に必要な年紀紛亂容易に明らむべくも之れ無く彼此缺點ばかりにてホト／＼困り候へども、尙ほ幸に先生の遺著詩文の如きあり、又多年の蒐收する所にして目下編纂中なる洗心洞外集あり、之を以て文献の缺漏を補ひたるも、而も亦是のみを以て百ヶ一にも足れりとすべからず、咬菜秘記、浪華騷擾記、行雲流水、洗心洞餘瀝は言ふに及ばず、口碑斷片苟くも先生に關するもの或は舸に乘じ、或は山に探り、漸くにして昨年八月第一稿を得たり、而も只僅に綱領のみ、本年一月又之を清書するに至れば、左支右吾却々思うて十ヶ一に及ばず、兎に角書き上げたるもの此の稿に御座候。

即ち以上の如く尋常人の年譜には無之候間、從而編輯方も随分勝手なる方法にて、普通年譜と異なる所有之、寧ろかゝる變態編輯法も年譜として許さる

るならば、確に年譜編輯上一型式の創造に御座候、其の意は左記にて御承知可被下候。

一、年譜中間々傳説を引用せる所あり。此れ蓋し一は正史を失ひたる先生傳に於て止むを得ざるに出でたる場合多し、而も亦一面には古老の諸説史實の前後と相照應して去るべからざる場合あり、尙ほ時に史實に關せず、單に當時の傳説として先生の年譜と共に之を存する以て、世相人情を解くの一端と見るべきが如き吾之を擧げたり、蓋し嚴格に言はんには神祕の外に偉人なく傳説の外に先生なしといふも妨げざれば也。

一、年譜中本文の年紀及び事蹟の出所を例證するが爲に、其の引用原書の一節を一字下げに畢く抄出採録せり、是れ此の年譜の一事一説と雖も苟くも著者の獨斷に依るに非ずして、史實傳説みな考證の據る所あるを示さんが爲にせり。

一、年譜中處々按語を加へたること多少意の存する所なり、而して按語に二種あり、或は事件の解説の爲にせるもの、及び著者一己の評論に係るもの、即ち解説を加ふるにあらざれば事件の眞想を解し難き場合あり、評論を用ゆるにあらざれば從來諸書の妄斷臆説間々人を誤るものあり、而して按語中又考證あり、引説あり、蓋し解説評論と雖も根據する所あるを示さんの意に出でたり。

一、年譜中時々歴史年表を附記し、或は人物事件の必ずしも先生と直接交渉なきものにして之を附載せる處あり、此れ當時の時代并に社會の形勢事情を細説する能はざる年譜に於て、一讀大抵時代背景を概見し得べく。且つ先生の學問事業が國家社會の隆替消長と如何の關係接觸あるかを示さんと欲してなり。

其他或は何、或は何、今畢く茲に言はず、即ち本書は先生の年譜にして評林

なり、又事蹟考にして傳説史なり、是れ他の年譜に異るところ、又本書に於て止むを得ざる也、而も多く衆説を聚めて敢て獨斷せざるは所謂述而不作の遺意に依り、力めて偉人の眞骨頭を傳へんとしてなり、若夫れ先生の大義高節の處に至ては、余の信する所に從て論斷し苟くも敢て譲らず、又竊に以て春秋の筆法に學ぶ所以なり。

若それ先生の學術に至つては、姚江の流を酌んで陽明王子の説未ず及ばざる所を究めて別に日本哲學の一派を起し、江西の學傳を欽仰して藤樹養山二子の博綜なるより鹽子學術の純正なるを開ける、先輩既に定論あり、弔民唱義の一舉空しく敗れて其鬼未だ祀られずと雖も、其學傳へて幕末には勤王の先驅となり、維新の際には民權の開宗を以て稱せられたる、一に先生學術の純正之を啓くにあらざるはなし、而して其說洗心洞劄記以下の遺著に味ふべく、年譜に細叙せず、蓋し一小冊子の能くする所にあらずして、著者別に劄

記標註の執筆中に屬するを以て也。

以上聊か陋撰年譜に就ての用意と態度を開陳せるものに御座候、思ふに先生之事蹟茲に盡くと爲すべからず、僕の淺學寡聞亦遺漏多かるべし、之を完成するは後賢の任也、余や只義人の事蹟の缺けたるを慨し、微力を測らず茲に此の事あり、敢て賢臺の瀏覽に供へ候、幸に御指摘御高教を得て全を爲さば幸甚之に過ぎず候。

然りと雖も僕の本書を編纂するに至れる、偏に先輩諸彦及び同好諸子の熱心なる援助に依らざるは無し、若し一々にして其名姓を舉げんには數十百にして足らず、故に今略に従ふも、其功勞に至ては蓋し洗心洞外集を讀むもの能く之を知るを得ん、外集は是等先輩同好諸賢の發見と余の探訪と相半ばす而して年譜實に材を外集に取る多し、是れ諸君子の力にあらずんば余一人の爲し得る所に非ず、此れ僕の最後に賢臺の左右に謝し、又併せて益を與へ工

を助けし同好諸子の勞に謝する所以の意を致す次第に御座候。

于時八月十三日天王寺村莊の東窓に吾此の稿を終るの日、世は米價騰貴、食糧恐慌、一揆蜂起各地騒擾、京都、神戸、大阪、次第に焼打起り、軍隊出動、人心恟々、門外類りに沙上偶語の人あり、即ち慨然として筆を抛つ。

大正七歲戊午秋八月十四日

洗心洞後學 石崎東國

### 大鹽中齋先生年譜略引

- 一、寛政五年二月二十二日先生。天滿川崎四軒坊ノ邸ニ生ル。
- 一、寛政十一年先生七歲父平八郎敬高歿ス。
- 一、寛政十二年先生八歲母清心院歿ス。
- 一、享和元年先生旬讀ノ師ニ就ク神童ノ目アリ。
- 一、文化二年先生十三歲江戸遊學ヲ志シテ果サズ。
- 一、文化三年先生十四歲初テ與力見習ニ出仕ス。
- 一、文化四年先生十五歲家譜ヲ讀テ志ヲ立ツ、志功名氣節ニ在リ。
- 一、文化五年先生十六歲阿州脇町稻田家臣眞鍋市郎歿ス。
- 一、文化六年先生十七歲西ノ宮ニ勤番ス、姫路藩士ト槍術仕合ヲ試ム。

- 一、文化七年先生十八歳武術奨勵ヲ上官ニ獻策ス。
- 一、文化八年先生十九歳定町廻役ニ勤仕シ海賊數十人ヲ捕フ。
- 一、文化九年先生二十歳功名氣節ノ志變ジテ儒學經濟ニ向フ。
- 一、文化十年先生二十一歳再ビ江戸遊學説アリ。
- 一、文化十一年先生二十二歳與力常供ノ貪婪ヲ懲戒ス。
- 一、文化十二年先生二十三歳紀藩及ビ岸和田藩ノ紛争ヲ裁斷ス。
- 一、文化十三年先生二十四歳退テ獨學シ初テ陽明良知ノ學ヲ得タリ。
- 一、文化十四年先生二十五歳是ヨリ公餘子弟ニ教授ス、其塾ヲ洗心洞ト云フ。
- 一、文政元年先生二十六歳祖父政之丞成余公卒ス、是年先生橋本忠兵衛ノ女ヲ娶ル。
- 一、文政二年先生二十七歳弓奉行近藤重藏ト交ヲ訂ス。
- 一、文政三年先生二十八歳初テ東奉行高井山城守ノ知遇ヲ得。
- 一、文政四年先生二十九歳知己近藤重藏ノ歸東ヲ送ル。

- 一、文政五年先生三十歳玉造與力坂本鉦之助ニ大阪城ノ防備ヲ論ズ。
- 一、文政六年先生三十一歳篠崎小竹ノ招宴ニ山陽ノ母梅枝ニ會フ、當時先生ノ聲譽高ク東大鹽西成瀬ノ日アリ。
- 一、文政七年先生三十二歳賴山陽京師ヨリ來リ、篠崎小竹ヲ介シテ先生ヲ洗心洞ニ訪フ、交情是ヨリ密ナリ。
- 一、文政八年先生三十三歳洗心洞入學盟誓七條ヲ制ス、四方從遊ノ士多シ。
- 一、文政九年先生三十四歳是ヨリ先キ先生肺患アリ、病屢々重シ、是年職ヲ辭セント乞フ聽サレズ。
- 一、文政十年先生三十五歳頭公高井山城守ノ命ヲ以テ切支丹邪宗門ノ黨ヲ捕索ス。
- 一、文政十一年先生三十六歳秋祖母西田氏歿ス、冬洗心洞ニ陽明先生ノ三百年ヲ祭ル。
- 一、文政十二年先生三十七歳高井頭公ノ命ヲ以テ猶更奸卒ノ市政ヲ蠹スル者ヲ糺彈ス。
- 一、天保元年先生三十八歳春高井公ノ命ヲ以テ破戒ノ浮屠ヲ沙汰シ、數十人ヲ捕テ海島ニ流竄ス○秋七月高井公養病ノ疏ヲ上ル、先生慨然辭職シテ招隱ヲ賦ス、世人其ノ急流勇退ニ驚ク男格之助續テ與カトナル○野一色信州先生ヲ聘セント請フ、先生應セズ○大藏永常海島入選ノ事ヲ以テ先生ヲ起サントス、先生病ヲ稱シテ從ハズ○九月尾州宗家大鹽氏ヲ訪フ、山陽途序ヲ作テ其行ヲ壯ニス○先生致仕シテ連齋ト號ス。

一、天保二月先生三十九歲專ラ學ヲ洗心洞ニ講ズ、是年學名學則並ニ讀書日ヲ定ム○此年林大學頭ノ家政ヲ教済ス、林氏厚ク之ヲ謝ス、○先生又江戸ニ行キ林氏ヲ訪フ、但シ此行一齋佐藤氏ニ過ラズ。

一、天保三年先生四十歲山陽來リ訪フ、先生之ト酒ヲ飲ミ歡談日ヲ盡ス、山陽請テ大學刮目ヲ見ル、先生又示スニ洗心洞割記稿ヲ以テス、山陽之ガ序ヲ作ラン事ヲ約ス、此秋山陽咯血シテ歿ス先生深ク之ヲ哭ス○六月先生湖ニ泛テ江西ニ藤樹先生書院ノ遺跡ヲ訪フ。

一、天保四年先生四十一歲四月洗心洞割記ヲ熟ニ刻ス○七月門人ヲ從ヘテ駿州ニ之キ割記一部ヲ富士山上石室ニ納メ、又伊勢ニ赴キ其一部ヲ神宮文庫ニ奉納ス、天下ノ學士儒生爭テ之ヲ求ム、時ニ眞儒新ニ興ルノ目アリ○八月關東暴風雨天下是ヨリ大ニ饑ユ○九月江西有志ノ招キニ應ジ藤樹書院ニ上テ大學ヲ講ズ、大流侯之ニ臨ム。○先生運齋ノ號ヲ中齋ニ改ム。

一、天保五年先生四十二歲客臘儒門空虛聚語刻成ル、是年正月門人白井英田等ヲ使シ一部ヲ神宮文庫ニ納ム○二月先生宇治山田有志ノ聘ニ應ジ神廟書院ニ上テ大學ヲ講ズ、聽ク者百餘人○七月大阪天滿大火、親戚門人ノ頓燒スルモノ多シ、先生幸ニ免カル○九月備前岡山ニ之キ熊澤蕃山ノ遺蹟ヲ訪フ、是ヨリ先キ割記ヲ閑谷巖

ニ納ム是ニ至テ訪フ○十月江西ニ行キ藤樹書院ニ孝經ヲ講ズ、此行江東ニ出テ武池二翁ニ從テ越溪ニ遊ビ、又還テ江州三十六城ノ要害ヲ講評ス。

一、天保六年先生四十三歲是年小田原侯幕閣ニ首班シ新政ニ志アリ、先生舉用ノ議起ル、先生内命ヲ以テ對策ス、或ハ拒ムモノアリ舉用ノ議遂ニ止ム○二月増補孝經彙註刻成ル○四月初記聚語ヲ世ニ公ニス、又同時ニ割記附錄抄ヲ刻ス○冬父祖ノ碑ヲ天滿成正寺ニ再建ス、蓋シ昨秋大火ニ當リ寺院燒失墓碑又燒燬セルヲ以テナリ。

一、天保七年先生四十四歲是年二月霖雨、六七月大風、天下飢饉是ヨリ甚シ○三月一心寺獄起ル、天滿與力悉ク江戸ニ召問セラレ、寺僧處刑、奉行革職、先生講ヲ廢シテ謹慎ス○四月跡部山城守東町奉行トナル門人二人自盡ス、先生ヲ江戸ニ讒スル者アリ○六月古本大學刮目ヲ熟ニ刻ス○秋甲山ニ上ル○西町奉行矢部駿河守江戸ニ移ル○天滿與力革調ノ説起ル、人心恟々○近年天變地妖多シ先生天文ヲ案ズ○門人ト武技ヲ洗心洞ニ習フ○十一月大阪市場ニ令シ他所積米ヲ制限ス京師飢甚シ○十一月廿九日江戸廻米ノ命下ル、奉行之ヲ差略ス○先生第一經濟策ヲ上ル、奉行聽カズ○先生發願救恤第二案ヲ上ル、奉行許サズ○十二月格之助男弓太郎生ル。



一、天保八年先生四十五歲正月洗心洞ニ治國平天下章ヲ講ズ。是ヨリ先キ先生ノ策奉行ニ用キラレズ。退テ窮民救恤ヲ富豪ニ計ル、第一案成ラズ。○先生更ニ六萬兩借入第二案ヲ計ル、富商聽カズ。○奉行徒黨強訴ヲ以テ先生ニ擬ス、先生慨然トシテ志ヲ決ス。○正月八日洗心洞義盟成ル。○二月一日洗心洞内ノ池水ヲ埋ム。○二日歳書全部ヲ五書堂ニ寄ギ以テ賑恤ノ資トナス。○六七八三日間本會所ニ窮民一人一朱宛一萬軒ニ一大施行ヲ行フ奉行干涉ス。○七日先生妻子ヲ離別ス。○十五日洗心洞ニ義盟ヲ會シテ一般方略ヲ授ク。○十七日夜擧兵ノ檄ヲ攝河泉播ニ頒ツ。○十七日平山助次郎背ヒテ密謀ヲ東町奉行跡部山城守ニ内訴ス。○十八日夜吉見九郎右衛門又叛キ二童子ヲシテ西町奉行堀伊賀守ニ出訴セシム。○十九日朝同志小泉淵次郎東總ニ斬ラル。潤田濟之助逃レテ洗心洞ニ歸リ事ノ發覺ヲ告グ。○先生途ニ門人ト兵ヲ擧グ、民軍從フモノ八百餘人、近國兵ヲ動カス十餘藩、兵火消セザル三晝夜、先生勝タズ焚死ス或云死セズ、支那ニ走ルト。

# 大鹽平八郎傳

洗心洞後學 東國 石崎酉之允著

寬政五年癸丑先生一歲

是年春正月二十二日先生大坂天滿川崎四軒坊ノ邸ニ生ル、先生幼名文之助後平八郎ト稱ス、初メ諱ハ正高後チ後素ニ改ム、字ハ士起連齋ト號シ又中軒ト云ヒ終ニ中齋ニ改ム、其塾ヲ洗心洞ト稱ス、連齋ハ魯仲連ノ義ヲ慕フニ取リ洗心洞ハ易ノ繫辭ニ洗心退藏於密ニ出ツ、其學王陽明先生ヲ祖述ス、平八郎後素、洗心洞中齋先生ヲ以テ聞ユ、父ハ平八郎敬高、母ハ某氏、其先源姓今川氏ニ出ツ、後降テ世々大坂天滿與力タリ祿二百石三十俵ヲ食ムト云フ。是時ニ當テ大坂城代ニ牧野備前守忠精アリ、東町奉行ハ阪部能登守廣高、西

元三千 百五十三 光格帝即位 十四年 將 川齊 西曆千七百 九十三 清國高宗 乾隆五十八年 椋軒子曰 大鹽子起適 尾浪子起適 敬回先生 皆ナリ起ト 皆ナリ著ト 七士起ト 根抑モトシ 若シカア



起又ハ士起  
ト二様ノ説  
アラバ勿論  
之ヲ辨明ス  
ルノ要アラ  
洞ノ但洗心  
山陽詩序ニ  
ハモアリト  
著者云、惺  
軒ノ説也  
七起ハ子正  
ト作ルチ正  
ト素子起  
後字ハ起  
名ハ第三  
ハ附論語  
ニ子夏素  
爲子夏素  
意ヲ問フ  
曰繪事後  
ト曰繪事後  
曰繪事後  
ト曰繪事後  
ト曰繪事後

町奉行ハ松平石見守貴強任ニアリ、大鹽氏世々東町奉行組與力タリ、敬高君未タ世ヲ承ケス、祖父政之丞成余公職ヲ奉ス。先生ノ生ル、外曾祖父西田某公之ヲ賀スルニ鶴書一幅ヲ以テス、蓋シ壽ニシテ其ノ英名九阜ニ揚ランヲ期スル也、後年先生詩并序アリ。

予誕辰即寛政五年癸丑春正月二十又二日矣、當時祖母之考西田某公賀之以鶴書一幅、我及長見其幅、問其由我考妣以得知之、爾來每誕辰之日、乃掛諸齋壁、以不忘其劬勞、而予庚寅之秋致仕前偶失之、搜索百方終不見其影、妾心竊以爲異矣、而遂致仕、今茲甲午春正月二十有一日、門生庫海松本體仁之老親長翁、遣體仁持書鶴二幀、以賀予四十初度、而亦當誕辰之前日、披覽之、則丹頂雪翎、恍然如再獲、向者所失之仙禽、喜而躍不亦宜乎、急軸之、其翌二十又二日時晨置諸壁間、眞作祖母考會所錫之觀、自今以之復備於不忘其劬勞之一助者也、雖然徒亦希其長壽我豈如俗人也哉、遂賦述志、書裡仙禽何處去、將走復向壁間旋。此生寧羨千年壽、頤頤九阜聲徹天。

西田氏モ亦  
東組天満與  
力ノ家也

長翁ハ即チ  
柴屋長太夫  
兵庫出町  
松本、本姓  
也、ノ門人

是年二月佐藤一齋江戸ニ出テ林簡順大學頭ノ門ニ入り其邸ニ寓シ、始テ儒ヲ以テ業トナス時ニ年二十二、四月簡順没ス、述齋入テ林氏ヲ繼グ、述齋ハ後年大鹽先生ヲ愛スルノ人也○是年六月二十一日林子平仙臺藩士兄林嘉膳ノ家ニ幽閉中死ス年五十六、六月廿七日上野人高山彦九郎正之筑後久留米藩士森嘉膳ノ家ニ暴死ス年四十七或云四十

〔年表参考〕 徳川家慶生（和漢年契）遣勅使中山愛親等于江戸、○魯西亞船來松前（新撰年表）松平定信に命じ豆相沿海を巡視せしむ○第二月佛國革命戦争起る○一月二十一日路易十六世死刑に處せらる佛國恐慌の朝、ロベスピエール首相となる、波蘭第二次分割を行ふ（萬國大年表）

寛政六年甲寅 先生二歳

是年五月十九日尾州宗家大鹽波右衛門正勝初名逸三郎出仕初テ御目見尾張大納言家臣食祿二百石按ズルニ大鹽氏ノ先ハ今川氏ニ出ツ、初メ駿遠參ノ大守今川義元ノ織田信長ト戦テ克タズ命ヲ桶峽ニ授クルヤ、其子氏真暗弱ニシテ父祖ノ領土ヲ保ツコト能ハズ、又屢武田信玄ノ爲ニ疆域ヲ蠶食セラレ遂ニ一門遁竄ス。時ニ其

妾ニ一男アリ今川波右衛門ト云フ、四方ニ漂落ス、時ニ德川氏ノ臣松本甲藏、  
本日權左、尾崎衛門等ト交ル、其薦ニ依リ參州岡崎城ニ至リ初テ家康ニ謁シ  
質ヲ委シテ仕フ、天正十八年小田原ノ役ニ當テ敵將足立勘平ヲ公ノ馬前ニ刺  
殺ス、德川公賞スルニ自ラ取ル所ノ弓ヲ以テシ、且ツ邑ヲ伊豆ノ塚本ニ賜フ。  
德川公已ニ天下ヲ勘定スルニ及ンデ越後柏崎ノ定番ニ補ス、後德川義直ノ旗  
下ニ隨ヒ尾張ニ移ル、姓ヲ改メテ大鹽波右衛門義勝ト云フ。寛永二年受ス  
善行公ト私諡ス波右  
衛門季子元和中大坂府與力ト爲ル。尾州大鹽家系圖ニハ大鹽六兵衛成一承應二年己九月松平  
隼人正殿大坂町奉行ノ節與力被召出トアリ、是或ハ元和  
中與力タル大鹽氏ノ養嗣子  
トシテ召出サレタルカ。之ヲ坂府大鹽氏ノ祖ト爲ス、以テ政之承成余ニ至ル、尾  
州宗家トノ間本末ノ往來故ノ如シ、先生外舅淺井中倫。淺井氏俗名太一郎本府  
騎吏而致仕即先生外舅讀  
洗心洞剽記ニ曰ク、洗心洞剽記  
附錄抄所載

灰間吾子祖先某君、爲駿侯今川氏□□、今川氏之亡也、遂以松平甲藏本日權  
左衛門尾崎衛門八萬、至參州岡崎委贊、小田原之役、有刺殺敵將足立勘平  
之功、乃賜御弓、復賜采地、其事乃詳見于家譜矣、其後臣屬于尾國、而其子

青天霹靂、  
大鑪言行、  
錄、大鑪中  
齊事蹟等皆  
此ノ傳説ニ

孫以至今、其季子某、元和年間分而爲本府騎吏、吾子乃其後也。  
是年正月奥州白河郡淺井領ノ農民數千人蜂起シ、大庄家其他領内八千餘家ノ  
富豪權家ヲ破壊シ騷動ヲ極ム。

〔年表參考〕三月立皇后（和漢年契、新撰年表）五月我民露國東部に、十一月又安南に漂着す○寛政  
以後安南呂宋地方の來舶貿易全く絶ゆ○清國廓爾喀を征す○波蘭人コシウスコ志士を糾合して故國  
を恢復せんとして成らず○七月廿八日ロマスヒール及び其黨殺さる○佛國溫和派の手に歸す（新撰  
年表）

### 寛政七年乙卯先生三歲

是年六月大阪東町奉行坂部能登守廣高寛政四年  
正月任命江戸町奉行ニ轉任、山口丹波守  
直清之ニ代ル。  
傳説云 先生ハ本阿州德島藩家老稻田九郎兵衛ノ臣眞鍋市郎或ハ次郎ニ作ル二男ニシ  
テ寛政某年ヲ以テ阿州美馬郡脇町岩倉村  
新町ニ生レ、三歲ニシテ母ヲ喪ヒ、母ノ  
縁故ニ依リテ大坂ノ親戚鹽田喜左工門ニ養ハレ、後七歲故アリテ天滿與力

文化五年ノ  
條參照。

田結莊十里  
初名但馬守  
約幼名不動  
太郎下稱人  
也、天保事  
變ノ後田結  
莊氏ヲ稱ス

大鹽平八郎ノ養子トナル云々。

按ズルニ從來流布ノ大鹽傳多ク之ニ從フ、然ドモ是皆非也。蓋シ大鹽政之丞  
初メ眞鍋家ニ生レ鹽田氏ニ養ハレ、後大鹽助左衛門ノ嗣トナルニ混同セルノ  
傳説也。

田結莊千里云 大鹽先生は大坂天滿四軒坊に生れたる人にして他より養子  
に來りしにあらず、只先生の家は稻田九郎兵衛と世々通家にして吉凶聘問  
毎に絶えざりし爲め此説を謬傳せしものなる可し云々。水戸服部鐵石開書

〔年表參考〕 將軍家齊獵ニ小命原（和漢年契新撰年表）松前漁夫滿洲に漂著す○清國貴州苗反す○英  
吉利來聘○第四月一日巴里再び一換起る○英將喜望峯を取る○波蘭第三次分割（萬國大年表）

### 寛政八年丙辰先生四歳

相傳フ先生ノ父母曾テ豊國神ニ禱リ先生ヲ誕ム、生レテ數歳英智慧敏既ニ吞  
牛ノ氣アリ、長スルニ隨ヒ讀書ヲ好ミ武ヲ嗜ミ進歩驟ニシテ老成ヲ壓スルノ  
概アリ云々。河村貞山著醫世傳  
俗大鹽平八郎傳

先生後年端午之詩并序アリ附記ス

有男兒家、五月五日、盛植旌旗于門、是邦俗也、竊考其所以、蓋爲父母者、私  
祝其子爲彥聖、而登高貴之位、建旌旗之飾、出入于其門之意也、然而熟視  
古今、雖有僥倖得志者、而爲彥聖者幾希、不爲彥聖而得志者、車服旌旗  
之美、不稱其德、故君子不取也、况乎無能而與螻蟻雀鼠俱盡者、非顯背父  
母之初志、而何也、固爲子弟之罪也、然而父母徒知私祝之、而不知教導之、  
故往々俾陷于匪人、如此、然則亦可謂父母無過乎、此日五日也、又看各門  
旌旗之翻、賦絕句以示塾童、戒慎恐懼、又爲父母者宜懲創、  
旌旗亦是桑蓬意、誰不暗誦天下英、試看成童弱冠後、半爲鸚鵡半猩々。

〔年表參考〕 琉球入貢○清國高宗帝傳位千太子、是爲仁宗、年號改嘉慶（和漢年契新撰年表）清  
國海賊敗屈、白蓮教匪起る○佛將奈教翁伊太利に戦ふ（萬國大年表）

### 寛政九年丁巳先生五歳

是年三月西町奉行松平石見守貴強天明七年罷メ、十月任命、四月成瀬因幡守正宣西町奉行

トナル。

先生後年孩提親在マスノ日ヲ追思スルノ詩アリ、七歳兩親ヲ亡フ感慨殊ニ深シ。

丁亥五日追思親在日以賦之

曾傍慈親貪啖粽。壯年嘲俗議論高。反思口腹孩提日。一點良知未敢塵。

是年頼山陽叔父杏坪ニ從テ東遊昌平覺ニ學ブ時ニ年十八、山陽ハ先生一代ノ知己此人ニ過ギタルハナシ。

〔年表參考〕 露人冠蝦夷、集古十種成（新撰年表）米船肥前に漂着す、英船蝦夷に來る○清國七經孟千刻成る、湖南苗事略定す○第三月四日奈敦翁アルプス山を越ゆ○シヨン、アダム合衆國大統領なる（萬國大年表）

### 寛政十年戊午先生六歳

是年二月東町奉行山口丹波守罷メ水野若狭守忠通之ニ代ル○十二月城代牧野備前守寛政四年八月任命罷メ松平右京亮輝和代テ城代トナル。

# 欠

# 欠

公坦姓ハ廣  
羅筑梁ト號  
ス。

子起ハ即チ  
先生也。

齋藤拙堂ハ  
津藩ノ侍講  
先生ノ友人  
ナリ。

爛醉發浩歌。

聲如金石剖。

公坦安抱關。

儲錢代五畝。

好詩錦爲腸。

招客酒盈罇。

子起廉潔吏。

樂與貧儒偶。

豪蕩外禮法。

醉發獅々吼。小竹齋詩抄卷一

是年九月城代松平右京亮罷メ十月青山下野守忠裕之ニ代ル。

〔年表參考〕 愛宕山火、修大猷君百五十年靈忌（和漢）孝義錄成○先是劉之協等倡邪教（新撰）伊能忠敬始て經緯度を加へて日本圖を作る○台衆國政廳をフィラデルフィアより華盛頓に移す○愛爾蘭を大貌列願に併合す（萬國）

## 享和元年辛酉 先生九歲

寛政十三年二月五日改元

是年九月二十二日林道信士没ス、基昌山長安寺西成郡南濱

ニ葬ル祖父政之丞之ガ碑ヲ立ツ、俗名享年

ヲ缺ク、其何人タルヲ知ラズ、

齋藤拙堂說話云 平八郎八九歳の頃或時數多同僚の子弟と共に天満橋近く遊び居しが、恰も木枯吹く冬の初め頃、俄に響く半鐘に某町の出火と聞付け小供等の騒ぎ廻る處に、早馬にて乗附け來たれる代官篠山十兵衛の配下のもの、

今しも御山の大将の如くイキリ居る平八郎をばあふないと云ひさま横抱きにして橋の袖に持ち出して其儘馳せ去りたるを、平八郎跡にて齒を喰しばかりて残念がり、代官の下郎風情に辱められしとて跡を追駆け、其夜篠山十兵衛馬前の堤灯を打破り、前刻の讎を打ちたりと意氣揚々引揚げたるが、後日此事發覺し祖父政之丞甚だ當惑したりと也。此ノ事從來ノ傳説ト大同小異ナレドモ倉田續翁ノ壯時親シク拙室ヨリ聞ケル處ヲ以テ茲ニ記ス。

是年四月西町奉行成瀬因幡守罷メ佐久間備後守信近之ニ代ル。

是年六月奥州山形上ノ山高畑ノ農民一揆シ地頭ヲ襲撃ス。

年表參考 天王寺火、修聖堂(和漢)本居宣長卒、奈教翁獨逸を破る(新撰)馬加撒人我國に漂着す○清人始て我が刊書佚存叢書を輸出す○貴州苗叛す○ジエフアーン合衆國大統領となる、露帝アレキサンダー一世即位(萬國)

### 享和二年壬戌先生十歳

傳説云 先生十歳人ト爭ヒ遂ニ之ヲ斬ル、祖父公ニ憚ル所アリ表面久離親戚ニ托ス、既ニシテ三年ヲ經テ後、養子ノ體ニ装ヘ以テ家ニ迎フ云々。

按スルニ先生養子ノ説亦是ヨリ出ヅルカ、蓋シ其及傷云々ノ事信ジ難シ、或ハ篠山十兵衛ニ係ル葛藤ノ事ヲ訛傳スルモ知ル可カラス、親戚預ケノ説ニ至テハ養子説ト混同シ易シ、左ノ如キ亦一説ナリ。

山口家代續云。大鹽平八郎は鹽田忠左衛門の子也。忠左衛門は山口六助次男鹽田鶴龜助養子也母は某寛政七年二月三日没す、春道淨覺信女と云ふ、平八郎三才母を亡ひ父の養育を受け、十一歳にして蜂須賀侯家老稻田九郎兵衛尻濱役所の奉行詰所に給仕する三年、奉行矢上津良甲藤野左衛門、平八郎の機智膽略に服す、依て父に勸めて學ばしむ、忠左衛門因て平八郎を携て大阪親戚天滿大鹽家に移る、平八郎時に年十三歳なり、忠左衛門大坂に没す、年七十五と云ふ。

此年六月二十七八日關西大雨、近畿大洪水、天滿橋天神橋ヲ初メ、其外市内五橋流失

此年十月城代青山下野守罷メ稻葉丹後守正謀之ニ代ル。

年表參考 住吉祠火、秋七月城江攝河洪水(和漢)箱館奉行を置く○教匪亂始て平々○第二月アミ

エン和議成る、奈翁終身執政官となる○瀛車發明(萬國)

享和二年癸亥是年正月間 先生十一歳

是年心學者中澤道二翁沒ス。

山崎美成世事百談云 心學は中江藤樹の翁問答より起る云々。

淵岡山先生書簡云 此頃世間に心學と云ふ事を唱へり、先師在世の頃曾て唱へざる名目なり、然るを末葉の者共猶ほ文盲なる者を導かんとて心學と云ふ、心學を手近く示してより以來學問の總號とす、聖人の學、無上無外の義を以て一貫の宗を示す、天下の學問大道に違ふ時は異端なり、曲學なり、俗學なり、外道なり、旁門なり、然らば今日の學問大學と唱ふるも其名義尤なり、其大學は即ち心學なれば又心學と唱ふれど名義には當らざるにあらず云々。

按ズルニ心學ノ開祖石田梅巖ハ藤樹先生沒後ノ三十七年貞享二年ヲ以テ丹波ニ生レ四十五歳初テ心學講座ヲ京師ニ開ク、是ヨリ心學都鄙ニ興ル。延享元年沒

淵岡山名ハ  
宗誠稱源右  
衛門稱中江  
藤樹先生ノ  
門人也

ス年六 京師ノ人手烏堵庵其門ニ出テ又盛ナリ。天明六年沒ス年六 中澤道二ハ其門人ナリ、同ジク京師ノ人後江戸ニ講説ス、文化文政ニ布施松翁アリ、天保ニ柴田鳩翁アリ、全ク王學ニアラズト雖モ朱王ヲ折衷シ、神儒佛ヲ融合シテ庶民教育ノ一機關タリ、猪飼敬所十三才手烏堵庵ニ學ブ、敬所ハ大鹽先生ノ儒門空虛聚語ヲ校讎セル人也。

年表參考 麻疹流行○攝州獻白雉(和漢)奈教翁稱帝布告天下(新撰)馬賊太白山に猖獗を極む、海賊沿海に冠す(萬國)

文化元年甲子享和四年二月十九日改元 先生十一歳

是年正月城代稻葉丹後守罷メ阿部播摩守正由之ニ代ル。

二月五日懷德堂主竹山中井積善沒ス年七十五、佐藤一齋其門ニ出ヅ、先生幼學ノ師ニ就テ人或ハ中井竹山ニ師事スルガ如ク云フ者アルハ臆説耳。

大鹽中齋事蹟云 平八郎幼少嘗テ街上ヲ行キ、商家ノ二童途上ニ擔荷ヲ抛テ拳擊格闘スルヲ見、走リ寄リテ二童ノ髻ヲ執リ汝等何ゾ其主用ヲ忽ニシテ私



争ニ勇ムヤ、速ニ止メスンバ吾當ニ爲ス所アル可シト叱咤一番スルヤ、二童之ニ驚キ争ヲ止メテ倉皇謝シ去レリト、以テ彼ガ少小既ニ東坡ノ所謂食牛ノ氣アルヲ想見スルニ足ル也。井上哲次郎博士著陽明學派之哲學大綱傳

〔年表参考〕羽州象潟山崩地陷○春三月勅奉帶千字佐祠及七廟(和漢)魯西亞使節來長崎○檢戸口○自乾隆三年秦、隴、楚、蜀、豫大亂至是平(新撰)奈教翁世襲帝となる○カント死す(萬國)

### 文化二年乙丑是年八月間先生十三歲

是年十二月十五日叔父吉次郎没ス、南濱長安寺ニ葬ル、諡號ヲ覺信院秀雄ト云フ實ハ養子石川氏也是年先生東都遊學ヲ志シテ果サズ。

田結莊千里云 先生幼ニシテ資性夙慧書ヲ讀ム一見輒チ心ニ記ス、長ズルニ及デ穎悟語ヲ出セバ長老ヲ驚カス、年十三ノ時慨然トシテ以爲ラク、男子苟クモ爲スアラント欲セバ宜シク江戸ニ遊ビ、廣ク師友ヲ求メザル可ラズト、一夕竊ニ家ヲ脱シテ江戸ニ奔ル、途ニ山崎邊ニ至ル、既ニシテ黄昏勞レテ林樾ノ間ニ憩フ、會々一人ノ旅僧アリ、破衲抖擻同ジク來リ憩フ、卒爾トシテ平八

郎ニ問テ曰ク、汝ハ必ス父母ニ告ゲズシテ來レル者是ヨリ何處ニ行カントスルヤ、平八郎曰ク學問ノ爲ニ大阪ヨリ江戸ニ赴カントスル者也ト、僧慇懃諭スニ江戸ハ少年勉學ノ地ニアラザルヲ以テシ、且ツ速ニ歸テ父母ノ心ヲ慰安セバ餘師アラント告グ、平八郎依違シテ聞カズ、僧卒然大喝シテ曰ク父母ヲ遺テ國ヲ奔ル汝ノ學トスル所何レニカ在ルト、乃チ其攜フ所ノ如意ヲ執リ忽チ先生ノ頭骨ヲ打ツ、流血淋漓タリ、先生怒テ共ニ鬪ハント欲シ頭ヲ揚テ僧ヲ求ムルニ既ニ飄然行ク所ヲ知ラズ、先生是ニ於テ大ニ感悟スル所アリ、終ニ大坂ニ歸ル、後年學成リ徒ニ授クルノ日自ラ頭瘻ヲ指シテ是レ吾ガ師ナリト、常ニ以テ門人ヲ戒ムト云フ。水戸服部鐵石問書

〔年表參考〕露使に論し通商を許す○始て朝鮮使を對馬に受け倒さ爲す○第三月奈教翁一世伊太利王を兼ね○第十月トラファルガーの戦英將ネルソン戦死す(萬國)

### 文化三年丙寅先生十四歲

是年先生初テ東町奉行詰所與力見習ニ出仕ス。

先生與力見習出仕。

松田正助ハ  
先生春願ノ  
再肆也。

式部少輔後  
ニ信濃守ト  
云フ、文化  
五年閏六月  
六論行義ナ  
市中總代ニ  
印施ス、序  
文アリ、慰  
親切名奉行  
ト稱セラル

中島典謨筆記云 我カ祖父豹三郎東祖は大鹽家とは親戚にて又平八郎門人なりしが、祖父の話に平八郎出仕の始めは十三四歳なるべしと語られし云々。

松田正助聞書云 平八郎見習後ニテ當番所詰ノ時、某邑ノ庄家無調印ノ訴狀ヲ捧ク、平八郎之ヲ詰ル、庄家叩頭シ今朝出宅ノ時印ヲ首ニ繫ケシト覺ヘシガ今之ナシ、然レモ訴狀ノ事急ナルガ故ニ法ヲ犯シテ無印ノ書ヲ上ルト。平八郎叱シテ曰ク汝首ニ掛クルヲ知テ心ニ掛クルヲ知ラズ甚タ輕忽ノ至リナリト言懲セシトゾ。

是年八月東町奉行水野若狹守罷メ、平賀式部少輔貞愛之ニ代ル○十月城代阿部播磨守罷メ、松平能登守乗保之ニ代ル。

年表参考 東都大火○琉球入貢(和漢)魯西亞掠蝦夷地方(新撰)江戸大火焼亡二十八萬餘戸死亡千二百餘人○清國貴州苗平○第八月フランシス二世羅馬王位を去る神聖羅馬帝の終リ(萬國)

### 文化四年丁卯先生十五歳

是年先生始テ家譜ヲ讀ミ、慨然功名氣節ヲ以テ祖先ノ志ヲ繼ガント欲スルノ

先生家譜ヲ  
讀テ志ヲ立

志アリ、居恒鬱々トシテ刀筆ニ從事シ、獄吏ノ班ニ伍スルヲ以テ深ク耻トナス、他日書ニ云フ。

僕之志有三變焉、年十五嘗讀家譜、祖先即今川氏臣而其族也、今川氏亡後、委贄于我神祖、小田原役、刺將于馬前、而賞之以御弓、又錫采地于豆州塚本邑焉、當大阪冬夏役、既耄矣、不能從軍以伸其志、而徒戍越後柏崎堡而已、建業後、終屬尾藩、而嫡子繼其家、以至于今、季子乃爲大坂市吏、此即我祖也、僕於是慨然深以從事刀筆、伍獄卒市吏爲耻矣、而其時之志、則如以功名氣節、欲繼祖先之志者、而居恒鬱々、不樂之情、實與劉仲晦未得志時之念、亦奚異、而非謂器比焉也、而父母僕七歲時俱沒矣、故不得不早承祖父職也。寄一齊佐 藤氏書中

是年慧星見ユ

年表参考 慧星見○永代橋落(和漢)魯夷再掠蝦夷○置松前奉行(新撰)清國李長庚海賊ミ戦ヒ卒

ナ○奴隷賣買禁止條令發布○フートン初テ瀛船にてハドソン河を航す(萬國)

眞鍋市郎歿

文化五年戊辰是年六月間先生十六歲

是年春三月六日阿州脇町岩倉村 字新町稻田家々臣眞鍋市郎役付日 帖格沒ス、享年九十四歲、實ニ大鹽政之承成余ノ先考也。

按スルニ初メ政之承生レテ三歳同藩親戚鹽田鶴龜助ニ養ハル、鶴龜助隱退後政之丞ヲ携ヘテ大坂天滿大鹽助左衛門ニ寄リ病ヲ養フ、寶歷十一年己九月六日大鹽氏ニ沒ス、逾テ三年明和元年申十一月二日鶴龜助室又沒ス、共ニ大坂南濱三味院大鹽家墓地ニ葬ル、政之丞孤トナル時ニ年十二歳、政之丞即チ助左衛門ニ養ハル、助左衛門安永二年六月廿六日沒ス、政之丞大鹽氏ヲ繼グ、即チ先生ノ祖父也。山口善郎演說覺書并ニ三宅甘谷氏書翰

鹽田鶴龜助隱退後喜左衛門相續、檢見役勤務中天明不埒ノ廉ヲ以テ永暇トナリ、大坂天滿ニ移ル、鶴龜助死亡後山口善郎計テ弟忠左衛門ヲ跡目相續トナス、忠左衛門大坂ニ移リ沒ス年七十五ト云フ、美吉屋事鹽田五郎兵衛ハ其後也。鹽田家系圖

三寅ハ元寅ノ草書ナリ  
ノ市郎誤  
ル也、市郎誤  
機也、市郎誤  
次也、市郎誤  
誤也、市郎誤  
也、市郎誤  
依也、市郎誤  
五也、市郎誤  
テ生ルニ當

眞鍋市郎ノ後富五郎繼ク、文政九年九月沒ス、其姉加賀女三宅小一郎ニ嫁ス、小一郎天保四年沒ス、弘繼ク、安政四年四月六日沒ス、行年五十、三宅家過去帖ニ大鹽政之丞ヲ録ス、即チ左ノ如シ三宅氏過去帖

文政三寅年六月二日  
行年六十八歳  
曜山院誠意日涼居士  
眞鍋市郎様弟  
大坂天滿與力大鹽政之丞  
孝子大鹽平八郎

是年八月西町奉行佐久間備後守罷メ、齊藤伯耆守利道之ニ代ル。

年表参考 等持院火○仙臺鑄錢(和漢)英吉利船隻長崎○靖國奥海軍(新撰)松平展秀自殺○塙保己一歿○砲臺を江戸海及豆相に設く○セームス、マガソン大統領となる(舊國)

文化六年己巳先生十七歲

先生少小既ニ功名氣節ヲ以テ祖先ノ業ヲ繼ガント欲スルノ志アリ、是ヨリ文武ヲ兼修スト雖モ、最モ軍學武藝ニカヲ用フ、柴田勘兵衛ノ門ニ入テ佐分利流

ノ槍術ヲ學ンデ入室ノ弟子トナリ、兼テ中島流ノ砲術ヲ學ンデ又其奧義ヲ極ム、就中槍術ニ至テハ其秘法ヲ究メテ、後來槍ヲ取テハ關西第一ノ稱アルニ至レリ青天霹靂并ニ洗心洞餘瀝

先生曾テ某年六月西宮勤番在勤中ニアリ、偶姫路藩家中某ナルモノ寶藏院流ノ師範ト稱シ、來テ西宮勤番詰所同心等ニ教授ス、先生之ヲ聞テ脾肉ノ嘆ニ耐ヘス、偶々人ノ先生ニ其ノ術ヲ角センコトヲ勸ムルモノアリ、先生即チ之ニ應ジ、即チ行テ素槍ヲ取テ之ト立合フ、所謂他流試合ナル者也、是ニ於テ先生最モ得意ノ技倆ヲ發揮スルヲ得タリ、其八月先生之ヲ以テ柴田氏ニ報ズ、蓋シ其愉快ヲ師ニ分タズシテ止ヲ得ザリシナリ、而モ柴田氏之ヲ聞テ驚キ且ツ喜バス、即チ書ヲ送テ其輕卒ヲ責メ、且ツ將來ノ猪勇ヲ戒ム、先生是ニ於テ慚悔書ヲ致シテ之ヲ謝ス。

御教諭之逸々難有奉承知候、誠に短才之私前後を不顧、在番中閑隙ニ堪兼殊執心之藝技膝元ニテ稽古之響耳に徹し風と誘に乘し試候段、御委督之御

教諭にて今更後悔實破師命候、多罪何卒御宥恕被成下候様奉願候、心中一決中々迷之差起り候儀杯は無御座候、聊驚し候儀は御座候へ共、何分思慮無之段、幾重にも御仁恕奉願候、此度は勤番所も違ひ稽古は不仕罷在候間、此段御安意可被下候、尤右之御咄不申上御教諭等無之候は、又々後悔を再び招き可申儀も可有之處、御示教にて過改以後相心得候様可仕候、尙其内歸阪出席仕拜面萬々可申上候得共先者右御受御詫迄草々如此御座候以上。  
九月十八日

按ズルニ此逸事不幸年紀ヲ缺ケドモ、西宮勤番ノ若年者ノ勤務ニ屬スルヲ以テ、暫ク茲ニ之ヲ繋クルノミ。

年表參考 三月立皇太子（和漢）英人攻合衆國兵連三年（新撰）長崎砲臺修築○松前津輕海岸に雄火臺を設く○清和日本書紀論語微を載歸る（萬國）

### 文化七年庚午先生十八歳

是ヨリ先キ邊境事多シ、露艦屢々蝦夷地ヲ暴掠シ、英米船艦又頻リニ筑紫ノ

青天露塵ハ  
土佐人島本  
仲道ノ著明  
治二十年出  
版ニ保ル

地ヲ擾亂ス、幕府諸侯ニ令シ沿海ヲ防備セシム。是年英船復々常州ニ來ル、幕府急ニ富津洲崎ニ築キ、又浦賀城島ノ砲臺ヲ修メ、會津白河ヲシテ北地ノ警備ヲ嚴ニス、而士風多クハ頽廢未ダ之ヲ振作スル所アラザル也。先生深ク以テ天下ノ憂茲ニ在リト爲シ、慨然救濟ノ志アリ。

青天露塵云 先生其初テ事ルヤ、首トシテ長官坂部能登守ニ稟シテ曰ク、方今士風漸ク頽レテ武事ノ忽ニスベカラザルコトヲ知ラズ、人々皆劍槍弓銃ノ事ヲ措テ顧ルナキニ至レリ、是レ大ニ慨クベシ、一旦變故アルニ會ハ、之ヲ何トカスベキ、思ハザルベカラズ、是以テ小人願クハ之ヲ振作スルノ方ヲ講セント欲ス、然レモ武事ヲ攻メザルヤ尙シ、今俄ニ之ヲ學ブヲ教ヘテ急ニ成功ヲ期スルトモ其能ハザルヤ必然ノ數ナルヲ以テ、願クハ貸スニ時日ヲ以テシ、今ヨリ三年ヲ期シテ各其業ヲ修メシメ、然後ニ貴下目ヲ考試ヲ開テ優劣ヲ判セシメラルレバ士風於是乎振ハント、能登守固ト武技ニ長ジテ頗ル氣慨アルノ人、以テ大ニ之ヲ可トシテ過ニ諸士ニ令スルニ其言ノ如クセシカバ、之ヨリ士衆

各劍槍銃弓其好ム所ヲ學ンデ怠ラズ、越テ四年ヲ以テ能登守之ヲ親試スルニ及ベバ皆昔日ノ觀ヲ更メ武技大ニ進ム、即チ褒ヲ與ヘテ之ヲ賞ス、實ニ當時大坂ノ士衆多ク武技ニ練達シタル者ハ、皆先生率先ノ賜ナリ云々。

按スルニ此逸事一般傳説ノ一致スル所也、只傳フル所年紀ヲ繫ケザルヲ以テ其時代ヲ詳ニセズ、且ツ坂部能登ハ寛政初年ノ奉行ニ係リ、其後能登守ヲ稱スル者今城代公松平乗保アリ、而モ頭公ヲ越テ直ニ之ヲ城代公ニ稟白スルハ義ニ於テ當ラズ、若ソレ只城代松平能登ノ時代ニアリト判セバ或ハ可ナルヲ見シ、即チ暫ク茲ニ繫クル所以也。

是年六月城代松平能登守罷メ、大久保安藝守忠真之ニ代ル。

〔年表參考〕 高野山火(和漢)十一月水滸徳川治紀上奏大日本史を獻テ○和蘭佛帝國に合併す○墨西其革命(萬國)

### 文化八年辛未<sup>是年二月間</sup>先生十九歲

是年先生職ニ定町廻役ニ勤仕シ、海賊三十余人ヲ捕フ、蓋シ勤役初頭第一ノ

功名ト稱セラル。

傳説云 先生年十八九ノ頃市中盜難頻出シテ賊未ダ得ラレズ人心洶々タリ。兩組與力同心只奔命ニ勞ル、ノミ、時ニ先生火防町廻役ニ奉スレテ、未ダ本役ニアラス職司至テ輕シ然レドモ一旦事ニ當レバ誠意熱中シテ止マザルハ其性也、先生以爲ラク市面物騒老職盡瘁其賊未ダ獲ラレザル是レ尋常盜賊ノ業ニアラズ必ズ由アラン、吾微職ト雖ドモ之ヲ得ザルハ公ノ耻也ト、即チ寢食ヲ忘レテ心竊ニ之ヲ期ス、既ニシテ先生ノ炯眼早ク其ノ海賊ノ所業ナルヲ看破シ、遂ニ偵シテ有馬家留守居神道某ト稱スル怪賊ヲ捕フ、奉行糺彈終ニ其實ヲ得タリ、賊實ハ妙見剛右衛門又一ニ親船覺右衛門ト云フ、海賊ノ張本也、是ヨリ先キ多年瀬戸海ニ據リ商船漁船ヲ掠奪シ居タルモノ、近年搜查嚴ナルヲ以テ船ヲ商船ニ擬裝シ、近海ニ漂泊シ市中ヲ暴掠ス、船中與黨三十餘賊アリ、變裝自由蓋シ近代海賊ノ巨頭ト云フ、次テ皆ナ捕ハレ、市民初メテ塔ニ安ンブルヲ得タリ、是ヨリ先生ノ英名初テ高シト云フ

岡田梅莊筆記  
大鹽後素記傳

〔年表參考〕 朝鮮遣使來（和漢）露船理井尻に來ス○大槻茂實に蘭書を翻譯せしむ、洋學官是に始る（萬國）

### 文化九年壬申先生二十歲

是ヨリ先キ先生既ニ功名氣節ヲ以テ立タント欲スルノ志アリ、故ヲ以テ專ラ武技兵略ヲ講スルヲ以テ任トナス、未ダ深ク經學儒術ニ及ブニ暇アラザル也。既ニシテ職ニ與力ノ班ニ列シ親シク治獄刑政ノ間ニ閱歷ヲ累ヌルニ及ベバ、誠心熱中必ズ其事ヲ誠ニシ、其處ヲ得セシメズシテ止ム能ハザルハ先生ノ性ナリ。必スヤ其職司ヲ完ウシ其ヲシテ過無カラシメンカ、經學儒術併セテ講セザルヲ得ズ、先生又始テ學問ノ要ヲ感ズ、是ニ於テカ志望再變ス。

向者之志欲立而不能立、依違因循、年踰二十、吏人未嘗有學問者、故雖有過失、無益友誼之者、其勢不得不發、欺罔非僻驕謔放肆之病也、而無是非之心、非人、竊自問於心、則作止語默、獲罪於理者蓋夥矣、要與在苦杖下、赭衣一問耳、而無羞耻之心、非人、治被罪也、則不可不治己病也、治病奈何、

先生志再變  
ス。

當從儒以讀書窮理而後愈矣。故就儒問學焉。於是夫功名氣節之志、乃自一變矣。寄一齋佐藤氏書

〔年表參考〕 關東地大震（和漢）寛政諸家系譜成（新撰）四月關老松平定信致仕○露兵高田屋嘉兵衛を捕ふ○九月十五日奈翁露都莫斯科に入る露人清野○十月五日奈教翁露都を退く（萬國）

### 文化十年癸酉是年十一月間先生二十一歲

是年十月晦先生句讀ノ師篠崎應道沒ス、年七十七、天滿天德寺ニ葬ル、應道字ハ安道、郁州又三島ト號ス。小竹承弼家學ヲ繼ク、時ニ年三十三ト云フ。

先生既ニ慨然節ヲ折テ經學儒術ニ志ス、自ラ云フ就儒問學焉ト、而シテ後世其師傳ヲ知ル者ナシ、或ハ云フ東都ニ遊學シ林氏ノ門ニ入ルト。

傳說云 先生祖父ノ許ヲ得テ遊學ノ途ニ上ル、途ニ鈴鹿山ニ及ブ頃二賊ニ會フ、先生神色變セズ、之ト闘テ一賊ヲ取テ壑ニ投シ、一賊ヲ捕ヘテ之ヲ樹ニ縛シ、鬻ヲ斷テ懇々之ニ人倫ノ大本ヲ諭シ、其悔悟罪ヲ謝スルヲ待テ之ヲ放ツ云々。

又云 先生既ニ東都ニ入り、親族ノ介ヲ得テ贊ヲ林家ニ執リ其塾ニ入ル、日夜勵精研磨學大ニ進ム、述齋大ニ望ヲ屬シ諸生ヲ誡ムルヤ必ス學問躬行宜シク平八ニ則ル可キヲ以テス、其學成リテ歸ルヲ送ルヤ汝ニシテ一タヒ帷ヲ上國ニ下スニ至ル、余モ亦聊カ面目ヲ施スニ足ルト云々。

又云 先生ノ林門ニ在ルヤ諸生數輩先生ノ進境著ルシキヲ嫉視シテ止マズ、恰モ好シ陽春三月墨堤櫻花ヲ賞スルニ托シ、先生ヲ欺キ誘フ、既ニシテ至レバ、即チ強要シテ吉原仲ノ町松葉樓ニ登ル、先生終夜獨坐燭下ニ獨吟百韻ヲ作ル、其ノ八代洲河岸ノ邸ニ歸ルニ及ンデ之ヲ述齋祭酒ニ呈スト云々。

又云 先生ノ林氏ノ塾ニ在ルヤ大學ノ息耀藏塾中ニ出入シテ諸生ヲ遇スル無情也、諸生之ヲ惡メドモ祭酒ヲ畏レテ敢テ發セズ、一日偶々先生同友ト學事ヲ論シテ喧諍ス、祭酒先生ヲ召シテ嚴責ス、先生曰ク謹テ命ヲ奉ズ、而モ善ヲ責メ非ヲ正スハ同窓進學ノ第一路必スシモ以テ塾規ヲ犯スニ至ル可カラズ、然ルニ茲ニ只一公子ノ權ヲ恃ミ勢ヲ挾ンデ諸生ニ臨ムモノアリ、塾規ニ

林耀藏名忠  
耀藏ト號ス  
生ノ第二子  
即チ後  
也ノ鳥居甲斐

關セスシテ諸生更ニ之ヲ害トスルモノアリ、幸ニ祭酒閣下ノ尊慮ヲ請フト、大學頭解スル能ハズ故ヲ問フ、對ヘテ曰ク子ヲ知ルハ親ニ如クハ無シト申候ト。大學頭是ヨリ耀藏ヲ戒ムト云フ。

大鹽中齋事蹟云 中齋が江戸に遊學せしは未だ果して何歳の時なるやを知らず或は十五歳といひ、或は二十歳といふ、其の佐藤一齋に與ふる書意を考ふるに後説是に近きが如し、其留學の年數に就ても或は三年といひ、或は五年といひ諸説一定せず、何れにせよ彼は年少の時數年間江戸に滞在して述齋に師事し其非凡の才學を露はせり、中齋自ら祭酒林公亦愛僕人也といへるは其邊の消息を知るに足れり云々。井上哲次郎氏日本  
關明學派之哲學

按スルニ前ニハ十三遊學果サルノ説アリ、而シテ説者千里翁聞書ニ林家ノ門ニ入レリト稱スル者アルハ謬傳ナリト斷ジ、其先生ト林家トノ關係ヲ言フヤ別ニ林家整理先生調金ノ説ヲ擧グ、故ニ或ハ又林公愛僕ノ意茲ニ出ヅト解スルモノアリ、然ラバ東都遊學ノ事皆後人假托ノ説カ、何ソ其傳説ノ久シク

シテ逸話ノ繁キコト斯クノ如キヤ、而モ未ダ此ノ疑案ヲ解クノ史料ナシ、暫ク傳説ヲ存シテ茲ニ之ヲ繁ク。

是年十二月西町奉行齋藤伯耆守罷メ水野因幡守正篤之ニ代ル。

〔年表參考〕 七月十四日後櫻町上皇崩ズ壽七十五（和漢）清國李文成黨天理教匪變起ル明年平ケ（新撰）露船松前に來リ我が漂民ミ露囚を交換す○清人七經、孟子考文補遺を載來る○自由大戦争歐洲聯合軍奈教翁に抗す（萬國）

### 文化十一年甲戌先生二十二歳

大鹽平八郎傳云 天滿街ニ一傘工某ト云フ者アリ、傍ラ常供ヲ業トス、常供トハ與力同心公用派出ノ時隨從シテ賤役ヲ執ルモノ、稱ナリ、某常ニ與力同心ノ名稱ヲ假テ勢ヲ市リ威ヲ露ギ、貧民ニ高利ナル金錢ヲ貸シ價限ニ及ンデ辨スル能ハザレバ酷虐至ラザルナク之カ爲ニ家ヲ喪ヒ産ヲ敗リ或ハ妻子ヲ賣テ其責ヲ免カル、平八郎之ヲ聞テ憤ニ禁ヘズ、人ヲ以テ慫慂ヲ通シ百兩金ヲ借り、封金ノ儘架上ニ舍キ期過グレドモ久シク還サズ、某督促火ノ如シ、平八

醫世俗大  
平八郎傳  
云フ、  
治二十一年  
貞山河村與  
所一耶著ハス



郎曰ク可也。一日之ヲ庭内ニ呼入レ封金ニ利子ヲ添テ其面前ニ投シ、惡聲ヲ發シテ曰ク、汝平日與力同心ノ威ヲ恃ミ非分ノ高利ヲ貪リ貧民ヲ苦シム、其罪決シテ饒スベカラズ、今此金ト汝ノ首ト交換セン其レ天誅ヲ受ケヨト、刀ヲ描テ起ツ、某首ヲ地ニ埋メ泣テ罪ヲ謝シ哀ヲ請フ、平八郎纔ニ怒ヲ寛メ縱チ遣ハス、某之ヨリ既往ヲ悔イ頓ニ其行ヲ改ムト云フ。

〔年表參考〕 三月鞍馬山火○六月加茂臨時祭再興(和漢)露船蝦夷に來り境を定めんこまか乞ふ○二月和蘭人來聘子○三月三十一日歐洲聯合軍巴里に入る五月三十日巴里和約成る○十一月一日維納會議○奈敦翁帝エルバ島に流謫せらる(萬國)

### 文化十二年乙亥先生二十三歲

是年四月城代大久保安藝守罷メ松平右京大夫輝延之ニ代ル○八月西町奉行水野因幡守罷メ荒尾但馬守成章之ニ代ル。

大鹽平八郎傳云 曾テ紀州及ビ岸和田二藩ノ間經界ノ爭議アリ、以テ大坂ニ訴フ、事數年ニ及ンデ滯滞決セズ、蓋シ紀州ノ幕府ノ親藩ニ係リ權勢比ナシ、

積年ノ疑獄  
一朝ニ決ス  
公正廉直  
憚ラス

東廳ノ當案者頗ル之ヲ憚ル、故ヲ以テ其ノ判決ニ苦シメルナリ、遂ニ轉ジテ平八郎之ニ當ル、審査未ダ其月ニ及バズ、之ヲ裁シテ非分紀藩ニアリト爲シ、岸和田藩ノ勝訴ニ歸ス、人其ノ公平ヲ稱ス。

又云 嘗テ滯滞ノ一訟事アリ、上司平八郎ニ命ジテ之ヲ論決セシム、原告某暮夜密ニ果子一筐ヲ平八郎ニ餽リ以テ理ヲ得ンコトヲ求ム。明旦平八郎廳ニ臨ミ兩造者ヲ訟庭ニ審問ス、双方互ニ支證ヲ執リ長短ヲ爭フ、平八郎反覆難詰原告竟ニ辭屈シテ罪ニ伏ス、積年ノ疑獄一朝ニ決ス。平八郎乃チ彼ノ果子筐ヲ出シ笑テ同曹ヲ顧ミテ曰ク、諸君果子ヲ好ム是レ訟獄久ウシテ決セザル所以也ト、蓋ヲ開ケバ黃白其中ニ填テリ、一坐赧顏言フ所ヲ知ラズ。公正廉直憚ラザル此ノ如シ。

按ズルニ以上ノ諸説、皆高井山城守先生任用ノ後ニ繫ク。蓋シ吟味役ノ職司ニ係ルベキヲ以テナリ、只傳説年紀ノ徵スベキナシ、果シテ前後ノ如何ヲ知ラズ、暫ク茲ニ繫ク、若夫事實ノ真假如何ニ至テハ公正廉直憚ラザル傳説ヲ證

スベキ左券多シ、左ノ如キ又其ノ一例也。

此香を播摩屋利八と申ものより、此方留守中持參さし置歸候、不埒之事に候へ共、不辨故之儀と被推候間、丁内へさし戻し遣候、今後心得違無之様申渡し置可申、此度者内分にて右様取計遣し候事。

大鹽平八郎

御池通四丁目年寄へ

〔年表參考〕 夏六月和勢紀濃城洪水（和漢）去年中山愛親公薨○海邊測量圖成（新撰）畿内東海大水○朝鮮餓う米一萬石を以て之に賜ふ○第三月廿日奈翁エルバ島を逃れて巴里に入る、勝たず再び捕はれセントヘレナに流竄す○神聖同盟成る（萬國）

文化十三年丙子是年八月間先生二十四歳

是ヨリ先キ先生儒ニ就テ問學スル所アリ、而シテ當時儒ノ授クル所訓詁ノ學ナラザレバ必ス詞章ノ末學ノミ、未ダ其ノ實學ナルモノアラザルナリ。是ニ於テ先生宿昔經學儒術ノ志頗ル失望ナキヲ得ズ、乃復退テ深ク自ラ獨學ス、

先生志三變  
初テ王學ニ  
入ル

偶寧陵ノ呂坤ノ呻吟語ヲ得テ之ヲ讀ム、恍然トシテ覺ルアルガ如シ、乃チ又寧陵學ノ思想淵源ヲ求テ其ノ姚江王陽明ヨリ來レルヲ知り、而シテ我邦藤樹蕃山二子ノ學問事業又茲ニ基クヲ發見シ、是ヨリ奮テ陽明王子ノ學ニ入ルヲ得タリ。即チ他年書ニ曰ク。

僕年踰二十、就儒問學焉、功名氣節之志一變、而其時之志則猶以襲取外求之功、望病去而心正者、而不能免輕俊之患也。乃與崔子鐘少年之態適相同、而非謂材及焉也、而夫儒之所授、非訓話必詞章矣、僕儉暇慣習之、故不覺陷於其窠臼、而自與之化、是以聞見辭辯、掩非飾言之具、既在心口、而侈然無忌憚、似病却深乎前日矣。願與其志徑庭、能無悔乎。於是退獨學焉、困苦辛酸、殆不可名狀也、因天祐、得購舶來寧陵呻吟語、此亦呂子病中言也、熟讀玩味、道其不在焉耶、恍然如有覺、庶乎所謂長鍼去遠瘡、而雖未能全爲正心之人、然自幸脫於赭衣一間之罪矣。自是又究寧陵所淵源、乃知其亦從姚江來矣。而我邦藤樹蕃山二子、及三輪氏之後、關以西、良知學既絕矣。故

無一人講之者焉、僕窃復出三輪氏所編刻古本大學及傳習錄坊本于荒廢中、更稍知用功乎心性、且以喻諸人、於是夫襲取外求之志、又既一變矣。

寄一齋佐藤氏書

是年四月、東町奉行平賀式部少輔罷ノ、彦阪和泉守紹房之ニ代ル。

年表參考 國友熊當蘭法に倣ひ氣炮を造る○大槻玄澤蘭學凡論成る○清船下田に泊す○十三經勘校記成る(萬國)

### 文化十四年丁丑先生二十五歲

先生此ノ頃ヨリ公餘廳中子弟ノ囑ニ應ジ文武兩道ヲ教授ス、既ニシテ一旦其門戸ヲ開クニ及ベバ實學ノ令譽高ク、城内外ノ有志子弟多ク先生ノ門ニ集ル、其ノ規模猶ホ小ナリト雖モ、東都ニ於ケル平山行藏ノ實用館ト東西相對ス、是レ他年幕府ノ一敵國タル洗心洞學堂ノ濫觴也。

大鹽中齋事蹟云 天保二年に於ては中齋屢々有志者の需めに應じ市中近在に出で、講筵を開き、遂には尼崎及び高槻の藩士に招聘せられて出講するに至

洗心洞學堂ノ濫觴

れり、彼が一僕を從へ馬に跨りて尼崎街道を來往するや、道路の人其嚴たる威貌を見て大鹽先生來ると云はざるはなし。

按ズルニ先生ノ開塾ハ年紀明カナラザレドモ、是ヨリ先キ文化八九年ニ橋本忠兵衛名貞字ハ含章同十一年ニ竹上萬太郎弓奉行組同心等ノ門人トナリシハ評定所文書ニ記スル所ニシテ、次テ白井孝右衛門名履字ハ尙賢庄司義左衛門東組同心等來リ學ビ

吉見九郎右衛門、渡邊良左衛門ノ從學ヲ見タル等、文化十三年早ク既ニ門人數十人アリシヲ知ルベシ。先生近藩諸生ノ招聘ニ應ジタルハ後年ノ事ニ屬スベキモ、近藩書生入學セルモノ多ク時ニ公餘門人ノ宅ニ講筵ヲ開ケル如キハ文化文政中既ニ屢々之レ在ルガ如シ。又先生ノ威貌アル諸說皆之ヲ云ハザルハナシ。

洗心洞餘瀝云 大鹽の容貌ですか、中々美男で御座りました、身の丈は五尺五六寸、少し瘡せぎすですが凛とした風采はそりや立派なものです、頭の鬚は短かう結うて御座りましたが、色は白い方で眼はあまり太くなく少し釣

洗心洞餘瀝  
ハ先生門人  
正田竹翁ノ  
談話筆記ナ  
リ、竹翁名  
時親通稱、  
之助明治三  
才二以テス  
才ナニテス  
部ニ以テス

笑鷗樓筆談  
ハ木村芥舟  
也ノ談話筆録

祖父政之丞  
成余公卒ス

つて居りましたから、少し怒を含まれた時などはどんな者でもびくつきまじ  
た。

笑鷗樓筆談云 岡本黄石翁の話に予が少壯の時面會したる諸先輩のうち體貌  
俊偉にして殊に立派なりしは渡邊華山と大鹽後素の二人なり。誰が見ても大  
國の藩老なるべしとの感あらしむ。吾輩共に立ちて慚かしく思ふ程なり。

年表参考 春三月太子受禪是爲仁孝天皇秋九月即位冬十二月立皇后○三月京兩大雹(和漢)清船  
五島に漂着す○合衆國大統領ゼームス、モンロー職に就く(萬國)

### 文政元年戊寅四月廿二日改元 先生二十六歲

是年夏六月二日祖父政之丞成余公卒ス。享年六十有七、天滿成正寺ニ葬ル、  
諡號ヲ耀山院誠意日涼居士ト云フ。成余公初メ阿州眞鍋氏ニ生ル、三歲鹽田  
氏ニ養ハレ、鹽田氏又成余ヲ攜テ大鹽氏ニ寄ル、鹽田氏没スルニ及ンデ成余  
公大鹽氏ニ養ハレ、王父大鹽助左衛門卒シテ其後ヲ承ク、時ニ年二十一。其子  
平八郎敬高早世ス、先生ハ即チ其嫡孫也。成余性謹恪厚ク尾州宗家ニ奉ジ。

又阿州ノ親戚故舊ニ報ユ。其職司最モ公平上下ノ輿望ヲ得タリ。先生ノ聲譽  
アル其一半ハ乃祖ノ餘澤ニ非ザルナシ。

田結莊千里談云 平八郎一たび遊學を志し脱走して意を得ず、既に郷に歸る  
と雖も、祖父は尋常ならぬ嚴格の人とて平八郎の後來を戒飭し反省せしめん  
と欲し、此を別室に幽し、暫らくの間外出を許さず(中略)折しもあれ、或  
日大鹽家へ出入の書肆河内屋吉兵衛維新前の奇人にて四方の志士に交遊多し  
中村敬字翁曾て此の傳を作る(原註)なる者の  
見舞の爲に來るに會す、平八郎此に圖書を借り以て逍遣の具と爲さんことを  
請ふ、吉兵衛貸すに「周易折衷」を以てす、平八郎刻苦勉強遂に通讀十數回

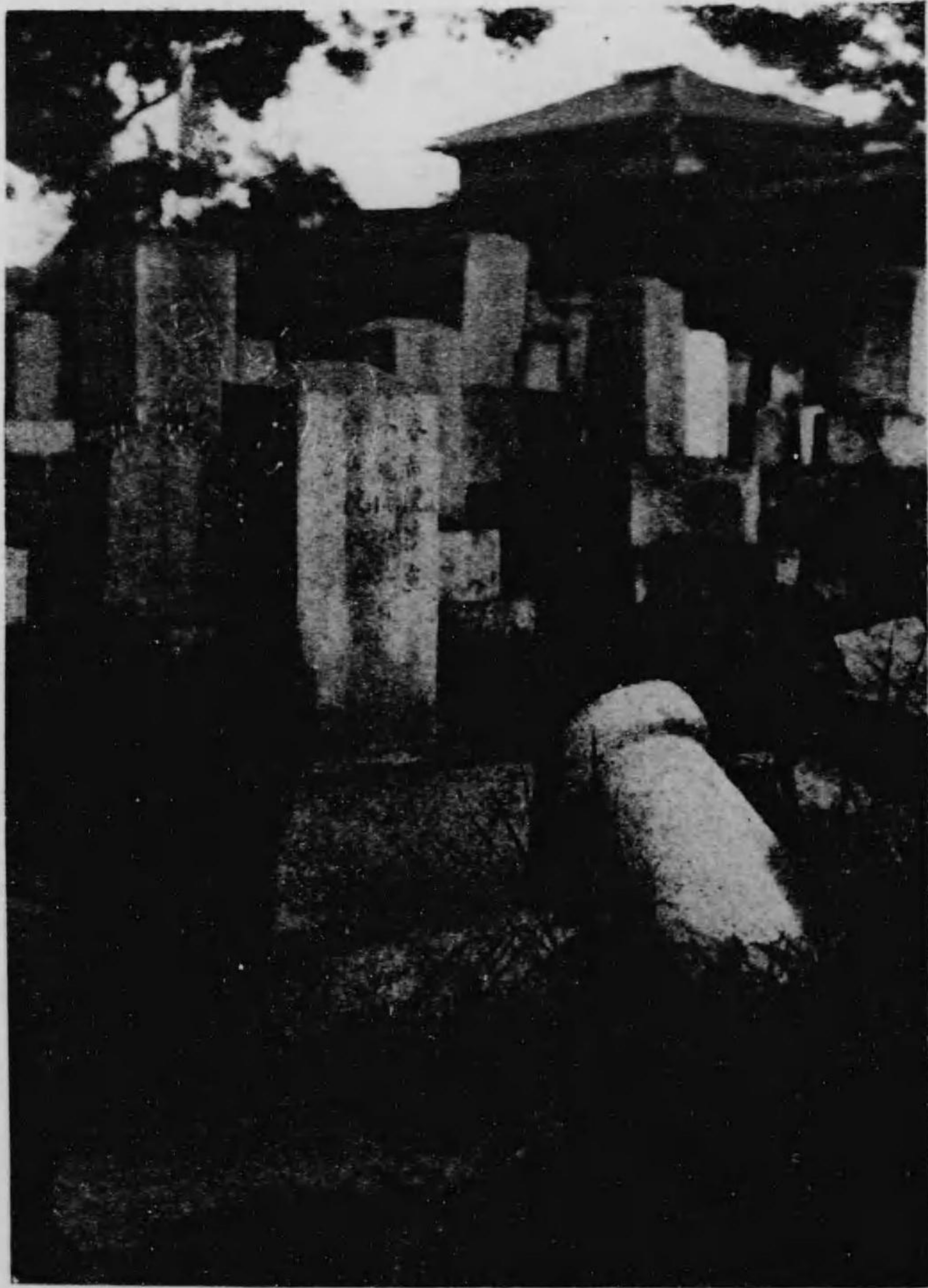
に至る、吉兵衛後又呂新吾の「呻吟語」を貸與するに及んで平八郎愛讀手を  
離さず、大に喜で曰く聖學の階梯此の一書にありと終に暗誦するに至る、後  
ち祖父其幽屏を釋くに及んで古本大學及び傳習錄陽明全集を研鑽す、是れ平  
八郎が陽明學に私淑するの濫觴也と。

大鹽平八郎傳云 祖父公ノ不起ノ老病ニ罹ルヤ、平八郎ヲ召シ即チ遺命シテ

曰ク我命既ニ今日ニ迫レリ、一言耳ニ留マラバ我が遺訓ニ背ク勿レ、夫レ人幼ニシテ學ブハ壯ニシテ之ヲ行フタメナリ、汝今ヨリ家職ヲ襲カバ才器等倫ニ抽ンヅトモ驕慢ニシテ人ヲ輕侮スル勿レ、抑モ與力ハ卑職タルモ一地方ノ訟獄ニ參與シ生殺ノ權ヲ有スルモノナレバ、一點モ偏頗愛憎ノ處斷ナク公務ヲ重ンジ正道ヲ履ミ名ヲ後世ニ流ヘ辱ヲ祖先ニ貽ス勿レ、暇日ハ專ラ文藝武術ヲ講ジ以テ文弱武愚ノ毀ヲ免カレ、積年苦學ノ効ヲ顯スベシ、其餘ハ渾テ汝ノ心衷ニ在ルベシト言訖テ命絶ツ云々。

按スルニ前者ハ脱走遊學ヲ果サハリシ當時幽屏戒飭ノ教訓ニ係リ、後者ハ遊學中ヲ召還シタル死期ノ遺訓ニ係ル。傳説ノ事實ハ紛糾シテ幾多ノ矛盾ヲ免レザルモ、祖父成余公ノ謹嚴ナル性格ト先生教養ノ用意ヲ見ルニ足ル。

是年七月、先生祖父公ノ喪ニ會シ、祖先塋域ノ城北基昌山長安寺ノ舊碑摧壞墓誌又讀ムベカラサル者アルヲ見テ改メ造リ、併セテ成余公ノ諡號ヲ刻ス。銘ニ云。



南濱祖先之墓



嗚呼歲月久、舊碑摧壞盡矣、其文字不可少概見也、余竊思子孫不認先塋之所在、乃換舊以新、次叙各厥諡號、而刻爾焉、其春岳我高祖父喜内、本覺其弟助左衛門、耀山我祖父政之丞、覺信我叔父養子石川氏、吉次郎也、文政元歲次戊寅秋七月、大鹽平八郎謹建。

春岳院清空	春	寬延二年三月廿九日
本覺院不二日性	本	安永二年六月廿六日
耀山院誠意日涼	耀	文政元年六月朔日
覺信院秀雄	覺	文化二年十二月十五日

是年、先生般若寺村庄屋橋本忠兵衛養女ひろ女ヲ納テ妾トナス、時ニひろ女年二十一歳、嫁シテ名ヲゆうト改ム、實ハ曾根崎村大黒屋和市ノ二女、鹽田五郎兵衛妻ノ妹也。ゆう性温良貞淑ニシテ學藝アリ、先生ノ事業半ハ女史内助ノ力ニ依ルハ時人ノ嘆賞スル所也。

洗心洞餘瀝云 大鹽の家内のことで御座りますか、私が塾に居りました頃に

先生初テ妾  
ナリテ納レ  
テ家政ヲ託  
ス

おのうと申ます妾が置いて御座りました、此の人が又大そう豪い人で大學を詣記して居られました位で、折節は先生に代て中庸や史記の講義を致されました。ハイ誰の娘で御座りますか其事は聞洩しましたが、年は其頃二十歳許りで美人と云ふ程では御座りませんが、流石に確りして居りました、多分此人が後に本妻に爲たのだと聞て居ります。

年表参考 行大嘗會○始鑄二分金(和漢)英船來浦賀(新撰)蘭人來聘○大學劉權之卒(萬國)

### 文政二年己卯是年四月間先生二十七歳

是年二月、書物奉行近藤重藏楓山文庫改築ノ事ニ關シ、執政田沼主殿頭ト議協ハズ大坂弓奉行ニ貶セラレ浪華ニ入ル、重藏時ニ年四十九、先生ニ頼ル所多シ、友交至テ厚シ。

大鹽平八郎傳云 坂城ノ弓奉行近藤重藏ハ豪邁ノ士ナリ、疾ク平八郎ノ英名ヲ知シ、其膽力ヲ試ミント欲シ一日之ヲ官舎ニ迎フ、至レバ則人ヲシテ魚籃ニ鱉一枚ヲ盛リ之ヲ平八郎ノ面前ニ置カシメ、謂フ子ヲ煩ハス之ヲ宰割セヨ、

弓奉行近藤重藏浪花ニ任ニ就ク。

平八郎曰ク、小人固ヨリ宰スル法ヲ知ラズ、重藏曰ク只意ニ任セテ切斷セヨ、平八郎乃チ厨刀ヲ假ラント請フ、曰ク子ガ刀ヲ以テスベシ、平八郎忽然トシテ曰ク、小人ノ刀ハ疲鈍ニシテ用ニ中ラズ、願クハ君ノ佩刀ヲ假ラン、重藏語塞ガリ勢止ムヲ得ズ刀ヲ解テ與ヘシカバ、平八郎其鋒ヲ折テ菜刀ト爲シ、鱉ノ甲ヲ解カズシテ之ヲ細切シ、直ニ鍋中ニ投ジテ爛熟セシメ、主客飽マデ之ヲ喫シ片甲モ殘サリシト云フ。

是年十月、先生近藤重藏ヲ柴田勘兵衛ニ紹介ス、蓋シ近藤氏先生ニ依頼シ總領某氏富藏ヲ柴田氏道場ニ入門セシメンガ爲ニシテ、柴田氏之ヲ諾シ、近藤氏又大ニ喜ブ、當時之ニ關シ城中ニ多少煩鎖ノ交渉ヲ要セシモノ又一ニ先生之ヲ斡旋セリ、當時往復書ノ一ヲ左ニ附記ス。

先生 (柴田勘兵衛ヲ指ス)

平八郎

第一書 先頃者近藤氏御紹介申上、早速無御異辭御逢被下、近藤氏も甚大慶に被存、猶宜申上候様頼被入候、其後右總領御入門、訂日七日と權八郎を

以て御傳聲相達候處、彼方に少々差支御座候、十一日後ご申上置、十五日に治定候間、尊家には御差支無御座候哉承知仕度間十五日御差支有無、乍御面倒被仰知可被下奉願候、

第二書 近藤より別紙之通申越、右者私内存承り候儀にて、備電覽候事如何と奉存候へ共、私より一己之極を返事仕候儀も難仕、夫故近藤へは内々にて備御覽候間、多湖氏杯に寄宿人之有之候事も御座候様相覺候に付、右御振合私へ御内々に被仰知可被下候、尊家には右様之事に無御拘唯御實意を以御世話被下候御中へ、箇様之御伺申上候ては、却て厚き思召を傷け候に當り候へ共、近藤氏も物堅き人柄故、中途にて一己之計ひ難仕間、無<sub>レ</sub>據右申上候間、多湖氏之御振合御聞せの程奉願候。 十月十一日

年表參考 畿内近國地震○鑄革命銀(和漢)

### 文政三年庚辰先生二十八歳

是年三月西奉行荒尾但馬守罷メ、四月内藤隼人正矩佳之ニ代ル、時ニ三十許歳

高井山城守  
東町奉行ト  
ナル

阪本鉉之助  
名俊貞字叔  
幹、鼎齋ト  
高シ又咬  
柴軒ノ號アリ

○十月東町奉行彦阪和泉守罷メ、十一月十五日高井山城守實徳山田町奉行ヨリ轉ジテ大阪東町奉行ニ就任ス、時二年六十餘、他ニ比シテ榮達太ク晩カリシモ、人トナリ温厚忠良君子ノ風アリ、兼テ頗ル鑑識ニ富ム、先生ノ拔擢任用ヲ得タルハ實ニ高井公ニ始終ス、人之ヲ熊澤蕃山ノ備前芳烈公ニ於ケルニ比ス、眞ニ水魚ノ値遇ト云フ可シ。

當時先生職ニ目安改吟味役ニ奉ズ、偶天満市中ノ富商某ノ身代限處分事件ナル者アリ、先生之ガ局ニ當リ、其ノ再調査ヲ幕府ニ請ヒ以テ之ヲ救済ス、事兩奉行交迭ノ際ニ係ルト公論議議先生聽訟ノ一斑ヲ知ルモノアルヲ以テ之ヲ抄出ス。

咬柴祕記云 貞が初て大鹽へ柴田と同道にて參候處、座に付て未だ時候の挨拶済まぬ先に、今日は能く御出被下殊に寄ると私も切腹を致して今日は御目に懸れぬ所にて仕合に切腹にも不及御來訪を相待候と申口上也。勘兵衛も貞も驚入、夫は如何様の仔細に候哉と尋候處平八郎申には天満市中の町人某と申



者、身代衰微致外より貸銀滞之目安を付られ、此者家は先代相常の富商にて公義へ御用金を差出候家に候へば借財返済方御定御切金に被仰付候筈之處、此者願には近來殊之外不仕合にて難澁仕借財夥敷相嵩み候。此度之訴訟假令切金に被仰付被下候共此口相濟候はば忽又訴訟仕り候、借財之口又も有之追々及訴訟候上は悉く切金に被仰付被下候ても、其切金丈けの員數迎も返辨仕候義出來不申候間、此後度々御若勞罷成候半より何卒此度先訴之者へ身代限を被仰付被下候様にと願出候に付其趣江戸表へ伺に相成候處、出羽守殿差圖は先代御用金をも差出候者之子孫右様及難澁候段不便之事に候得者、右用金御下げ被下候て宜候へ共其者一人にも限り不申、左様の口追々候ては當時悉く御下げ金と申御都合にも相成兼候間、乍不便願之通身代限りと可申渡御下知有之候此時分平八郎目安改にて吟味役也夫を承り直に早天に西奉行内藤隼人正へ參り、内々直に申上度事有之候間御逢被下候様にと申込候へ共、支配違之組與力故一應にては逢も無之を強て申込み逢候て内藤殿へ申候は、借私頭は高井山城

水野出羽守  
忠成文政元  
年八月閣老  
津侍從也

守にて御座候へ共是は漸く此頃被來未其氣質をも存不申、御前には先年當地御目付を御勤にて御登りの節より御繼母様に殊之外御孝心之由を兼て承はり居候、忠臣は孝子の門に出ると申語も有之故、今日公義御爲筋之義を申上度候得共甚無束敷事フカシキにて客易に難參候、其仔細は今度江戸表御下知相濟候切金一條に御座候、御裁許を相もとき候事にて不通事には候へ共、先代御用金を差出候もの、子孫へ身代限被仰付家名をも斷絶爲致候義は甚以不可然、其仔細は公義御用金を差出候も皆子孫の事を存候て家の爲、子孫の爲にも可相成と存候大切至極に存する寶を差出候、然る處如何に當人の願なればとて家名及斷絶候身代限を上より被仰付候ては、此後大阪に御用金被仰付候節豪富ども何れも難澁申立蜂を拂候様にいやがり可申、浪華は實に公邊の御金箱ども可申所に候得共、何れも難有心服仕候て御用金を差出候様に無之候ては御爲不可然、若御前御在勤中杯に御用金之御沙汰有之候は、何を以て市民共を御諭し被成候哉、此義を存候へば此度之御下知は御爲に甚不宜奉存候、

私儀は與力之身分にて下賤之者故、上之御容貌を奉拜候事も出來ぬ身の上に候得共、御爲筋之義には一命抛ても相働き申度奉存候。御前は別而是迄數年御昵近を御勤被成、日々朝暮御側に被爲在候事に候へば、此平八郎よりは一入御爲大切に可思召候、斯く下賤之平八郎すら御爲を存じ此度一條御裁許をもどき候罪不埒と有之節は唯今即座に切腹にても可仕と覺悟仕て申上候事に付、何卒篤と御勤辨被成下萬一御裁許をもどき候御答參候へば此の平八郎一人其科を請、即座に切腹仕外々様へは其科を掛申間敷と申述候得者、隼人正もはらくと落涙被致、申所逸々尤至極に候、左候へば無程山城守へも會合之上可及相談、其上何とか取計可申、其方は頭を差置、先に此方へ申間候とあつては山城守存意も如何に候間、此方は不承姿にて可罷在候間、是より早々山城守方へ參り右趣山城守へ可申述、左候へば後刻山城守より相談可有之候間、其節程宜く可取計、今日身代限申渡之義は何れ延引可致旨被申再應江戸伺之取調と相成、昨今老輩の者兩三人被申付、俄に必至に成取調候旨話なり。

り。云々

年表参考 西國大水○高橋作左衛門滿洲の書を譯して献す○浦賀砲臺を浦賀鎮臺に移す○葡萄牙革命起る(萬國)

### 文政四年辛巳先生二十九歳

是年春三月弓奉行近藤重藏勤方不相應ノ故ヲ以テ免黜セラレ普請入トナル、是ヨリ先キ近藤重藏第宅ヲ築キ地樓ヲ起ス頗ル倨傲ノ風アリ。先生其ノ或ハ奇禍ノ乘センコトヲ慮リ屢々之ニ忠告スル所アリ、重藏聽カス、又千種大納言ノ女ヲ娶ル、時人之ヲ憚ル。是ニ至テ免黜セラレ普請入トナツテ歸東ス。不遇ノ老雄又遂ニ此ノ地ニ志ヲ得スシテ去ルヲ送レハ先生ノ意悵然トシテ傷マサルヲ得サルモノアル可シ。丈夫非無涙、不瀧別離間、伏劍對樽酒、耻爲遊子顔ノ詩情眞ニ兩雄別離ノ狀ヲ説盡ス、按スルニ先生ハ交道廣キ人ニ非ス、特ニ當時職司尙卑ク、而モ矜持自ラ高ク、峻嚴苟クモ人ニ許サス、實ハ許スニ足ルモノ少ナキナリ、玉造組與力阪本鉉之助ノ如キ當時ノ人物ナリ、

近藤重藏免  
黜セラレ

而シテ此ノ年始テ相交ハル。

咬榮秘記云 貞が大鹽平八郎識面の始は文政四辛巳年の四月頃、同組柴田勘兵衛在勤中にて平八郎は此勘兵衛の槍術門人にて免許の弟子也。夫故勘兵衛方へは折々參居候、其折節貞も行合せ始て識る人になり、同席にて近日勘兵衛同道にて平八郎方へ可參筈に約束有之候。是は勘兵衛存念に貞が少々學問にも志し候事あり、善き朋友にも可有之と引合候事にて、其後平八郎方へ同道ありて種々の物語承り、其後引續て貞一度一人罷越物語承り、書物などは何なりとも貸與候様に申に付武備志を十卷計りづ、借り候て一覽申候。其後染々出合も不致、追々盛に被用、役用も繁多の様子にて面會も態と致遠慮居、其後八年平八郎へ本間重左衛門本多爲助も刀劍望にて致同道一覽申候、其節申聞候は貞に八ヶ年前初て識る人に相成候趣申聞貞は年月等忘却候得共、あの方記憶人にて能く覺居候事と感心申候。以後は一年の内三兩度も面會の事も有之、又は絶て面會不致年も有之候、人の噂にては殊之外短慮暴

怒も有しやうに申候へども、貞などが接眉の容體にては人の申様にも見請不申、至極禮節等は正しく萬端の話も至極面白く其度に益を得ること多く、文武ども貞等より遙に優りし人と思ひし、歳は貞より二つ劣り候、如何様妄に政道を是非する僻は有之候へ共、貞等が身には至極益ありと存居候云々。

年表參考 清國宣宗帝立年號道光 新撰 伊能忠敬實測圖成る○南部津輕の北成を止め又城島砲臺を撤す○第五月五日ナゴレオン、ヘレナ島に死す○メキシコ獨立、希臘獨立 戰爭(萬國)

文政五年壬午 是年正月間 先生三十歳

是年七月城代松平右京大夫罷メ松平周防守康任之ニ代ル。

先生三十歳前後卑職ナレトモ吟味役ノ樞要ナル地位ニアリ、繁劇ナル公務ニ執掌シ、又公餘ニハ塾中子弟ニ文武ヲ講授シタル等偉器早ク同僚ノ推服シタル所ナルガ、其ノ經國濟世的抱負識見ニ至テハ又格別ナルモノアリ。(阪本俊貞筆録)

咬榮秘記云 此後貞一人參候節類に貞に學文を勧め、學文は貧苦の中にて反て成就するものなり、天満組の與力六十、一人も學文の出来るものは無之玉造京橋の御組の方でなければ學文は出来ぬと申、借申には貴兄は御城附の與力にて武役專一の御方、僕は町與力にて獄吏なれば平日の公務は甚懸隔したる事に候得共、何事ぞと申節は御城附は勿論獄吏の僕等迎も、皆一同に此御城を警衛して西三十三ヶ國を押へ申より外は無之と存候左様の節に至ては貴兄の御頭様は萬石以上の諸侯に候へば相應の家臣等も有之、戦場の用に相立可申歟、是迎も一概當てには成不申、又僕が頭は三百俵や五百俵の小身にて譜代の家臣迎も無之、多くは役中だけ平常の公務に馴れたる者を家來に雇入候事故何ぞの節には一人も當には相成不申、左様の節急度此御城の一方をも堅固に警固致す所の御工夫は如何候哉、貴兄は御城附の御勤なれば猶更御工夫可有之候、さあ其御工夫は如何々々と尋る故、差當何の工夫も無之、今日弓を射、鐵砲を打、其外鎗劍等武技の稽古を心掛候は皆其節の用と存候と答

## 大阪城防備論

頭も家來も  
何れも頼み  
致さず一己  
の力を以て  
一方を守禦  
致す工夫

## 穢多村ノ掟書

へければ、夫は申迄もなき武夫の常にて我々共より遙に小給なる十石三人持の同心中にて相應に武技は出精いたし候、是等は只一己の嗜にて僅に武夫一人前の事、夫を以て一方を堅固に警固するとは不申候、頭も家來も何れも頼み致さず、一己の力を以て一方を守禦致す所の工夫に候と申故、貞が答に愚昧にて中々左様なる大度の處は工夫も覺悟も無之候、何卒其工夫を承り度と申せば、側なる本箱より何か半紙二三枚に書たる帳を出して是を御覽被成と申故、手に取て見れば當時穢多村渡邊村穢多共の掟書なり、第一ヶ條は御公儀様御法度之事決而相背間敷ありて、數ヶ條の末の一ヶ條に、我々どもは運拙くして同じ人間に生れながら畜生同様人間交りも出来ぬ身なれ共、傳へ承るに漢土にて樊噲といふ人は屠者にて我々の仲間なれども、時を得て王侯貴人に至られし事あれば、我々ども、公義御法度を能く守り、今日惡事を致さず、律義に職業を精出さば後に時を得て人間交りの出来る事もあるべき間、此掟の條々を一統能く可相守といふ掟書の括りのヶ條也。其時平八郎中

は此處にて候、穢多共人間交りの出来ぬといふ所が彼等の第一殘念に存る處にて、親鸞といふ智慧坊主其處をよく吞込で、此方の宗門にては穢多にても少も障りなし、信仰のものは今世こそ穢多なれ、後の世には極樂淨土の佛にしてやろふと云ふを、殊の外有難思ひ本願寺へ金子を上ること穢多程多き者はなし、死亡後の有とも無とも耽シカと知らぬことさへ人間並の佛にすると云をかく辱く存るからは、只今直に人間に致て遣と申さば此上なく難有がり、火にも水にも命を捨て働くべし、左すれば何事ぞある時は五百や千の必死の人数は忽得らるゝ事にて夫を以てよく指揮を致して急度一方を守禦すべき心得なり、當時出水にて此堤が危く是を切ては數萬人の一命にもかゝる故、是非防がねばならぬといふ時は毎も穢多を遣ひて防ぐ也、又市中の火災にても爰は是非防がねばならぬといふ時は又穢多を遣ひて防ぐ也、其時は穢多共必死になりて防ぐ故、是非死人怪我人三人五人無き事はなし、ケ様の時命を捨て働くものは今時穢多に及ぶものなし、是を以て能く指揮して唯今本道の間

文政四年ハ  
先生二十九  
才ニシテ原  
本ノ誤也。

にしてやると申さば十倍の力を出して働くべし、さらば何ぞの時は急度御用に立つべし、去るに依て平常其心得を以随分不便を加へ、又惡事を爲せば嚴重に取計、既に穢多共十五七人博奕を致す處へ僕踏込で一人も不殘召捕事あり、其節は捕繩も不足にて穢多どもの帶をときてくゝりし事あり、随分威も惠も失ひ不申様に致候に付穢多ども僕の事は至極畏れて有難がり居候と申候。貞は其時甚感心致し中々大器量ある人にて貞等が思慮の及ぶ所に無之と唯閉口して聽居たり、偕是は文政四年にて平八郎廿八歳の時也。」

是年某月、先生公餘、彼崎小竹、岡田半江、其他諸友ヲ會シテ雅會ヲ張ル、  
歎ヲ割キ酒ヲ呼テ興頻ニ旺ス、小竹詩アリ。

子起宅食齋

彼崎 小竹

脚象地維甲象天。方位眼迷下著邊。撲鼻奇香衝鼎烟。難辨肺腸斷復連。割  
雖不正箇々圓。味可充藥不必鞭。上客既飽皆欣然。笑他薑蕪禍相牽。莫謂  
騎龔黃安仙。口腹我輩學無緣。慧業破戒特可憐。靈運成佛在人先。

能ク先生ヲ  
誦スルモノ

用前韻示某

死生富貴皆在天。某生能撇置ハラヒテ一邊。身外萬物過眼烟。節義獨慕魯仲連。行方不妨智自圓。爲吏恤民劉寬輒。憂世悲時特慨然。大木雖傾一繩牽。議論痛快興欲仙。胸中半點無塵緣。君不見天下滔滔皆可憐。螻蟻逐羶爭後先。

文政六年癸未先生三十一歲

是年八月二十三日尾州宗家大鹽岩吉初メテ御目見ノ事アリ。

是年十一月先生叔父權九郎攝州三島郡吹田村神官宮脇日向養子トナル、名ヲ志摩ト改ム、實ニ平八郎敬高君ノ弟也。

米津靱負ハ  
京橋組與力  
ナリ

米津靱負物語云 宮脇志摩ハ剛勇ノ人物ニテ武術ニモ勝レタルガ、特ニ田宮流ノ劍術ヲ能ク遣ヒ、又大島流ノ槍ノ妙手ニテ平八郎ヘモ常ニ教ヘケルカ、志摩吹田村神官トナリシ時、我が受ケシ印可ヲ平八郎ヘ譲ラント言ヒケルニ、平八郎否々武士ヲ捨ル者ノ免許ヲ受ジト斷リケルト也。

是年先生彼崎小竹ノ招宴ニ會シ。席上山陽ノ母氏梅颯刀自ニ面接ス、刀自先

東大鹽西成  
瀬

生ノ聲譽ヲ推賞シテ止マス、詠扇一首ヲ送ル、先生又刀自ノ爲ニ一節ヲ製シ之ニ報ユ。

宮原節庵開書云 賴山陽の母飯岡氏嘗て山陽京師の僑居を訪うて途次大阪の篠崎小竹に過る、小竹爲に醴を設けて梅枝の師香川景樹及び後藤松陰、落合双等を招く、大鹽亦其招中に在り。時に大鹽は東與力の中に在り廉能を以て輿誦嘖々、東大鹽西成瀬の稱あり、席上梅枝詠扇一首を作て大鹽に贈る曰く

うらおもてなければ人にあほがれてときに扇の風ぞ涼しき

とあり、大鹽大に喜び詩を賦して之に答へ、又一節を製して詩歌を彫りて以て梅枝に貽る、梅枝携へて京師に入り之を山陽に附し且つ語るに大鹽が縋縋の狀を以てす。山陽又夙に大鹽の名を識り之を見んと欲する久し、是に於て小竹二人の間に介し日を約して二人を大鹽の家に相見わしむ。此一節山陽ト其時代ニ依ル

年表参考

東本願寺火和漢大風水○菅茶山没、山陰志成る、獨逸人シイホルト長崎に來リ醫法を

講す○ヨロンビヤ獨立○中央亞米利加聯合共和國成る(萬國)

文政七年甲申是年八月間先生三十二歲

是年三月十二日賴山陽京師ヨリ來リ篠崎小竹ニ信宿ス、先生去年梅枝女史ノ  
誼ニ感シ一詩ヲ賦シテ山陽ニ寄ス、山陽即チ小竹ヲ介シテ共ニ先生ヲ訪フ、  
先生此ノ珍客ヲ迎ヘテ宴ヲ設ケ且ツ飲ミ且ツ談ス、傾蓋忽チ刎頸ノ交ヲナス。  
先生ノ詩云

山陽洗心洞  
ヲ訪フ

甲申三月十二日聞賴山陽自京師來吾鄉寓某氏賦之

春曉城中春睡多。遠檐燕雀聲虛啼。非上高樓撞巨鐘。桑榆日暮猶昏夢。  
是年秋八月山陽江ヲ下リ三タビ先生ノ邸ニ過キル、即チ又酒ヲ置テ交驩ス、  
先生愛藏スル所趙子璧蘆雁ノ畫幅アリ、山陽春來一見朶頤シテ耐ヘサルノ情  
アリ、先生早ク既ニ心ニ之ヲ知ル、此日與酣ナル頃先生徐ニ起テ之ヲ捲キ一  
抛シテ山陽ニ贈ル、山陽雀躍并舞止マス、即チ古詩一篇ヲ賦シテ之ヲ謝ス、  
詩ニ曰ク

大鹽君子起、大阪府士、與聽訟獄、以廉幹稱、邀余其宅、觀趙子璧蘆雁幅、余  
心欲之而不敢言、子起知意輟贈、謝以長句。

曾醉君家公退餘。酒酣耳熱呼嗚々。怪底慘栗肌欲粟。壁挂霜消宿雁圖。霜壓蘆  
荻花失色。老月欲墮影有無。四雁相偎眠半覺。兩隻縮頭噤不呼。一隻側翅如  
有伺。一隻張目是雁奴。誰哉畫者趙子璧。欸題淋漓墨欲滴。入君樊籠朶吾頤。  
畫雁難於生雁獲。重遊蘆中舟同艤。對景談及舊畫姿。何圖君早察吾色。屬杯  
慨然許輟遺。繫舟君門出君雁。併月併霜卷懷之。酒醒燈底疑是夢。一幅啓々  
信在茲。人稱寶繪烟過眼。語至得失其目睟。君獨割愛如刀斷。此情江水深無  
限。稻梁拙謀吾自知。繪戈賢路君不疑。隱顯雖異本同類。來去有信長相期。觀  
君羽儀漸雲逵。

年表參考 春麻疹流行○始鑄一銖金(和漢)英船薩摩に來冠す又常陸に來る○英人緬甸を破る○英  
人バイロン殺す(萬國)

文政八年乙酉先生三十三歲

是年正月十四日先生私塾ニ洗心洞入學盟誓七條ヲ制ス、蓋シ是ヨリ先キ諸生ノ入學スルモノ漸ク多シ。生徒漸ク多ケレハ又從テ師弟ノ名正サザルヲ得ス、生徒ノ躬行責メサルヲ得ス、塾政自ラ理セサルヲ得サル也。即チ茲ニ盟誓ヲ定メ、又王陽明先生ノ龍場諸生ニ示ス立志、勸學、改過、責善四章ノ格言ヲ自書シテ講堂西面ニ揭示ス、之ヲ學堂西掲ト云ヒ、又呂新吾先生ノ格言十八條ヲ書シテ東面ニ掲ケ學堂東掲ト云フ。更ニ夏四月ニ至リ陽明先生ノ天成篇ヲ書シテ洗心洞ニ掲ケ生徒ニ示ス、是ニ於テ塾制初テ整フ、先生公餘ヲ以テ生徒ニ教授ス。門人日ニ進ム。

按スルニ先生第内極テ廣シ、中ニ三塾アリ、曰ク故塾、曰ク中塾、曰ク新塾、故塾ハ所謂講堂ノ在ル所講堂ヲ讀禮堂ト云フ、中塾ハ所謂洗心洞、先生ノ書齋茲ニアリ、初メ之ヲ中軒トイヒ後中齋ニ改ム。新塾ハ所謂文武ノ稽古所後年東隣ノ舊宅ヲ修理シタルモノニ係ル、新塾尤モ閑寂小諸侯ノ疊舎モ及ハサル也。洗心洞ト竹林ヲ隔ツ、若夫洗心洞ノ藏書ニ至テハ數千帙、書

庫土藏一棟アリ、猶溢レテ講堂書齋ニ至ル書ニアラサルハ無ク、中ニ一切經、新譯洋書ニ至ルマテ諸子百家貯ヘサル無シ。藏版傳經ニ  
洗心洞除瀝

### 洗心洞入學盟誓

欲學聖賢之道以爲人、則師弟之名不可不正也、師弟之名不正、則雖有不善醜行、誰敢禁之、故師弟之名誠正、則道行乎其間、道行而善人君子出焉、然則名問學之基也、可不正哉、某雖孤陋寡聞、以一日之長、任其責、則不得辭師之名、而其名之壞不壞、大率在下文條件之立不立、故結盟於入學之時、以預防于其流不善之弊。

主忠信、而不可失聖學之意矣、如爲俗習所牽制、而廢學荒業、以陷奸細淫邪、則應其家之貧富、使購某所告之經史、以出焉、其所出之經史、盡附諸塾生、若其本人而出監之後、各從其心所欲可。

學之要、在躬行孝弟仁義而已矣、故不可讀小說及異端眩人之雜書、如犯之、則無少長、鞭朴若干、是即帝舜朴作教刑之遺意、而非某所創也。



每日之業、先經業、而後詩章、如逆施之、則鞭朴若干。

不許陰締交於俗輩惡人、以登樓縱酒等之放逸、如一犯之、則與廢學荒業之譴同。

一宿中不許私出入塾、如不謀某、以擅出焉、則雖辭之、以歸省、敢不赦其譴、鞭朴若干。

家事有變故、則必諮詢焉、以處之有道義故也、非某欲聞人之陰私也。

喪祭嫁娶及諸吉凶、必告於某、與同其憂喜。

犯公罪、則雖族親不能掩護、告諸官以任其處置、願爾們小心翼翼、莫駘父母之憂。

右數件勿忘勿失、最是盟之恤哉。

兒童日課大略

每曉卯上刻、收枕席、皆盥漱梳櫛、讀新理書、讀終退而讀其書、十過、疑忘不許放過、必就正焉、然後讀舊理書、十簡、疑忘亦復然、習書而後寫字、寫字而後誦

洗心洞ノ内  
容新クノ如

詩背誦、而後韻字平仄就正爲、西中刻就寢。洗心門詩  
文下卷

洗心洞餘瀝云、塾の模様で御座りまするか、塾が即ち洗心洞で、玄關を上りますれば西側は書架でつまつて御座ります、右へ来れば塾の方へ往きますので、左の方が講堂、其後ろが先生の書齋、それから勝手向で御座ります、講堂は讀禮堂と申しまして、自身の書齋が中齋、勝手の方は鏡中觀花館と云ふ額が上つて御座りましたが、塾生の入ることは決して許しません、塾則で御座りまするか、どふも餘程年のたちますので寫して持て居りましたがつい失つてしまいました。聖像で御座りまするか、はい床にかけて御座りまして祭典は中々嚴重なもので御座ります、大鹽は朝七ツ時に起きましてすぐ講義が一度御座ります、それから五ツ頃に出仕せられ、八ツ頃に役所より歸られました、すぐ一回講義が御座ります、それから二三度もある事があつて毎日大抵四五回づ、講義が御座ります、門弟は大抵與力衆で四五十人も御座ります、塾生は十七八人許りで餘は皆通うて來られました、門弟衆の内て姓名を

覺えて居りますのは山口平吉、渡邊重左衛門、瀬田屋之助、小泉延次郎、橋本忠兵衛、同梶五郎の人々で御座ります云々。

是年五月城代松平周防守罷メ水野左近將監忠邦之ニ代ル。

是年八月十五日夜先生友ヲ會シ大學惡於ヒ之章ヲ講ス、一時興起スル者多シ、先生因テ詩ヲ賦ス曰ク

洗心洞詩文

偶會同朋是仲秋、簾前桂影護西流、各認靈臺別有月、寧隨兒女上南樓。

年表參考

四月上總士冠起る○異船大阪漂流を送り來る○清國甘肅義倉を設く○露國ニコラス一世即位○ジョン、クインシーアダムス大統領となる(萬國)

### 文政九年丙戌先生二十四歳

是ヨリ先キ先生肺疾ヲ患フ年ヲ經テ癒エズ、故ヲ以テ漸ク劇職ヲ厭フ、退テ學ヲ講シ生徒ニ授クルヲ以テ悠々自適靜ニ病ヲ養ハシノ意アリ。之ヲ以テ高井山城守ニ計リ窃ニ辭職ノ意ヲ洩ス。山城守許サス慰撫シテ止ム、先生又自ラ嗣子ナキヲ憂フ、即チ養子ヲ得テ退カント欲ス、之ヲ尾州宗家大鹽氏ニ計

先生肺病ニ  
嬰ル

ル成ラス、是ニ於テ祖母西田氏ノ甥格之助ヲ養フ當時大鹽氏ニ送レル書ニ云フ

一先年私病氣に付、未老年に及不申候へ共、退番之宿願有之候處、未だ實子無御座に付、乍失敬御子息様之御内、先祖へ御縁を以養子之儀御内談に及候節、尊報被下候處、未私壯年之儀養子等は不差急、寛々養生加へ可然趣に頭共之内意有之被差留候付右御縁談之義其儘に打過、最早餘程年月も相立候へ共、私兎角不快勝にて、勤仕十分に難出來、最早三十四歳にも相成、實子無之、

就てあの時分話之御方は未御同居にて居られ候歟、今度は屹度間違候様之事無之候、又若し御宗家に適當之御方無之候へば、此の末家江戸表在住之旗本に同姓之人有之由、其家に養子に可遣様之者は無之歟、一應御

取調被下候、本文盡他欠落讀ミ難シ大略意譯ニ從フ

當時之風儀にて、或は莫大之持參物等を以被申勸居候へ共、小身者ながら

元祖波右衛門様より當私まで血統相續仕候に、一旦勢利に被切、不筋之利慾に迷ひ、他家之者を致織子候ては、斷絶も同様之仕義、甚歎ケ敷候。

私退番迎も差急候儀にも無之、今三年許は何れ相勤不申候ては難叶云々。按スルニ先生三十既ニ此ノ肺患アリ、自ラ欲死再三ト云フニ見レハ其ノ退職ノ意ト宗家養子ノ交渉ハ當時ニアル可シ、而モ上司ノ撫慰懇切止ムヲ得スシテ今日ニ至ル、重テ養子ヲ宗家ニ求テ得ズ、是ニ於テ格之助ヲ養フ、格之助ハ同組與力西田清之進ノ二子、青太夫ノ弟也。或ハ云フ先生三十既ニ格之助ヲ養フト、蓋シ格之助ハ祖母ノ甥ニシテ先生ノ門人ナリ、之ヲ子養セルハ未タ嗣子ノ謂ニ非スシテ宗家養子ノ成ラサルニ至テ初テ之ヲ養嗣子トスル也。格之助時ニ年十六歳、名ハ尙志字ハ士行父母ニ仕テ孝、事ヲ執ル謹恪、坐作進退禮ニ習フ、文武兩ナカラ先輩ノ稱スル所ナリ。

咬菜秘記云 格之助と云ふは同組西田某か家より大鹽へ養子になりし人にて通例の人物なり、然る處大鹽へ參り平八郎へ對面致し候節、格之助當番の出

格之助ヲ子  
養ス

大鹽格之助  
ノ人物

掛、又は歸宅の砌りは平八郎へ必ず出入を告ること也、其様子を見るに如何にも養父の前にて慇懃丁寧の様子、信實養父を敬禮の體にて次の間敷居の外より謹て出入を告げ、借貞杯へ挨拶を致す迎も平八郎の居る時は必ず敷居の外より挨拶ありて如何様に御這入候へと申ても這入らず、平八郎一言去らば這入て御挨拶申せと云はぬ中は決して這入らぬ、其恭敬の容體實に感心のことなり、或は又平八郎より先へ貞等が前へ出て挨拶する時は直に對座へ出て挨拶なり、若し初ての同道人杯ありて此方より姓名を何の某と名のりて挨拶の時は、逸々あの方よりも其通何の某様かと又姓名を復稱して挨拶し、其上平八郎所へ參り何の某、何の某同道ありと一人も不殘其姓名を告て通するなり、其體を見て貞が始て覺悟いたしたるは、如何様聖教の禮といふものは大切なるものにて、我々一家の中親子兄弟の中にては我人ともに恩愛の方優りて敬禮の方は等閑になり易きことなり、別て養子といふは素他人にして唯義を以て親となり子となるものなれば天性の肉親通りには如何様のことにても

ならぬ筈なり、夫を世間にて辨へずして親子となるからは、天性肉親の父子の如くに唯恩愛のみにて親しまんと思ふより今日一事違ひ、あすは二事背いて遂には親子の間恩愛の心も日々に薄くなり、殊によれば破縁にもなるものなり、此大鹽父子の如くならば如何に養子なればとて親の慈愛も日々厚かるべく、子の孝敬も月々に深かるべく、是全く禮義の能く爲す所なりと其時甚だ感服せし事なり。」

是年四月四日越智高洲没す行年五十六歳、小橋中寺町梅松院ニ葬ル。

是年十月城代水野左近將監京都所司代トナリ松平伯耆守宗發之ニ代ル。

静坐偶感洗心洞詩文

委吏乘田終此年、饑寒雖免愧先賢、將求鷄犬歸吾宅、坐向陽明古洞天。

年表參考

青池林宗氣海觀瀾輿地志略を著す西洋理學書の始○シエフアーンソン及アダムス没す

(萬國)

### 文政十年丁亥 是年六月間 先生三十五歳

先生切支丹  
宗門ノ黨ヲ  
糾彈ス

是年夏四月先生高井山城守ノ命ヲ以テ切支丹邪宗門ノ黨ヲ京攝ノ間ニ捕索シ終ニ之ヲ得テ糾彈其ノ眞ヲ舉ク、其八月山城守之ヲ府ニ申呈シ、府又之ヲ東都憲臺ニ聞シ、三年ノ久キヲ經テ落着ス、妖教ノ庶民ヲ煽誘スルノ害、是ニ於テ息ム。

大日本  
辭書ニ  
關法醫  
宗吉ト  
ハ非也  
宗ハ七  
以テ五  
津寺ニ  
寺ニ葬  
佛念ル

按スルニ切支丹邪宗門一件糾彈ハ先生與力在職中三大功績ノ一ナリ、事ハ是年四月ニ始リ、文政十二年十二月幕府評定所ノ決裁ヲ得ルマテ三年間ニ亘ル大疑獄ナリ。其教主ヲ豊田貢ト云ヒ文化年間肥前唐津ノ浪人水野軍記ナル者ニ從テ弟子トナリ、天帝ノ畫像ヲ拜シ神文ヲ唱ヘ指血ヲ其ノ畫像ニ濺キ懸ケ陀羅尼ノ呪法ヨリ加持祈禱ヲ以テ種々ノ妖術ヲ行フ秘法ヲ得タリ、是ニ依テ京都八阪ニ表面豊國神ト稱スル祈禱所ヲ設ケ内實妖術ヲ行フ。次テ播磨屋敷の京屋さの二女ヲ配下トシ、盛ニ愚夫愚婦ヲ誑惑シ金品ヲ掠メ又之ヲ以テ邪法ヲ煽誘シタルガ、同時ニ軍記弟子藤井右門事伊良子屋桂藏又岩井温石大醫秋山風瑞事高見屋平藏播州藥栗村長慶寺僧選俗武藏屋庄藏事藤田顯藏阿波人大阪醫者藤田幸庵養子等ノ浪

人ト相計リ、京攝播但ノ間ニ秘密宗教ヲ復興セント計畫シタルヲ以テ其真相トス。張本水野軍記又水島要人ト云フ肥前唐津又豊前長洲ノ人ト云フモ島原切支丹ノ餘孽タルハ疑ナク、常ニ天帝ノ畫像ナルモノヲ所持シテ四方ニ漫遊シ、寛政中京師ニ入り某宮ノ吏タル同郷槌屋少貳本名三村城之助又阿部勘助由ト云フニ會シ、其ノ周旋ニ依リ二條家祜筆トナリ、幾クモナク出サレテ後寛政ノ末年閑院宮ニ出仕シ又非行アリテ文化十四年出奔シタルモ途ニ捕ハレ僅ニ免レテ家財沒收ノ上放逐セラレ、文政三年西國ヨリ長崎ニ游ンテ形勢ヲ觀望シ、五年再ヒ京攝ニ歸リ漸ク事ヲ起サントシテ文政七年十二月廿二日沒ス。死ニ臨ミ遺言シテ曰ク吾等百事壯年ノ志ト齟齬セルハ殘念ニ耐ヘス、必ス死後ハ火葬ニ附シ遺體ハ燒捨タルヘシ、目印ノ墓碑ヲ建ツルカ如キ却テ耻晒シノミ、決シテ爲スコト勿レト。高見屋平藏曰ク軍記ハ和漢ノ軍談ニ通シ、兼テ佛學易道ニ委シク、今迄出會シタル幾多ノ高僧學者ノ只一道ニ通セルニ反シ彼カ萬事ニ通シタルニ感シ、偶々利瑪竇即チ耶蘇會ノ教師マテオリツチーノ支那ニ弘メタル天

主教ノ談ヲ聞キ、儒佛ノ及フ所ニアラサルヲ信シテ歸依スルニ至レル也ト、伊良子屋桂藏ノ曰ク軍記ハ眼色骨柄凡俗ナラス、一方ノ軍將ニモ成ルヘキ程ノ才智器量人也シト。以テ軍記ノ人物計劃ノ小ナラナリシヲ知ルニ足ル。桂藏ハ文化二年ノ弟子ニシテ高見屋平藏、藤田顯藏ハ共ニ桂藏ノ紹介ニヨリ文政元年ノ門人ナリ。豊田貢ハ近江又越中ノ産ト云フ、彼ハ初メ京二條新地朋石屋ノ遊女ナリ、後土御門家配下ノ陰陽師齋藤伊織ナル者ノ妻トナリシモ、三十五六ノ時伊織ノ宮川町遊女某ヲ誘フテ出奔スルニ及テ、孤身漂泊茶屋絲屋わさニ身ヲ寄スルヤ、偶茲ニ水野軍記ニ會シ懇親ヲ重ヌルニ及テ、文化七年指血ノ誓式ヲ經テ弟子トナル。當時傳法ノ宣盟ニ云フ、此法ハ天下嚴禁ノ切支丹宗門ニシテ天帝如來ヲ念スルモノナルニヨリ、萬一事顯ハレ嚴科ニ就クコトアルモ決シテ師名及傳來ノ次第ヲ白狀スヘカラス、其身一人仕置ニナルハ榮花ノ上ノ榮花ト思フベシト、誓約ノ堅キ以テ知ル可キ也。播磨屋きぬハ文化十三年貢ノ弟子トナリ、京屋さのハきぬノ紹介ヲ以テ貢ノ弟子トナリ

平塚飄齋は  
後醍醐天皇  
を著しし天  
保騒動の間  
書か傳へし  
人也

タルモ、尙天帝ノ畫像ヲ拜スルヲ得サルヲ以テ長崎ニ赴キ踏繪ニ於テ畫像ヲ見一層ノ信念ヲ堅ウセリト云フ、是レ其ノ一斑也、但シ水野軍記ノ事ニ及ハスシテ死亡セルト、天帝畫像ノ燒棄セラレタルト、天草以來百九十年評定所ニ於ケル擬律擬罪ノ困難ハ、此ノ疑獄ヲシテ三年ノ永キニ亘ラシメタル所以ナリ。

七四

平塚飄齋傳云 文政十年京都八阪に豊田貢と云る妖巫あり切支丹の宗法と傳へ盛に衆庶を蠱惑し其徒京攝の間に蔓延せり、大鹽平八郎大阪町奉行高井山城守の命を受け、京都に來り貢を捕へ歸り大阪に磔刑し、宗族五十六人に永牢を命し、妖教爲に其跡を絶つ、時に飄齋(名は茂喬字は士梁)京都町奉行東組與力たり、時人京都には平塚も居りて之を檢舉する能はざりしは如何なと言はれしに、飄齋之を聞き貢を放任せるは某貴籍に關係あるが爲なれども、願みれば予も勇氣が無かりしやも知れずと獨語したる由、然れども平八郎も飄齋の識量ある能吏たるを認め機を見て下阪を勧めけるが飄齋は却て平八郎

の上京を望み終に相見るに及ばずして死せり、羽倉外記天保十四年の西上記に云ふ。

七月二十五日士梁來、云夜舫南下、士梁嘗司理、銖鋤積糞、於是都下盜清、大鹽後素聞之、使人來交、士梁辭以他故、後有丁酉之變、可謂屢燭淵底矣、是年閏六月十五日賴山陽京師ヨリ來リ洗心洞ニ過キル、先生喜ヒ迎ヘテ之ト歡談數刻既ニシテ先生獨リ山陽ヲ留テ衙ニ上ル、蓋シ當時先生耶蘇ノ獄ヲ治メテ繁劇交友一日ノ閑ヲ得サルナリ、即チ山陽ヲ留テ亂抽滿架ノ秩ヲ見ルニ委セ謝シテ出ツ、山陽深ク先生ノ誼ニ感シ悠遊半日、去ルニ臨テ一詩ヲ賦シ壁ニ貼シテ先生ニ示ス、所謂號君當呼小陽明ノ詩是也。

訪大鹽君子起謝客而上衙、作此贈之丁亥閏六月十五日訪

賴 襄

上衙治盜賊、歸家督生徒、猝卒候門取裁決、左塾猶聞喧嘩語、家中不納認獄錢、唯有繻々萬卷書、自恨不暇仔細讀、五更己起理案牘、知君學推王文成、

七五

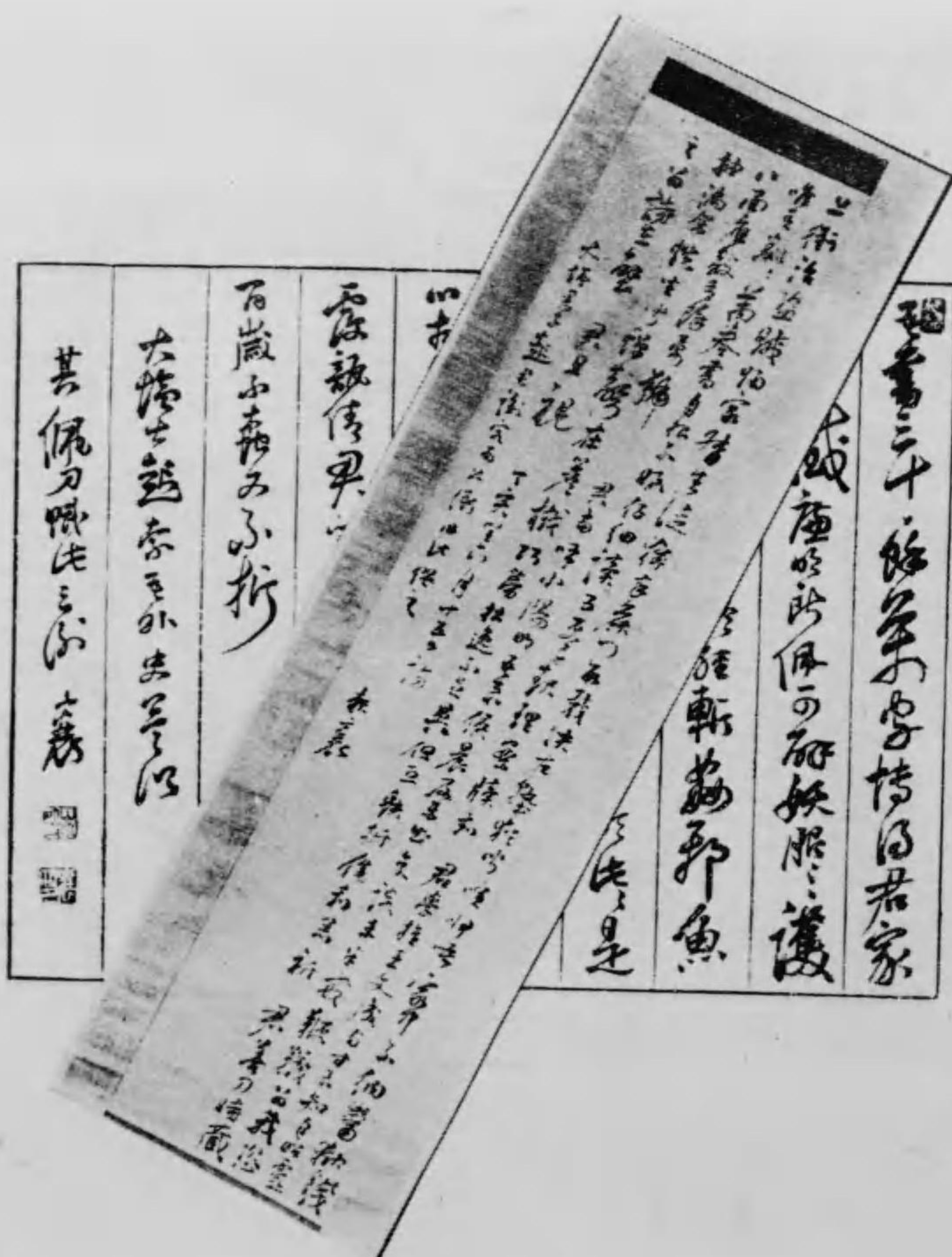
山陽先生ニ  
依テ遺杖ヲ  
求ム

方寸良知自昭靈。八面應敵有餘勇。號君當呼小陽明。吾來侵晨及未出。交談未半戒鞭撻。留我恣抽滿架帙。坐聞蟬聲在簷樾。巧勞拙逸不足異。但恐聲折傷利器。祈君善刀時藏之。留詩在壁君且見。

此秋某月某日賴山陽遠ニ來リ、先生ヲ訪テ曰ク余茶山翁ノ遺杖ヲ某津頭ニ遺却ス搜索スト雖有ル事ナシ、兄ノカヲ以テ之ヲ獲バ即チ幸甚ナリト。先生之ヲ搜リテ獲タリ。即チ專价ヲシテ之ヲ持テ送ラシメテ曰ク、老竹幸未化爲龍。猶潜在某水邊。獲之還子。子自今宜無放失。ト山陽喜ニ耐ヘス之ニ謝スルニ七言古體一詩ヲ以テス、他日先生ニ會テ之ヲ謝シ、且其ノ術ヲ問フ、先生ノ曰ク古人言ハスヤ階前萬里ト、阪府ノ所管僅ニ方數十里、其內在ル所ノ物織芥ノ微ト雖モ我カ眼底ヲ逃ル、無シ、若シ此クノ如クナラサル何ソ職ヲ盜賊方ニ奉スルヲ得ンヤト。山陽深ク歎服ス

丁亥之秋、余適西備得茶山翁遺物竹杖而歸、比航尼崎失之、煩大鹽君士起、徧索□□數旬而獲、專价來致、士起清廉、不受囑託、非茶翁與余之故、何肯

賴山陽先生真蹟



訪大鹽君起謝客而上面

如此、此不可不謝也。

賴山陽

茶翁吟詩八十年。二入函關五鴨川。携來九節彎蛇竹。嘲盡風月飛上天。手抉雲漢遺其杖。直下七萬八千里墮我前。黑光奕奕手澤在。急拾取之誰居先。持去掣鯨藝海邊。雨翻浪湧忽不見。萬鷁聚散尋無緣。借君槌姦發伏如神手。驅役六丁急如弦。排碧落掀黃泉。追逐獲來喜欲顛。汝非學灌躍入淵。見汝未生麟建延。應下是竊罵吾憤々。追前者去奔斗。自非賴君手。逋逃終不旋。汝勉從我勿復然。吾將共搜翁所遺殘雲剩煙。一語落凡受汝鞭。

是年二月十九日近藤重藏罪ヲ以テ江州大溝ニ移シ幽閉セララル。藩侯警衛禮ヲ加フ、重藏亦謹守靜坐一室ヲ出テス、竊ニ警衛諸士ニ經史ヲ講ズ。

年表參考 春五畿兩豆麥(和漢)伊東圭介始テ物産學ヲ唱フ○第十月二十日ナツアリ、ノ戰英佛露の水軍土耳其艦隊ヲ破ル○合衆國鐵道始(萬國)

文政十一年戊子先生三十六歲



註先生ノ此畫今ニ傳ラズ只竹田畫談ニ在リ先生後林文坡ナシテ陽明先生ノ像ヲ作ラシメ上ニ祭文ヲ自アリセルモノアリ傳フ

是年七月十九日祖母西田氏政之孫沒ス、享年六十四歲、天滿蓮興寺ニ葬ル、諡號ヲ壽正院妙誠日耀大姉ト云フ。先生八歳母ヲ亡フ後一ニ祖母ノ鞠育ヲ受ク、先生又孝養尤モ勞ム、是ニ至テ沒ス。

是年十一月廿九日先生大明新建伯王文成公ヲ洗心洞學堂ニ祭ル。文成公嘉靖七年戊子十一月廿九日南安ニ沒ス。年五十七。我後奈良帝ノ享祿二年也。茲ニ至テ三百年今日其ノ忌辰ニ丁ル。是ヨリ先キ先生田能村竹田ニ囑シテ文成公ノ肖像ヲ作ラシム、畫成ルニ及ンテ神韻髣髴正ニ先生ノ望ヲ負ヘリ、先生盥手焚香毎ニ人ニ語テ曰ク、余ヲシテ畏敬此クノ如クナラシムルモノ其レ只竹田ナルカ、吳道子再生スルモ恐ラクハ此ニ至ラサラント。此ノ日先生之ヲ以テ講堂祭壇ニ奉安シ、清酌時羞ノ奠ヲ設ケ門人ヲ率キテ文成公ノ三百年祭ヲ行フ、祭文アリ曰ク

祭陽明先生

維大日本文政十一歲、次戊子、十一月二十有九日、浪花市吏大鹽後素、謹以清

酌時羞之奠、昭祭于明新建侯陽明王先生之靈、嗚呼、先生豪傑而聖賢、武略而文章、征誅寇賊、開導衆生、當代孔孟、後世伊姜、伏以自ルニ從南宋迄元明際、關閩派洛、學明一快、雖然不知歸宿何在、於是紫陽末派、蔽固難敗、知行分裂、聖教破壞、出二氏下、學者不悔、誦話羅葛、六經埋殺、碩學鴻儒、茫猶涉海、況夫中人以下、碌々學究、區々小輩、嗚呼、先生亦陷其杵臼、挺身奮出、拈テ人心良、再明精一、高明之徒、返轅悟失、巨鐘回夢、始瞻中天日、如モシサキニ嚮無觸、奄瑾怒、楚朴濱死、托言江溺、陷虎穴裡、領神人教、甘龍場吏、魍魎蟲毒、與之坐起、乃鑽石櫛、歷千百備焉、以中夜所得、起洙泗之傳、乃如此哉、嗚呼、先生廊廟之器、台輔之材、置諸帝側、明祚豈頽、自古陰邪惡、陽剛來、所以不能一日安位、鸞臺建、功相外、青史明哉、閩廣大盜、良善中毒、橫水桶岡、殺及牛犢、三荆所煽、莫不野哭、其時守令怯皆側目、孰敢連壽摧敵如破竹、嗚呼、先生一起圖南、韜略在腹、次第施之、僅費箭鏃、巢穴掃盡、虫鼠口伏、脅從所宥、渠魁就戮、爾後告喻、民蒙仁育、宸濠何人、天子之叔、上下所畏、叛則爲賊、人不知義、義豈亦欲逐、嗚呼、先生默

太田備後守  
一ニ攝津守  
ニ作ル掛川  
藩主也

決獨知、不須龜卜、撞西域虛、終亦縛束人稱其功、謂其學非、不知功業、皆出  
良知、惜哉、良知之說、絕響幾時、考索其由、決不在師。曰仁蚤天、緒山才遲、龍谿  
過高、原靜好奇、東廓南野、具體而微、劉死、黃刑、學脉斷絲、道之不行、其在斯  
歟、嗚呼惜哉、予生異域、數百歲後、難討要領、默々株守、不能出頭、庶乎猿狖、  
夢寤之間、有人相授、所授果何、聽誠意講、偶購全書、讀一二句、忽如心非、又  
識學謬、專誠研磨、嬰心肺疾、欲死再三、藥効不奏、祖母病卒、外祖終壽、悲哀  
刺骨、病勢益厚、何幸反蘇、不知誰救、在天之靈、不然天祐、斷然立志、不敢事  
口、躬行實踐、宋脉無負、願先生助予、不使此心朽、殺身為仁、固予所懋、清明  
如在、靈鑑何咎、嗚呼、格思享予祭祀。洗心洞詩文下卷

是年二月西町奉行内藤隼人正勘定奉行トナリ江戸ニ移ル、四月新見伊賀守正  
路之ニ代ル○十一月城代松平伯耆守罷メ太田備後守資始之ニ代ル。  
是年十二月十四日實用館主平山行藏兵原没ス年七十。

是年七月東海西海洪水、十一月越後地震フ。小竹齋詩抄戊子歲抄句アリ、以テ

其慘害ヲ見ルベキアリ。附記ス

九州颶變傳語嘩。海覆舟船如擲梭。陸飛室屋似揚沙。流尸填巷隘載路。  
逸怒更向中國加。東國亦多浸餘波。驛路不通田失禾。諸侯經費無所出。來謀  
浪華如之何。大賈皆爲黔吏呵。子母乳沒心計差。古云漸如三百步。書生安得獨  
寬過。

### 文政十二年己丑先生三十七歲

是年春三月先生命ヲ承ケテ猾吏奸卒政ヲ蠹シ人ヲ害スルモノヲ糾察シ、巨魁  
西組與力弓削新右衛門ニ死ヲ賜ヒ、奸卒數人ヲ磔シ、其他ノ黨與ヲ改易スル  
十數人ニ及ブ、姦猾庶民ヲ蠹蝕スルノ害是ニ於テ漸ク除カル。

青天霹靂云 西町奉行吟味役ニ弓削新右衛門ト云フ者アリ、性質殘忍ト雖モ  
又諂諛ヲ以テ時ノ奉行内藤隼人正ノ寵眷ヲ得タリ、故ヲ以テ暴行日ニ長シテ  
底止スル所アラス、而シテ其職ニ屬スル四ヶ所ト云フ者アリ、乃チ天滿、道  
頓堀、天王寺、齋田ノ四ヶ所ニ住シ、市中及近郷ヲ察視シテ惡事ヲ摘發スル

先生猾吏奸  
卒ヲ治ス

弓削新右衛  
門ト内藤隼  
人正

コトヲ以テ職ト爲ス者ナリ、其ノ常ニ見ル所ハ桎梏冤愁ノ事ニアラサルナキニ依リ、習自ラ性ヲ爲シテ此徒多クハ殘忍殺ヲ嗜ム者貪婪厭クナキ者ノミニシテ、善ヲ誣ヒ惡ヲ掩ヒ專ラ人ヲ毀害シテ貨ヲ得ルヲ之レ計ラサルナシ。其徒數人河内國富者某ノ家ニ入り家族五人ヲ殺シテ金物ヲ掠奪シ、願テ其幾分ヲ新右衛門ニ贈リテ庇匿ヲ請フニ及ベハ、新右衛門之ヲ容テ尤メサルノミナラス自ラ相類スルノ行ヲ爲スコト亦之アリ、故ニ其黨漸ク多ク新町ノ茶屋八百新ト稱スル者亦之ニ連合シ、不正橫暴言フニ忍ヒサル者アリ、諸有司ノ之ヲ知ラザルニ非ルモ、新右衛門ノ隼人正ノ寵者ナルヲ以テ憚テ未タ之ヲ發スル者アラス、皆眉ヲ翠テ竊ニ其無道ヲ誹ルノミ。平八郎之ヲ聞キ慷慨シテ措カス、直ニ其狀ヲ摘發シ新右衛門ヲ自及セシメ、其黨天滿ノ清五郎、千日ノ吉五郎、天王寺ノ安兵衛等數人ヲ殛刑セリ、因テ奸吏ノ民俗ヲ蠹蝕スルノ害除カル。然ルニ其賊金三千兩アリ、乃チ之ヲ取テ鞆獨自ラ存スル能ハサル者ヲ賑恤ス、其慶ニ頼ル者多クシテ民皆之ヲ稱セリ。

大鹽平八郎傳云

西組與力ノ吟味役弓削新右衛門

一説ニ平八郎叔父トモ云フ

性行殘忍ノ小人

諂諛ニ巧ナルニヨリ奉行内藤隼人正ノ眷顧ヲ得タルヲ特ミ恣暴增長惡行底極

ナシ、四箇所ノ長吏

當時其魁タル者天王寺ノ安兵衛、齋田ノ勘五郎、千日ノ吉五郎等

及ヒ新町ノ妓樓八百新等其爪牙

トナリ、賄賂ヲ貪リ貨財ニ瀆レ、人ヲ殺テ金ヲ奪ヒ其ノ利ヲ頌ツ、八百新ナル者己カ女ヲ進メテ新右衛門ノ妾トシ、屋後ニ其燕室ヲ構ヘ日夜同惡ヲ延テ

密議ス、室中紙障瑠璃ヲ以テ格子トナス、奢侈以テ類推スヘシ、是ニ於テ新右衛門ノ暴惡都鄙ニ隠レナキモ其上ニ倚ル所アルヲ以テ有司憚リ理ムルヲ得ス

平八郎悉ク其姦惡ヲ摘發シ、新右衛門ニ自殺セシメ、其黨數人ヲ梟首シ、賊金三千餘兩ヲ籍シテ無告ノ窮民ニ賑給ス、市人拊舞シ平八郎ヲ仰ク父母ノ如

シト。相傳フ黨中千日ノ吉五郎最モ殘暴甚シ、嘗テ深夜其徒ヲ率テ河内ノ一

尼院ニ押入シ、公然己ガ名ヲ稱シ寺主ヲ殺害シテ其儲金ヲ取ラントス、寺主

頗ル才智アリ、死ニ臨ミ吉五ノ字ニ添畫シテ二字ヲ造リ、吉五郎ニ託シテ曰ク

五郎ノ縛ニ就クヤ、平八郎其舎ヲ檢シ其法號ナル者ヲ看テ怪ミ問フ、吉五郎曰ク晨ニ横死セル河内ノ尼僧ハ鄙人ノ俗縁ナリ、故ニ冥資ヲ修メ之ヲ祭レリト、平八郎叱シテ曰ク尼僧ヲ害セシハ汝也、看ヨ分明ニ汝カ名ヲ文字中ニ銜スト、吉五郎初メテ悟リ其明察ニ伏スト云フ。

按スルニ猾吏奸卒ノ糺彈ハ先生三大事功ノ最モ著シキモノニ係ル、而モ其事績ノ詳細ナルモノニ至テハ公文書全ク傳ハラス、蓋シ東西吏僚之ニ連ル者多シ或ハ云奥方同心十八人ニ及ヒ、巨魁弓削新右衛門ノ外西組ニ山本清兵衛、早川傳三郎、伴直三郎、古屋源之助、鳴瀬庄三郎、大須賀龜三郎、服部忠次郎等アリ東組ニ寺西幾四郎、淺岡助之丞、丹羽駒太郎、而モ巨魁ハ老職弓削新右衛門ナリ、其爪牙ハ四牧野庄三郎等ヲ數フルニ至ルト、箇所ノ長吏ナリ、既ニ新右ニ死ヲ賜ヒ其黨與ヲ殛刑シ、以テ他ヲ戒飭シテ自ラ改メシムルハ最モ穩便ノ方法トスベク、從テ多ク記録ヲ止メサルハ此ノ故ニ依ルカ、而モ事實ノ大體ハ前二書ノ外傳說大抵一致スルヲ以テ之ヲ領スルヲ得ベシ。

是年三月先生ノ妾ゆう髮ヲ剃テ尼トナリ、養父橋本忠兵衛掛屋敷ニ移ル時ニ

牙保及市民  
商賈ノ之ニ  
連ルモノ百  
二十人ト云  
フ

妾ゆう髮  
尼トナル

年三十一、人其ノ何ノ故タルヲ知ラス、浮說紛々タリ。

按スルニ初メ先生ノ猾吏糺察ノ命ヲ受クルヤ、禍福利害ヲ度外ニ置キ潛圖密策經營慘怛タルモノアリ、先生妾ゆうハ賢婦人ナリ、先生ノ此ノ殉職ノ意ヲ察スルヤ、君辱ラルレハ臣死スルノ遺意ニ感シ、先生既ニ死ヲ決シテ任ニ赴ク、妾巾幘ト雖モ如何ンソ褻ニ安ンジテ内顧ノ憂ヲ遺サント、是ニ至テ剃髮ス。山陽獨リ之ヲ知ル、曰ク子起ノ始メ密命ヲ受クルヤ、自ラ度ル事濟ハ國ニ補ヒ濟ラスンハ家ヲ破ラント、家ニ一妾アリ之ヲ出シテ累スル所ナカラシメ、然シテ後運籌決策指顧親信、發摘意外ニ出テ、其封豕長蛇ヲ爲ス者ヲ斃スト、世人殊ニ知ラス或ハ云フ、妾ゆう嘗テ所親ノ冤苦ニ罹レルヲ患ヘ、平八郎ニ訴ヘテ其厄ヲ釋ク、其人恩ヲ謝セント欲スレトモ平八郎ノ一物ヲモ收メサルヲ以テゆうニ玳瑁ノ櫛ヲ贈リ其營救ニ答フ、他日平八郎之ヲ聞テ平日ノ禁戒ニ背ケルヲ怒リ、直ニゆうヲ逐フ、ゆう涕泣シテ其罪ヲ謝シタルヲ以テ僅ニ讒怒ヲ宥シ、髮ヲ剃テ其罰ヲ示ス聞クモノイヨク其潔白ヲ敬憚ス。

ト大鹽平八郎傳其他中齊事  
蹟、洗心洞の經管云フ。事實ハ皆非也。然モ此等ノ説亦一時俗間ヲ糊塗スルニ  
益アリシモ知ルベカラス、只此ノ賢婦人ヲ誣フルノ甚タシキヲ憾ム耳。  
是年秋凶歉播州ノ地特ニ甚シ、農民一揆シ、官府ヲ脅カシ、豪戸ヲ襲フ、首  
領獲ラレス遠近相戒ム、先生大ニ時事ニ慷慨ス。

浪華騷擾記云 當八ヶ年以前播州百姓亂有之、右の頭取召捕に相成兼候に  
付同役其外懇意の者集會の節いろ／＼物語り、頭取召捕餘り及延引候由申  
候得ば、其席に平八郎も居候處、いや頭取の急に召捕に不相成も一入御爲  
に宜しかるべし、一體太平打續候故天下一統奢侈増長、役人共奸曲の所行の  
みいたし、最早天道にも御用捨なき筈に候得ば七八ヶ年の内には必定大凶  
作到來、世上難義可仕候、されば只今の内より御手當有之候様致度其仕方  
は斯様々々と致し、萬一凶作の備を致候は、間に合可申候、左も無之候は  
攝河泉播の民皆飢餓に及び必然と難澁差見候間、此事精々工風の上度々  
上疏致候得共寸分の御取用ひ無之、是即ち役人共己が身上のみ肥し民の難

天保四年先  
生著書救荒  
十種略ノ  
條参照建議  
ルノ内容ヲ見

苦を不顧故に候、されば數年の内大凶作到來萬民飢餓に及候は、不得己  
候間、天道に代り諸人を救ひ奸曲の役人共を見せつけべきものをと、すると  
き眼にてにらみつけ候様子今も猶目に見え候様覺え候云々」。

是年六月十六日近藤重藏病テ幽閉中ニ没ス大溝邑瑞雲院山内ニ葬ル。

### 天保元年庚寅

文政十三年十二月  
改元是年三月間

先生三十八歳

是年春三月先生高井公ノ命ヲ以テ浮屠ノ破戒汚行アルモノヲ沙汰ス、是ヨリ  
先キ先生屢々府ニ白シテ訓戒ノ令ヲ下ス、是ニ至テ其改メサル者ヲ捕ヘ海島  
ニ流竄スルモノ數十人、僧風是ニ於テ一變ス。

大鹽平八郎傳云 初メ山城守令ヲ下シテ府下僧侶ノ不法ヲ罰セシム、平八郎  
建言シテ曰ク、僧徒ノ破戒姦犯今ノ時ヲ甚タシトス、然トモ檢束ノ久シク弛  
ミタル、今一朝急ニ理メントスルヤ、所謂不教ノ民ヲ戰ニ就カシムル如ク、  
恐ラクハ繁刑ニ堪ヘサラン、乃チ先ツ訓諭ノ令甲ヲ一般ニ布キ、猶以テ悔悟  
セサレハ之ヲ收メテ罰ニ處セハ恩威兩ナカラ全カラント。山城守之ニ從フ。

先生破戒僧  
ヲ沙汰ス

聞クカ如クンハ當時寺院ノ僧規大ニ類レ、梵嫂ヲ著テ之ヲ諸母又ハ姉妹ト僞  
ハリ、公然葷ヲ茹ヒ肉ヲ喫シ、其行業無頼ノ惡少年ニ齊シ、中ニ北野ニ俗ニ  
かしく寺ト稱スル寺僧ノ如キ、巧ニ狐狸ヲ使用シ容色勝レテ己カ意中ニアル  
婦女ニハ狸ヲシテ之ニ憑ラシメ、我カ加持力ヲ以テ解魅セシムルヲ口實トシ  
其女ヲ寺内ニ舍メ恣ニ姦淫ヲ行フノ類最モ甚シ、平八郎一タヒ命ヲ領スルヤ  
即チ之ヲ執ヘ蔓引珠連シテ獄ニ繫カル者五十餘人、各輕重シテ流竄ニ處ス、  
叢林震竦シ寺僧ノ淫風永ク熄ム云々。

按スルニ浮屠ノ沙汰モ亦先生三大事功ノ一也、或云是ヨリ先キ先生高井公  
ノ信任ヲ得テ一タヒ吟味役ノ要局ニ當ルヤ宿年ノ滯獄一時ニ決ス、高井公  
即チ先生ニ提刀登廳ノ格ヲ與フ、是レ幕府目見以上ノ秩祿ニ應ス、吏僚皆ナ  
之ヲ榮羨ス、是ニ至テ三大事功ノ成ル、東西ノ吏曹或ハ却テ先生ノ獨リ其  
威望ヲ收ムルヲ忌ムモノアリ、公事ニ非ラサレハ未タ曾テ一語ヲ發セス、  
先生之ニ處シテ夷然タリシト雖モ、遂ニ衆人ノ怨府トナリ、或ハ不虞ノ讒

高井山城守  
善禿ノ疏ナ  
上ル職ヲ辭  
ス先生職ヲ辭  
先生辭職當  
時ノ役付ハ  
日附役筆頭  
地方法筆頭  
盜賊役筆頭  
唐物諸御用  
頭等御用  
調役等御用  
年正月改大  
阪役人鑑

アルヲ慮リ、功成名遂テ身初メテ勇退ノ意アリト。河村氏大鹽傳  
洗心洞外集下卷平松健之助ニ與フル第四書中ニ云フ。

元來下僚ニ沈居候ヘ共御目見上下由緒御改之節江戸表由緒掛リ御目附衆ヘ  
前以書上來候義モ有之候云々

然ラハ先生ノ御目見格トナレルハ事實ナルヘシ。

藤野海南曰二十餘年前、大阪有老賢、爲余說曰、平八嘗自他歸、與夫不知客  
爲平八、共語平八之政績、且曰、今而不去職、他日將墜令譽、平八意有所感  
發、還家厚謝遣之、與夫駭愕去、招隱之念蓋自是決也。近世偉人傳

此年秋七月山城守高井公年七十二垂ントスルヲ以テ養病ノ疏ヲ上リ代ランコ  
トヲ請フ、而メ未タ允サレス。先生之ヲ聞キ慨然トシテ意ヲ決シ骸骨ヲ乞フ  
高井公義之ヲ止ムルコトヲ得ス、即チ之ヲ許ス、先生是ニ於テ養子格之助ヲ  
シテ其後ヲ繼カシム。格之助即チ父業ヲ承テ與力トナル、先生隱居シテ自ラ  
連齊ト號ス。蓋シ齋人魯仲連ノ紛ヲ解テ求メス節高ク義ノ大ナルニ取ル也。

世人之ヲ聞テ驚愕セサルハナシ、先生致仕ノ日招隱ノ詩ヲ賦ス。

九〇

昇平二百有餘歲、上下無事、而天下不可謂全無弊也。文政十丁亥之歲、迺吾官長高井公莅任之七年也。是歲之夏四月、公命余捕索耶蘇之邪黨于京攝之間、以窮治之。不日招伏就焉。公申呈之府、府聞之于東都憲臺。經三年之久而發落矣。妖邪煽誘庶民之害、於是乎稍息。十二年己丑春三月、公又命余糾察猾吏姦卒與豪強潛通隱交以蠹政害人者。而其所汪連及要路之人臣僕、歷世之官司非不知之。蓋有所怖且憚而遁之歟。若爾不憂世思民之甚者也。余感公之忠憤、終置禍福利害於度外、潛圖密策、施疾雷不掩耳之遺意、以摘其伏發其姦、魁首自刃。餘黨各就刑于藁街、殛死者若干人。舉其贓有三千金、皆是民之膏血也。散之以肇建振恤犖獨之法。姦猾蠹蝕庶民之害、於是乎又漸除。而無告人亦庶幾蘇息矣。十三年庚寅春三月、公又命余沙汰浮屠之汚行。夫不與檢束浮屠、幾年于茲。故肆然犯婦女、食魚鳥焉。甚於不賴之年少。其糞腥汚穢、舉邦皆然矣。不徒此一方也。若急理之、則必不堪繁刑。故敷訓戒

之令、既及再三、終逮捕其不悛者、猶數十人。盡流竄海島、使與邦人不齒。僧風於是乎一變矣。且京兆南都界浦亦風靡。其官司各黜貪饕吏、誅姦邪僧。無皆不出于公之後。然則公之舉諸術之嚆矢也哉。而公年垂七十、其秋七月、養病之疏、而未允。嗚呼、余齡則三十有七、職則微賤、而言聽計從、關大政、除衙竄、鋤民害、規僧風、豈非千歲之一遇乎。而公之進退乃如此。義不得不共乘職以招隱、而觀陳眉公讀書鏡所載、包明之於陽岐王也。不顧妻子之飢寒、奔職不往於汪公徹之府、則余雖俗吏、讀聖賢之書、從事良知之教、能無感于心乎。將見公之去而混樵漁之伍、故賦招隱之短篇。洗心洞詩文。

昨夜閑窓夢始靜、今朝心地似僊家。誰知未乏素交者、秋菊東籬潔白花。

是年九月先生既ニ職ヲ辭スルヤ、野一色信濃守ハ家來小川賢藏ナル者ヲシテ先生ヲ聘セント欲ス、先生己ニ仕途ニ意ナシ、賢藏奸黠多シ、先生叱シテ之ヲ退ク。

是年九月賴山陽日本外史刻成ル、先生一部ヲ得ンコトヲ乞フ、山陽寫本一部

ヲ送ル、先生報ヲ問フ、山陽ノ曰ク、他人ニ於テハ則黃白兄ノ如キハ則チ報ナシト雖モ可也、若或ハ強テ之ヲ賜フ則チ兄常ニ佩フル所ノ刀一口ヲ脱シテ以テ之ヲ投セヨ、當ニ衛身ノ物ト爲ス可シト。是ニ於テ先生月山ノ作ル所九寸有餘ノ短刀ヲ以テ之ニ報ユ、山陽即チ七言古詩ヲ裁シテ之ヲ謝ス。

大鹽君子起索吾舊著外史、答以其佩刀、刀名工所造、陋撰不足以當之、慚悚之餘、賦此奉謝。

先生尾州宗家ヲ訪フ

吾書三千餘萬字、博得君家兩尺鐵、廉明所佩可辟妖、服之護身長不失。君刀疑經斬姦邪、魚腸紋雜血痕亂、吾書字々頗類此、此是千古英雄血、血有新陳用意同、素心相照兩如雪、如新發劓付吾藏、及未覆韻債君閱、君觀吾心吾佩君心、百歲不蠹又不折。

是年秋九月先生尾州ニ赴キ宗家ヲ訪ヒ、祖先大鹽氏ノ墳ニ謁ス、頼山陽即チ送序ヲ作テ其行ヲ壯ニス、是ヨリ先キ先生早ク屢々宗家ヲ訪ハント欲スルノ志アリ、閑ヲ得ス、今ニ至ル、是年先生致仕シテ身漸ク閑逸、即チ始テ此ノ行

山陽送序

ヲ興ス、悠々之ヨリ去テ歸路龍田高尾梅尾ノ諸勝ヲ並セ探ラントス、書ヲ致シテ先ツ豫メ其行ヲ宗家ニ告ケ、且ツ云フ僕既ニ隱者ノ餘ノミ、先考政之丞ノ曾テ槍ヲ建テ、具足櫃ヲ持シ、供揃數多ヲ具セル如キノ格例ニ依ラサルヲ咎ムル勿レト。九月二十八日門人家童四人ト輕裝大阪ヲ發シ、伊勢路ヲ經テ陸路十月七日夕名古屋ニ入り、橋町七丁目近江屋清八ニ投シ、翌朝大鹽氏ヲ訪フ、宗家大ニ喜ヒ歡待至ラサルナシ、先生是ニ於テ始祖善行公ノ御弓ヲ拜觀シ、又宗家菩提所ノ在ル所大光寺名古屋市鍋屋町日蓮宗也先塋ノ碑ニ典ス、神弓ニ對シテハ往時ヲ追懷シテ古風長篇ヲ賦シ、大光寺ニハ即チ先祖祠堂金若干疋ト兩ッヲ納ム奉納シ、淹留七日十月十四日海路大阪ニ歸ル、竹上孝太郎等之ニ從フ。

送大鹽子起適尾張序

方今海内勢偏於三都、三都之市皆有尹、而大阪稱最劇且難治焉、蓋地淵絕、大府而爲商賈所窟、富豪廢居、至王侯仰其鼻息以爲憂喜、尹來治者、更迭弗常者、乃屬吏襲子孫、諸故事如掌故、而尹仰之成、成以賄、蠹于上、浚于



下、結猪買、延閭閻、黠民爲爪牙、乃至藩服要人、或爲之支黨、聲氣交通、尹心知之、而主客勢懸、苟媮傍觀、吏雖有良焉、衆寡不敵、浮沈取容而已。及至近時、乃有吾大鹽子起、奮於吏群、獨立不撓、克治其姦、爲國家祛二百餘年之弊事云。蓋上有高井君之爲尹、能用子起、子起得以展其手足也、子起之始受密命也、自度事濟補國、不濟破家、々有一妾、出之使無所累、然後運籌決策、指顧親信、發摘出意外、斃其爲封家長蛇者、駢首就戮、內外股栗、乃舉其賊、得三千餘金、曰是民膏血也、盡給之小民、因建振濟犖獨法、事在己丑春。先是丁亥、治妖民持蕃教者、盡抉種類、庚寅又汰浮屠汗行者、先申戒勅、不俊者流竄、群邪屏息、至京畿諸衙、承風黜貪墨、獎公廉、當此時、子起能名震三都間、至呼其名以相怵。而今茲七月、高井君告老請代、子起作曰、君退吾烏敢獨進、遂決意、力請退得允、聞者莫不驚愕、野人有賴襄獨曰、子起固當然、非然不足以爲子起。吾知彼其心壯而身羸、才通而志价、非喜功名富貴者、所喜在處、閱讀書、吾嘗戒其過用精明、銳進易折、子起深納之矣、而不得

已而起、爲國家奮不顧身而已、不然安能方壯強之年、衆望翕屬時、奪去權勢、毫無顧戀哉、唯然、故當其任用、呵斥請託、鞭撻苞苴、凜然使望之者如寒氷烈日、以得成此効爾、故觀子起、不於其敏而於其廉、不於其精勤而於其勇退、聽者以爲然。子起家系出尾張同族在焉、今將往省之、身名兩全、報國報家、拜其先墳、可有以告歟、時方秋矣、欲路龍田、過中澤、還討高雄、掛尾諸勝、如脫鞵之鷹、卸馬之馱、餘其俊氣健力、自擊于空、騁于野、快如何耶。襄故言此獎之、且預囑其勿再就鞵就馱也。

文政十三歲在庚寅秋九月

洗心洞刻記附錄抄  
陽明學派之哲學補記

是年十月二十一日先生再ヒ尾州ニ赴ク、蓋シ宗家御弓入土藏、修理及ヒ書齋立廣メ等ニ關スル準備其他ヲ兼テ一旦歸阪シ、先ツ金五十兩ヲ送り、而シテ先生養病讀書ノ地ト爲ス也。此行十一月二日歸阪ス。

大鹽家聞書云 中齋は毎度來名するに大鹽家手狹なるを以て送金して弓倉一棟、離れ家齋一棟を建てたり。弓倉は家康拜領の弓を藏する所なり、此倉は

今は無し二間に三間の倉なりしと又離れは六疊に押込一つ床付にて三疊と一疊との土間あるのみ、時としては二三十人の門人を引連れ來ることあり、勿論横に寝る譯にあらず大抵机に憑りて寝し位なりしと云ふ、逗留は二三日より一週間位にて、來名の時は伊勢其他より學者の訪問多く、及乞食共中齋來ると聞て物もらいに來ること門前市を爲し、中齋又施を好みし由、人に接せざる間は書見のみなせり、「ブツサキ」を着美事なる大小を帯び小男なりし由、極めて氣輕にて誰にても應接せし由なり。尾州木村晋氏筆記

又云 髻中院大鹽波右衛門の證號也大阪の中齋を訪ひしに、本家の人なりとて優待至らざるなく所謂殿様マワシなりしかど、中齋は極めて嚴格なりし人にて、髻中院は大阪の芝居が見たくてならざるに、中齋は芝居のシの字も曰はず、朝は早く起きて門人相手に道場にて柔道擊劍の稽古盛にて竹刀の音掛聲勇ましく太平に飽きたる髻中院は閉口の方なりしと、中齋は柔道の方得意と見えて自ら組打などせし由、倉は一方には書物の版木充滿し、一方には武器充滿し實



齋書舊屋古名籍營生先齋中

にすさまじき有様なりしと云ふ。

大鹽異聞云 名古屋の藩士平岩貞廣左門と稱す砲術算術測量の術に通ず明治七年歿年八十余の談に貞廣の友大鹽某名古屋藩士の宅へ一日盛装の士二僕を従へ案内を乞ひて曰く拙者は大阪の與力大鹽平八郎なり、君家小子と同姓にて君は本家にして小生は末家なり、然るに音問久闊、願くは自今舊交を全ふせんと、後數年平八再び大鹽氏に到りて曰く先年歸路を急ぐ故を以て織、豊、徳の三雄會戰せる長久手の古戰場を探訪せず、遺憾に堪へざること數年、今回足下を煩はして嚮導を託すと、余偶、座にあり、後素及び二僕の風采を見る、而して心竊かに怪しむ後素は幕吏にして儒流なれば其風采の如きは論せずして可なるも、二僕の面貌及眼光大に尋常人に異なり、因て少しく遊歴の次を叩く、曰く年々五畿及三丹、播、作、紀、江、勢等の名勝を探ぐるを事とすと、余疑ふ探勝の舉單身にして可なり、何ぞ若黨仲間を要せん、是或は幕旨を奉じて諸城の要害を伺候するなりと、後天保の暴舉あり、拙老平八を以て幕府の間諜と爲す、豈圖らんや自立の志

を以て諸城の要害を偵察せんとはと、是れ平岩翁の親しく余に語る所なり云々（安井霞橋聞書、安井氏は名古屋の人也）

九八

題始祖善行公御弓

天正十八年。禁旗屬豊公。東征北條氏。社稷掃蕩空。神君時營崎函裡。兩陣相亂血如水。敵之驍將足立某。飛鞍揮刀期必死。騎戰奮振一當百。馳騁盤歛如平地。吾軍爲之少挫劔。其志有所不可搆。吾祖危懼關兩石。一箭逸過鎧外矣。敵將目光怒如火。閃然下馬既尺咫。將織吾祖祖示力。徒手釀是拉以刺。誠而獻之君馬前。手錫親弓賞功美。凱旋不日與食邑。豆州三島冢本里。爾來從軍功亦多。豈管斬將一事偉。請看祖名奇不常。俗稱波右衛門嗣子世襲之亦是神君所寵賜。寵賜芳芬傳口碑。家乘本末闕其事。元和冬夏役。遠戍柏崎壘。老大雖嬰鑠。君恩優養爾。宗室三藩分封後。共經簡擇茲宦仕。孫子守弓世綿連。一家孝慈奉祭祀。余家即派吾祖身。嘗沈吏伍混俗塵。浪華簿領最軼掌。祿米亦厚未全貧。立身行道固闕如。中心慚慙又苦辛。ニスルニラシヤノオフ、ガ、ヲ爾祖詩憤起

惟軒云フ關  
兩石不明ナ  
著者ニ原文  
ノマ、

且將逐古人。幾旬適有邪蘇黨。士女眩惑奉如神。嶺山陳子廉訪日。杖撻女子劉金蓮。不至如張孫兩賊。斬關屠邑傷人民。余感嶺山之前行。筆研聊亦掃妖氛。其餘一二盡織力。吏僧風各一新。是皆吾祖靈所致。若沐褒典却爭津。遂學魯連脫羈絆。書劍飄揚遶海濱。扁舟猶訪大宗家。登拜先塋淚沾巾。曾聞賜弓今始見。六尺有餘體未變。柘乎樟乎木瓜乎。漆絲年古不可辨。極是赤黑鄉心木。材類時與巧精選。犀革隨射必洞徹。雖不飲羽亦不淺。烏號繁弱屈盧弓。皆雖名器無艷羨。神君手澤猶存弣。于弣于矜守不倦。人謂有功伯與侯。乃以彤弓相饗醕。未聞戰士得首級。良幹一張漫輕投。此是非所測知。聖人經權中節優。宣尼解駿舊館人。喪禮雖無誰敢尤。況乎吾祖雖爲士。血從今川先君流。以茲當時錫而拜。世上兒輩議相休。如政化襄有射隼高塘者。冀張舊弦貸之可。乃是吾祖忠魂願。嗚呼神君英靈恐亦如是也。

吾大宗大鹽氏者。先世仕于尾藩。余致仕而遠訪其宗。瞻拜神君嘗所錫。吾始祖善行公之弓。以追感往事。賦詩奉呈。今大鹽君時文政十三庚寅冬十月也。

九九

是年冬十月二十七日山城守高井公罷テ東ニ歸ル高井公ハ養病ノ疏ヲ上ル  
ト共ニ九月東都ニ入レリ十一月曾  
根日向守次孝代テ西町奉行トナル。

鹽賊傳云。余故外姑柳田氏、年少侍御于高井公、親視公與先生相與之狀。

公之將從長崎、公召先生置酒、展平生酒半取、杯以祝焉、杯以金泥描繪

罍卷櫻花、世俗所謂御殿櫻者、既而公視其色不擇也、乃曰其杯還我、我更與

汝佳杯、別取以賜先生、先生受而視之、則金字大書其底曰、一口吞、其時在側

觀之、先生喜氣築々乎、如徹心魂者、軒眉睨坐、在坐者爲之心大動云。

是年十二月田原藩厚產方、大藏永常幕府ノ海島人遷ノ計劃アルヲ以テ先生ノ  
出慮ヲ勸說シ來ル、大藏永常ハ先生ノ老友ナリ、最モ産業經濟ノ學術ニ通ス、  
是ヲ以テ田原藩老職渡邊華山曩ニ厚產方ヲ以テ薦テ仕ヘシム、永常深ク先生  
ノ爲スアルニ感シ之ヲ青雲ノ上ニ引カント欲ス、海島人遷ハ所謂無人島移民  
開拓ヲ云フ也、而モ先生遂ニ病ノ故ヲ以テ之ヲ謝ス。

大藏永常字  
ハ孟純通稱  
徳兵衛龜翁  
下田郡ノ人  
日田郡ノ人  
經濟學ヲシ  
兼テ心學ヲ  
喜アテ人ヲ  
山無人島事  
件ノ獄ニ及  
スルノ由テ  
職ヲ辭シテ  
江戶ニ出テ  
天保十五年  
濱松侯ニ仕  
テ七十七  
役ス

柑本吉五郎  
ハ幕府吟味  
役ナリ

一柑本吉五郎殿企海島人遷之件、委細に被申越、全貴老小生を青雲之上に引  
上度しと、厚き御志無之候ては、簡様之義迄内外御打明之御申越無道理  
と存、御心底之程是又不淺辱存候、兼而御承知之通、小生は二百年來之  
御仁恩を奉報度と存、先頭に仕へ當表之惡風色々有之を七八分迄引直し、  
京攝之間邪宗之黨盛にては、往々不容易事變起候基に付、身命を捨夫々  
根本迄聞詰、漸く落着いたし候、其間には金銀貪取、人民を苦候て御政事を  
取壞し候吏卒姦民に至迄、心力を盡し不殘平治に相成、其艱難苦痛は實難  
申盡、戰場之血戦よりも辛烈、其事は只先頭及小生共談候、一兩人之外知  
る者無之、夫より近來段々病身に相成、退身と心懸候折柄、頭も病氣にて  
參府、夫故退番いたし候てより、篤と藥用養生加可申、其上無餘義御用  
も有之、上命ならば可勤候得共、何分夫迄は養生遊可致と覺悟いたし候、  
御地へ參候心掛も一概に儒を立、經濟を談じ、又者詩文などを可責心底に  
は無之候間、猶篤と小生身上前後之次第を御察し御安心可被下候、且小生

内藤殿の前  
大阪奉行  
藤準人正也

御案内之通、町人豪富之者に交無之、隱退之後は益相遠、迂濶に讀書修身而己專一にいたし候間、所詮被申越候通、當地奉行衆家來より内沙汰有之候とも、内々にて御爲筋とは申ながら不知候て人を引寄、理解などは六ヶ敷、難出來筋にて其邊能々御者可被下候、尤柑本殿當時御役柄にて、内藤殿には日々御出逢可有之、内藤殿當表長々御勤、與力之才不才不殘御承知に付、與力之内には小生と違ひ、豪家之町人と入意いたし候もの有之哉候間、一向柑本殿より内藤殿へ被致置話候は、其任に堪へる人柄速に相分候付、其者に可被命様内懸合有之候は、貴老御見込之通成就可致と存候付、是義内々御禮旁御心添申上候、小生青雲に上候御引立候とも、何分前書之通隱退いたし病身にも候間、今一應御勘辨可然と存候、實心申遣候義に付御承知可被下候、吳々御厚志之始末者言語難申盡候もし追而御地へ參候共前書之通、遊覽而已に御座候乍慮外御安神可被下候、島村氏へも宜奉願候厚き御眷顧千萬奉深謝候、十二月十三日

是年七月五日京阪地大ニ震フ○九月淀川洪水ス諸國凶歉多シ○十月越後新潟ノ百姓蜂起ス物情恟然タリ。

天保二年辛卯先生三十九歳

是年五月城代太田備後守罷メ、松平伊豆守信順之ニ代ル○同五月西町奉行新見伊賀守罷メ、六月堺町奉行久世伊勢守廣正之ニ代ル○同七月矢部駿河守定謙堺町奉行トナル。

是年先生身家始テ閑逸、多年ノ宿志漸ク洗心洞裏讀書ノ人トナル、即チ講學以テ生徒ニ授ケ、著書以テ其ノ蓋著ヲ吐カントス。蓋シ古本大學刮目及ヒ洗心洞割記ハ此ノ間ニ成レリ。

吾既辭職、而甘隱、脫險而就安、宜高臥舍勞苦、以樂自性、然夙興夜寢、研經藉、授生徒者、何也、此不是好事、不是糊口、不爲詩文、不爲博識、又不欲大求聲譽、不欲再用於世、只粉得學而不厭、誨人不倦之陳迹而已、世人莫恠、又莫罪、嗚呼、心歸乎太虛之願、則誰知之乎、我獨自知焉耳。洗心洞割記上卷

儒林談叢  
松崎堂太  
田侯の記  
に於て大  
鹽生と交  
る日中  
の記す  
を詳也  
先生三  
七三六  
逸して  
惜むべ  
々

是ヨリ先キ先生洗心洞ノ爲ニ既ニ入學盟誓八條ヲ定メ、又兒童日課大略ノ目ヲ規スル所アリ。其職ヲ退テ專ラ講學ノ事ニ從フヤ、管ニ廳中子弟ノ學ニ入ルノミナラス、遠近諸藩ノ士從遊スル者愈々多キヲ致ス。是ニ於テ先生又新ニ學名學則並ニ讀書々目ヲ定ム。

洗心洞學名學則並讀書々目

弟子問於余曰、先生學謂之陽明學乎、曰、否、謂之程子學朱子學乎、曰、否、曰謂之毛鄭賈孔訓話註疏學乎、曰、否、仁齋父子之古學乎、抑徂徠主詩書禮樂之學乎、曰、否、然則先生所適從將何學耶、曰我學只在求仁而已矣、故學無名、強名之曰孔孟學焉、曰其說如何、曰我學治大學中庸論語也、大學中庸論語、便是孔氏之書也、治孟子也、孟子便是孟氏之書也、而六經皆亦孔子刪定之書也、強名之曰孔孟學也、毛鄭賈孔之學、則只註釋經書之名義也、程朱之學、說破經書之精微性命之底蘊也、陽明先生之學就其中提易簡之要也、仁

齋徂徠則特其唾餘耳。嗚呼、孔孟之學在求一仁、而仁則難遽下手、故或讀其訓話註疏、而求其影響、或因其居敬窮理之工夫、以探其精微、窺其底蘊、或致良知以握其易簡之要、而畢竟各皆歸乎孔孟之學也已矣、然而孔孟數千百歲以前、既逆知數千百歲後、諸儒各爭意見、立宗分派、以爲同室之鬪矣、故孔子以孝經授於曾子、而謂之至德要道、孟子亦曰、堯舜之道孝弟而已矣、以是考之、則四書六經所說雖多端、仁之功用雖遠大、其德之至其道之要只在孝而已矣、故我學以孝之一字、貫四書六經之理義、力固不及、識固不足、然求諸心、而真窮心中之理、將以死從事斯文矣、故直曰孔孟學、是乃似僭而不僭矣、吾徒小子宜奉遵焉、而若有問我學者、則以之答而可。

孝經 增補孝經葉  
註並鄭註本

古本大學 序解

中庸 朱註

論語 朱註

孟子 朱註

右一經四書

易 程傳

書 蔡氏集傳

詩 呂氏讀詩記  
並朱子集傳

禮記 陳氏集傳並  
三禮義疏

春秋 並三傳

周官 三禮義疏

右七經三傳

儀禮 三禮義疏

傳習錄

朱子小學

四名公語錄

近思錄

陽明子集類

王門諸子書類

程朱書類 有口訣

歷代理學名賢書類 有口訣

右理學

二十一史

通鑑綱目

讀史管見

名臣言行錄 各有口訣

右史類

八大家文集之類

杜詩及十五家詩選之類

池田草庵之  
ヲ林其齋ハ  
ナク夏齋ニ  
開ク多度津  
ノ人先度津  
ノ人ナリ後  
ニ出ツ

右詩文

是ニ於テ洗心洞ノ學制全ク具ハル、而メ之ヲ鼓舞激勵スルニ武術ヲ以テス。  
池田草庵聞書云 大鹽中齋は平生精神氣魄極めて盛なり、時々晝夜寝ねざ  
るもの十餘日精神故の如し、常に酒を飲まず、飲めは即ち斗半を盡して平  
日に異なるなし、飯は一度に十杯位、およそ路を行くこと一日に三十里、朝  
は常に八ツに起きて天象を觀、門人を召して講論す、冬日と雖も戸を開い  
て坐す、門人皆堪へず、而も中齋は依然として意を爲さず、その氣魄の人  
を壓する門人敢て仰き視ず、その家にあるや賓客の來ること虚日なく、又  
自ら立ちて門人に武技を教ふ、終日多事なり。而して其の讀書該博なるこ  
と此の如し、抑も又怪しむべきなり。

洗心洞餘瀝云 大鹽の教育の模様で御座りまするか、そりや今も申ました様  
な有様で中々殿しう御座りましたが、又面白ふ御座りました。  
世の中になにか恐ろしいと思ふものはあるか。

先生ノ教育  
法



へいそりや御座ります、斷岩絶壁の上に立て下を見ればなんとなくぞつよ  
して氣味が悪ふ御座ります。

なに氣味がわるい、すれはなせ氣味が悪いか、其分けを申せ、岩が轉倒か  
へるか、下から何者が引ばりでも致すか。

へいどうも分り兼ねます。

分らんことはない、よう考へてみる。

そのまゝふいと立て往かれます、こなたでは門弟共皆々評定すれども中々分  
らず、暫くすればあらより大聲あげてどうぢや分つたか、いやどうも分りま  
せん、うゝ鬼神之爲徳其盛矣乎、視之而弗見、聽之弗聞、體物而不可遺、  
使天下之人齋明盛服以承祭祀、洋々乎如在<sub>二</sub>其上<sub>一</sub>、如在<sub>二</sub>其左右<sub>一</sub>（中廡）をどうみ  
て居る、貴様らの學問は上すべりしてしまつて少しも身に入らない、土性骨  
をうんと叩いてしつかりせにやなにゝなる……一寸こんな風です。

又云私の入塾中に駿河守様の御子息がみわてゝ御座りましたが、毎日の御辨

此頃中阪  
谷朗廬（名  
ハ素）高槻  
藤井竹外  
（名ハ啓）等  
門人ノ列ニ  
アリ

早崎岩川名  
ハ勝任通稱  
ハ新津藩ノ  
人洗心洞ニ  
學ブ

當に山海の珍味を盡されましたので、大鹽がそれを見てあまり食すぎます、  
以後は此方にて致しますとて、翌日は蕪弱の天ぷらあへを進められました、  
それから他の塾生への食事は毎日七ツ時に鰻の頭を出されました、御飯の御  
菜は大抵隔日に鮭鮒などの鹽の物があたる計りて御座ります。

早崎岩川筆録云 中齋先生ノ其塾生ニ教フルヤ常ニ出衙ノ前ニ在リ、天未ダ  
曉ケズ、塾生悉ク講堂ニ集ル、未ダ幾クナラズ先生手ニ大刀ヲ提ケテ而メ之  
ニ臨ム、凜トシテ犯ス可カラス、塾生俯伏仰キ見ルモノナシ、講了テ家ニ歸  
ルニ追テ精神尙ホ奮興シテ而メ終日倦怠ニ至ラス、其ノ何ノ故タルヲ知ラザ  
ル也。

阪谷朗廬傳略云 文政中廬朗從父寓大阪朗廬受四書句讀於奥野小山、記  
誦甚苦、小山以爲遲鈍不能成業、又學大鹽中齋門、門人多愚弄之、中齋獨奇之  
曰異日成大名、天保三年父挈家徙于江戸、中齋請留朗廬教之、以幼辭、中略  
於是文名藉甚、嘗作文寄小山、小山驚瞠、深慙其無鑒識、而人皆服中齋云々

是ニ依テ洗心洞ニ於ケル學問ノ一班ヲ見ルベシ、乃チ先生ノ名相傳テ眞儒新  
タニ起ルト爲シ、遠近爭テ交ヲ求ムル者多シ。

鹽田士別名  
ハ華字陳敬  
通稱又之丞  
也  
小竹畏中  
警一如虎

鹽賊傳云 歲之辛卯、余遊津藩、講官鹽田士鄂爲余語曰、子未見大鹽中齋、  
乎、中齋新有眞儒聲、華昨遊坂、欲必見之、囑彼崎承弼紹介、承弼畏中齋如  
虎、不輒肯、曰若子粗暴、必俾弼獲罪中齋、他人可矣、中齋則不可、華遂不得  
而見也、余始知大鹽某其人又爲吾徒先輩所欽嚮、鹽賊傳附錄

林大學頭ノ  
家政ヲ救濟  
ス

是年林大學頭ノ家政窮乏シ、執事ノ將ニ大阪ニ來テ債ヲ市ニ募ラントスルニ  
會ヒ、先生憤然トシテ天下ノ學宗遂ニ茲ニ至ラシムベカラストシ、自ラ千金  
ヲ作テ一時林家ノ家政ヲ救濟ス、知ル者先生ノ義俠ヲ稱セサルナシ。

千里翁聞書云 平八郎が林大學頭の頼母子無盡講を峻拒して別に千金を義捐  
したる如き、當時に在て實に美談中の美談佳話中の佳話たるを失はじ、平八  
郎一日同僚八田五郎左衛門なるものを訪ふ、座に一客あり未だ相識らず、平

五郎左工門  
一ニ衛門太  
郎ニ作ル

八郎五郎左衛門に問うて曰く渠れ何爲ものぞと、答て曰く彼は江戸の客林祭  
酒の執事なり、方今林家貧歎家政殆ど支へず、因て頼母子無盡講を四方に募  
り衰運を挽回せんと欲し、今や當地に來て千金を募ることを囑せらる、予左  
思右考未だ答ふる所を知らずと、平八郎喟然として嘆じて曰く嗚呼林家は天  
下の學政を掌るもの、倘し今假使貧薄骨に徹すと雖も何ぞ靦として世の愚夫  
愚婦の輩に倣ひ此の不祥のことを爲すに忍ひんやと、義氣凜然執事に説くに  
大義を以てす、曰く頼母子の事たる固と征利の徒の爲す所、堂々たる林家にし  
て今忍んで此を爲す天下其れ此れを何とか言はん。平八郎貧なりと雖も胸中  
一策なきに非ず、肯て明日を期して千金を林家に投せん、執事早く江戸に歸  
り以て頼母子の議を止め、林家をして汚名を蒙らしむること勿れと、義氣色  
に溢れ、乃ち明日を約して去る、平八郎固と廉潔門に鬻獄錢を納れず、庵食  
浣衣嚴苦自ら持す、故に室内萬卷の藏書の外留儲見錢なし、是に於て門人中  
の富裕守口村白井幸右衛門、盤若寺村橋本忠兵衛等數人を招き、説くに林家

の實情を以てし千金立ちに整ふ。明旦期に及んで執事來る、平八郎豫め酒一壺を出し、別に下物を具へす、曰く僕か家元と清貧執事を留めて欺待するの別物なし、只平生教養する所の門人數輩あり以て下物に資すと、乃ち諸生の經義に通するもの數人を招き宴に侍し經を講せしめ、且ツ聽き且つ飲む、其の情に感し興に乗するに至ては擊節浩歌聲林木に振ふ、而して徐ろに千金を執事に附して曰く早く還て主家の爲に謀れと、是より平八郎自ら謂らく昔魯仲連魏の爲に新垣衍に説き秦を帝とするの議を止めしむ、天下の義とする所也、今予林家の爲に千金を擲て頼母子講の議を中止せしむ、事に大小ありと雖も其の大義たるに於ては敢て異なる所なしと、是より自ら號して連齊といふ云々。

佐藤一齊云  
往年後素  
來江都  
調林祭酒  
過余舍而  
不入云

大鹽平八郎實記云 大鹽平八郎は今隱居の身となりて閑逸の餘、久しく音信も絶々なれば東都へ下り彼の林家の安否を問はんと、門弟中へ其旨具に物語り、夫より旅の用意をなして出立ち名所古跡を見物し、年來の鬱を散し頓て

此行爲不見  
林氏不爲  
故不レハ也  
時ノ事カ此  
或ハ云フ門  
人窪田英治  
上京ニ從  
フ、行ケハ  
必ス高井公  
ヲ其邸ニ訪  
フト、其説  
ハ是ヨリ説  
傳メ

歸阪なし、我林家より餘儀なき頼みを断りかたく承引て立歸りしも、中々以て我か微力にも及ひ難し、夫につき氣の毒ながら無盡を取立たく思へは迷惑なから加入してと、彼の隨順の者共へ頼みけるにぞ、一同も師の頼といひ平八郎が平常の氣質を知り居る者餘儀なき次第と承引て守口宿の白井孝右衛門は人も知りたる富家なればと、是へ頼みて金五百兩、猪飼野村主木村主馬之助に金二百兩差出させ、其外身元宜しき者へ夫々分限に相應し、百兩、五十兩、三十兩と段々出金いたさせける、其節林家の表印また大學頭殿の裏印ある證文數通を平八郎より銘々へ渡し、兩三年は此證文の金高に應じ割戻せしも、其後平八郎皆々を自宅に招きて言けるは、先達て中頼み入し無盡の事につき、大恩を請し師の頼みに黙し難く、各々へ無理なる無心を申入しか我何とか師恩を報したしと豫て思居し所なれば以來は我より返金すべし、因て何卒林家より渡し置れし御裏印の證文を返し給はるべしとの頼みに、皆々外ならざる義と承知せしに則ち林家の證文は皆般若寺村忠兵衛か名印の證文と引

此説代官根  
本善左衛門  
風書に同

替り云々

又一説云 大鹽は大學頭の困難を救ふ爲め莫大な大金を自分の保證を以て大阪に於て容易に調達した、此の義侠な態度に對しては大學頭は非常な感謝を拂つた、而して大學頭は家に秘藏の或物を贈て聊か謝意を表した、何物を贈たか唯々贈つたといふ手紙があるだけで其の物は竟に分らない、而して大鹽は之に對して私は何も報酬を要求する考はないけれども、大阪では十分良書を得られぬのでかね／＼残念に思ふ、何卒紅葉山文庫の本を見る事が出来る様に便宜を御頼みしたいと答へた云々。

尙ホ別ニ先生調金ノ事ニ係ルモノ文書ニ求メテ新見伊賀守家宰武藤休右衛門ニ送レル二書アリ、一ハ先生調金ノ事ノ公義ノ爲ニスルノ誠意ヲ述ヘ、一ハ現金受授ノ方法及ヒ林家證文認振ニ就テ云ヘルモノ、恐ラクハ林家救濟資金調達ニ關スル者ナルヲ知ル。

第一書 御調金之義被仰下右は先般御直書之内へ申上置候處、今一應御沙汰

瀬田藤四郎  
之助ノ義  
父ニシテ  
居セル者  
云フ

も御座候趣被仰下御座候上、貴老様當春御下阪にて藤四郎方へ御越も御座候趣承知罷在候間、御老體御六ヶ敷可有御座候へ共三月と不申御出坂被下候様御待申候、當方に於ては何之之差支無之候、申迄も無御座一體小生義者

公義を大切に奉存候てよろしく御世話奉申上候義に御座候、自分之身爲にいたし候様の存心更に無之候間いつ迄も其處御忘却無之様いたし度奉存候云々 正月十七日

同第二書 三百金之口も御渡可申候間、別紙案さし進候間御覽御存寄無御座候は、證書御認取、御子息様歎、又者信濃屋伊右衛門にても拙宅へ向け御下可被下候、御證文と御引替可申候間御安心可被下候、藤四郎より受取御座候、尤も信濃屋伊右工門方被受取候様之手形にいたし置候、下拙可參候處風邪流行、門人共さし支御座候間無據以書中及御掛合候、尤伊賀守様よりは未た否や不被仰越候得共、御約束之日月も有之追々相延し申御老翁御心配と御察申候故右之通取計申候

武藤氏名ハ  
榮信齋ト  
號ス江州安  
上ノ新見氏  
時ニ新見氏  
新見氏ノ大  
阪ニ奉行之  
カニ武藤氏  
君臣トナル  
シト親ミ善

尚々御證文御裏書新見伊賀と御認御返御越候様相願候、林家認振左様に御座候店主宛に無之、取次人之義に付御勘辨可被下候 十月三日

按スルニ先生林家救濟ノ事蹟傳説區々未タ真相ヲ明ニスルヲ得スト雖モ、以上ノ諸説ヲ綜合スルニ經緯ノ概略ヲ察知スルニ難カラス、千里說ニ連齋號ヲ繫クルト書牘ニ新見伊賀ヲ引ケルハ其年紀ノ略々事ノ天保二三年ニ繫クルヲ事實トナスベキカ。尙ホ千里說ニ先生ノ林家執事ニ八田衛門太郎宅ニ會シタリトセルハ、實ハ八田氏ニ非スシテ瀨田氏ナルベク、而メ林家執事トセルハ武藤休右衛門ニシテ武藤翁ノ此ノ運動ノ實ハ新見伊賀守ノ計劃ニ出テタルニアラサルカ、先生ノ武藤氏ニ贈レル二書ニ瀨田藤四郎、新見伊賀守ヲ舉ゲ、而メ林家ノ證文認振リノ店主宛トセスシテ新見宛トスル注意書等ニ見ルニ其消息ヲ推知スルニ難カラザルガ如シ。

年表參考 是年三月大渡 大阪諸川 築山安治川口 號目標山(和漢)

是年歲晚先生詩ヲ賦シ懷ヲ述ブ曰ク

辛卯歲晏書懷

自隱牆東既兩年。歲寒無事玩韋編。有事此生猶雨露。後凋庭柏笑相看。

天保二年壬辰<sup>是年十一月間</sup>先生四十歲

是年春正月先生山居即事一詩ヲ賦シ懷ヲ述フ

清柳紅梅各向陽。展眉含色好風光。山寒大澤層氷鎖。窟裏蟄龍鱗未張。

是年四月賴山陽京師ヨリ來リ洗心洞ヲ訪フ、先生置酒シテ相共ニ語ル、先生其著古本大學刮目及ヒ洗心洞剞記稿本ヲ出シテ之ヲ示ス、山陽一見シテ深ク其學ノ大醇ヲ推稱シ、他日ヲ待テ之ニ序セン事ヲ約ス、此日觴酒ノ間繾綣ノ精深ク山陽平生ノ快活ナルニ似ス、果シテ遂ニ永訣ノ兆ヲ爲スト云フ、先生ノ記ニ云

壬辰四月、山陽又下江訪余、觴酒之際、山陽謂余曰、兄之學問、洗心以內求、如襄者、外求以內儲、而作詩、而屬文、如相反然、々請一見吾古本大學刮目之稿、故出之以示焉、讀其綱領、畢曰、是非一家言、昔儒格言之府也、襄也雖不

賴山陽嘗テ  
先生ニ乞テ  
借リ之ヲ讀  
ム讀了テ返  
ス時ニ一詩

山陽洗心洞  
ニ遊フ

敏請序之、余答曰、他日煩之、而復以未刻之割記若干條、乃亦示焉、其讀而過半、日既暮矣、不能盡之、曰待上梓、以評之、然今所一見之條々、於聖學之奧也、無間然、深服太虛之說云、觴酒之際、其情繾綣、其果永訣之兆欲。割記附錄抄

是年五月先生連齋ノ號ヲ改メテ中軒ト云ヒ、後中齋ニ改ム、初メ先生魯仲連ノ大節高義ニ慕ヒ取テ連齋ト號ス、是ニ至テ自ラ省ミテ曰ク魯仲連豈道フニ足ランヤ、君子ハ中庸ニ依ル、世ヲ懸レテ知ラレサルヲ悔イスト、遂ニ中軒ト更メ後チ中齋ト號スト云フ。服部鐵石聞書

是年夏六月、先生閑逸無事ナルヲ以テ多年ノ宿志琵琶湖ニ泛ンテ江西小川村ニ中江藤樹先生ノ遺跡ヲ訪フ、從フ所門人白井尙賢、松浦千之及ヒ家僮ト三人ノミ、書院ノ主事志村周介ニ就テ昔賢講學ノ遺業ヲ觀、又玉林寺ニ其墓ニ拜謁シテ先生ノ德業ヲ欽ス、覺エス淚墜テ臆ヲ沾ス、即チ詩ヲ賦シテ之ヲ弔フ、藤樹先生ハ慶安元年戊子八月二十五日ニ沒ス。享年四十一是ニ至テ實ニ百八十五年

ヲ賦シテ先  
生ニ贈ル  
爲儒爲佛  
休談吾喜  
文章多古  
北地粗豪  
成險、靈輸  
講學老陽  
明  
(割記附錄)  
先生連齋ノ  
號ヲ中齋ニ  
改ム

先生藤樹書  
院ヲ訪フ

遠賦本末類  
攷云書院教  
授志村世稱  
名可敦通稱  
周治男力之  
稱又周治之  
後大世賴沒  
來遊世初之  
か門人ニ爲  
る云々

也。此日先生志村周介ノ爲ニ一詩ヲ書シテ其勞ニ報ユ、後又書シテ松浦千ニ與フ曰ク

藤樹先生之弟子之耳孫、志村周介主其書院事、投之以此詩、又書以與松浦誠之、尊德性道問學之功、不可以不困勉也、是吾一家言哉、游新建侯之門、劉氏曉亦復云爾、于時天保三壬辰夏六月五日、洗心洞中軒。

大學孝經將魯論、秦州王未越州王、英材曾聽道之簡、愚者亦醒知的良、私淑西河該禮樂、親傳東廓富文章、一斑稱聖君還憾、始有知音弔舊堂、

歸路ハ即チ大溝ヨリ舟ヲ買テ坂本ニ至ル、途ニ狂瀾怒濤舟屢々覆ラントス、門人家僮皆ナ醉フ、先生獨リ靜ニ程伊川ノ培州行ヲ想起シテ誠敬ヲ持ス、曉無事坂本ニ着ス、翌朝門人ト比叡山ニ登リ、四明ノ巔ヲ極テ歸ル、記行アリ洗心洞割記下卷ニ收ム、其文頗ル讀ム可シ。

訪中江藤樹先生遺跡於小川村記

壬辰之夏六月、予以閑逸無事、發浪華、至伏水、而之江州、泛湖以訪中江藤樹

先生遺跡於小川村焉。小川在西江比良嶽北，先生我

邦姚江開宗也。謁其墓，想像其容儀道標，淚墜沾臆。其書院雖存，而今無講先  
生之學者。其門人之苗裔業醫者，乃監守之，如守桃然。予於是賦詩曰：「院畔  
古藤花盡時，泛湖來拜昔賢碑。餘風有似比良雪，流滅無人致此知。」歸時於大  
溝港口復買舟，予與所從之門生及家僮四人耳，更無同舟人。再泛湖南向  
坂本，將還吾鄉，而自大溝至坂本，水程凡可八里，此即我邦里數，而非異朝  
之里數也。當異朝之里數，則六十八九里矣。解纜結綯，既未申際，而日晴浪  
靜，柔風只颯々而已。至小松近傍，北風勃起，圍湖四山各飛聲，而在瀾逆浪，或  
如百千怒馬衝陣，或如數仞雪山崩前。他舟船皆既逃而無一有，其張帆至低  
三尺強，而乘其怒馬，踏其雪山，以直前勇往，如箭馳者，只是吾一舟而已矣。忽  
到鰐津，聞鰐津雖平日無風時，回淵藍染，而盤渦谷轉，巨口大鱗之所游泳出沒，  
乃湖中至險也。而況風波震激時乎。推篷見水面，則爲所謂地裂天開之勢，奇  
哉。颶風忽南北兩面吹而軋，故帆腹表裏餓飽不定，是以舟進而又退，退而又進，

右傾則左昂，左傾則右昂，如踊如舞，飛沫峻濺入篷侵牀，實至危之秋也。舟子  
呼曰：他舟皆知幾，故避之，如某獨誤不能前知焉。而乃至此，吁命也哉。雖然  
無面目對客耳，吾察其言意，似不免其葬魚腹之患，因却慰諭舟子曰：爾誤  
至此命也，則吾輩至此亦命矣，俱無如之何，只任天而已。何足患哉。門生家  
僮，既如醉惡酒，頭痛眩暈，其心如慮覆溺者，雖予實以爲死矣，故不得不  
起憂悔危懼之念，是時忽憶於藤樹書院所作無人致此知之句，心口相語曰：  
此即責其不致良知之人也，而我則起憂悔危懼之念，若不自責之，則待躬  
薄，而責人却厚矣，非恕也。平生所學將何在，直呼起良知，則伊川先生存誠敬  
之言亦一時并起來，因堅坐其飄動中，乃如對伊川陽明二先生，主一無適，忘  
我之爲我，何況狂瀾逆浪，不敢挂于心，故憂悔危懼之念，如湯之赴雪，立消  
滅無痕，自此凝然不動，而颶風亦自止，柔風依然送舟，終著坂本西岸，此豈  
非天乎。時夜既二更矣，門生家僮皆爲回生之思，以互賀無恙，遂宿坂本，明早  
天晴，登天台山，盡四明之最高，而俯視東北，則乃湖也。疇昔所經歷之至險，

皆入眼中、風浪靜而遠邇朗、實一大圓鏡也、漁舟點々如麤子、帆檣數千、東去西來、易乎平地、似無可危懼者焉、於是門生謂余曰、昨憂悔危懼抑夢乎、亦天譴吾師乎、余曰、否、非夢而真境也、非天譴而金玉我也、何者、非逢其變、則焉窺得真良知真誠敬哉、又焉得真對伊川陽明兩先生哉、故曰真境而非夢也、金玉我而非天譴也、然則福而非禍也、賢輩亦毋徒追思憂悔危懼之事而可也、無益于身心也、且賢輩盍復視夫城邑乎、其亦在杖履底、如蜂窩蟻垤者富貴貧賤所同棲也、故我則却得小魯之興、心廣而身裕、眼豁而腳輕、賢輩亦宜共同是興味焉、於是又賦詩、詩曰、四明不獨盡湖東、西眺洛城眼界空、人家十萬塵喧絕、只聽一禽歌冷風、最高難夏氣如秋末胸中益灑々然、覺無一點渣滓、因謂、吾輩纔即其境、呼起良知、存誠敬、猶且忘了至險、而登嶽雖再顧萬死處、不心寒股栗、而湛湛悠悠々、却心得聖人同焉之興、而況如伊川先生、通晝夜徹語默、存誠敬、則其謂雖堯舜之事、只是如太虛中一點浮雲過日、實見而非虛論、斷可知矣、因適記先生活州之水厄、遂又及余湖上之事、此非比焉而誇言

也、只欲俾人知致良知、即是爲誠敬、存誠敬則良知照々然如日月、初無二致也、故詳述以告同志焉、所從之門人白履松誠之初記下卷第四百四條

是年秋九月賴山陽京師山紫水明處ニ在リ、血ヲ吐テ病革ルノ報アリ、其十三日先生急遽馳テ之ニ赴ケハ、則チ其日既ニ沒ス、年五十三、先生大哭シテ歸ル、歸テ往事ヲ追思ス夢ノ如ク幻ノ如キアリ。劄記附録ニ云

夫山陽之善屬詩文、洞通史事、詩客文人之所知、而我則嘗爲吏、與參訟獄、且講陽明王子致良知之學者也、以世情視之、則如不與山陽相容然、然往來不斷、送迎不絕、何也、余善山陽者不在其學、而竊取其有膽而識矣、而山陽有何所觀以善我乎、吾初不識也、庚寅之秋、余致仕後、如尾張宗家大鹽氏、以謁祖先之墳墓焉、當其時、山陽製是序、餞我之行、其於人之難言時事、彼獨能開口言之、而無有忌憚之情態、則豈非其膽之發見乎、戒余以不再就構與帶、則亦可見其識之大略矣、嗚呼傷哉、嗚呼悲哉、今使山陽延命在、而盡劄記兩卷、則不益於彼、必益於我者、蓋亦不少矣、惟是余一生涯之遺憾也



而已矣。割記附  
錄抄

先生此秋賴子ト共ニ九州ノ形勝探尋ノ約アリ、而メ賴子終ニ逝ク、山川ノ風物獨リ先生ヲシテ傷心ニ堪ヘサラシムルモノアリ、京師ノ同友秋吉雲桂ニ復スルノ書中ニ云フ

秋吉雲桂  
京都人  
有栖川宮  
御親王

山陽賴君棄世、御互悲悼無疆、此中出京御訪申候處御他行不得拜晤遺憾不少候、其翌關根へ御訊被下候よし千萬辱仕合奉存候、高尾へ可游積之處嵐峽限にて直に漕へ出歸舟仕候、譯者山陽子當四月下阪被訪當秋者九州地探勝同伴相約候處、今度之凶變實不存寄事に御座候、天下之材五十有餘にて歸泉誠に可惜事に御座候、其念山水を仰て倏忽相起、高雄者乘置歸候義ニ候、又出直シ可申候間其節緩々拜顔可申候云々(九月三十日)

先生ノ山陽ノ喪ニ於ケル痛悼惜カザル斯クノ如シ、而メ山陽ノ先生ニ於ケルモ其ノ學問事業人物ヲ知ル又之ニ踰エタルナシ。山陽又嘗テ先生ヲ楠公ニ比スルノ説アリ、

曹大露  
山陽常  
ニ言テ  
曰ク  
香中齋  
ト語  
ル掩ハ  
ルカ  
所アル  
政講學  
一切ノ  
事其欲  
言ハント  
スル所  
ト能ハス

宮原節庵話説云 山陽の觀楠廷尉把杯圖の古詩一篇は、山陽が茶山翁を訪ひし時席上に作りし所にして、歸路其の稿を小寺廉之笠岡藩政  
業館教授に示し、且つ之を書して大鹽に贈らんと欲することを語りたるよし、後年廉之余に語られたり、當時山陽か書贈りし詩の序とか跋とかには大鹽を楠公に比へたるやうの語もありとか云々。

按スルニ先生ト山陽トノ交遊久シト云フ可カラス、山陽ノ母梅枝、先生ノ爲ニ扇風ノ和歌ヲ詠シ、先生又山陽ノ爲ニ高樓巨鐘ノ詩ヲ賦シテヨリ十年傾蓋故人ノ情アリ、親交人ノ羨ム所、而メ山陽早ク没シ、先生後レテ義ヲ舉ケ却テ賊名ヲ取ルニ及テ、世上漫ニ兩雄ノ交ヲ猜シ、山陽ヲ揚ケントスル者ハ先生ヲ貶シ、先生ヲ忌ムモノ山陽ヲ庇セントス、一犬虛ニ吠ヘ萬犬實ヲ傳フ、試ニ今其二三ヲ舉ク、蓋シ誣妄ノ説賴鹽二子ノ與ラサル所也。

岡田后得曰 賴山陽書傳習錄後曰、吾友大鹽士起喜王學、知其人豪傑、當以此學適用、適用斯可矣。又知其必不籍口良知、以爲恣睢、如明清間王學

者流也。山陽書此。在文政丁亥。後十稔天保丁酉。士起果恣睢暴舉。得亂賊名。山陽之言如者龜鳴呼孰謂學者迂遠而濶於事情哉。近世偉人傳 大鹽傳評

近藤潛庵曰。初余始見先生。先生偶品評當世有用之人物。坐有一士人焉。問賴子成。曰於士卒三十人。使之指麾。何有。問彼崎承弼。曰彼護緩急際。其躬猶且失所措。何暇指麾人能為。余聞以為偶言。其後弘化丙午。余復在京。見森田生者。自謂學於賴門。因語其所會聞。曰先師曾挈兒士剛。遊浪華。素期數日淹留。當是時。先師方與大鹽善。乃又拉門人之往浪華者。後藤世張。偕共過洗心洞。歎唔焉。酒間大鹽將有言。請屏。士剛世張等於佗室。少焉先師遽出而呼曰余去矣。此夕僦舟上。澳水聲咳不成睡。夜且半。乍起揭篷屏。顧視阪府所在焉。放聲獨語曰。癡漢々々。語氣類嘲罵人者。因擴目睨者良久不已。士剛等侍側莫測也。自今而想聞其形迹。賊所屏人而言者。我可以知也。然則大鹽實欲用子成。使子成指麾士卒三十人耶。子成癡漢一言。實悉賊。然至凡所傳聞。則與余所目擊異矣。或有出入不可信。非獨此事而已也。覽者視為

鹽賊傳先生  
字以テス  
今賊字ナ思  
ミ改メテ先  
生ト爲ス前  
後之ニ數フ  
讀者諒セヨ

稗官野史而可。

宮原節庵曰。賴子成生時大鹽と親み善し、當て田能村竹田を拉し偕に大鹽の家に過る、歸りて後竹田子成を諫て曰く、余大鹽を觀るに險人也、吾此くの如きの人と交るを欲せず、子も亦斯る人に近く勿れと、竹田の是說竹田之を茶山翁に語り、翁之を余に語れり云々。

是年六月東町奉行會根日向守罷メ戶塚備前守忠榮之ニ代ル。

是年歲暮先生詩アリ自強不息ノ意ヲ述ブ。

真知ル一日一周天。寧學ン餐霞長壽僊。往歲不籌值今歲。經過三百九十年。是歲有閏月故云

### 天保四年癸巳先生四十一歲

是年春正月元旦先生詩アリ世事類廢人心荒涼ノ意ヲ寓ス

楚々衣裳形樣新。周旋溫和賀年辰。問ハ心猶ハ結冰霜氣滿眼何人實得春。

是年四月先生其著書洗心洞劄記ヲ家塾ニ刻ス、是ヨリ先キ先生ノ著書古本大學刮目アリ、秘シテ未ダ敢テ社中子弟ニタモ傳ヘス、去年四月山陽ノ爲ニ請

ハレテ一タヒ之ヲ示ス、所謂相外不出ノ書ナリ、今茲門人ノ編摩ノ勞ニ與ル者先生ニ請テ曰ク、之ヲ剗削ニ付メ以テ世ノ同志ニ惠マハ則チ幸甚ナラント、先生乃チ辭メ曰ク何ソ敢テセン、々々々。夫レ自ラ經ヲ註スル固ヨリ難シ、諸說ヲ折衷メ以テ之ヲ釋スルノ尤モ難キ也、明鑒博雅ノ君子ニ非サルヨリハ則必遺漏贅疣ノ誤アラシ、故ニ釋セスシテ而メ可ナル者ニモ猶ホ之ヲ釋シ、釋セサル可カラサル者ニモ而メ反テ之ヲ釋セス、而メ又其採入スル所或ハ經ト牴牾シ決裂他解ノ如キモノアリ、則チ獨リ經ヲ賊スルノミナラス、則チ儒先解經ノ累ヲ併セ貽スニ至ラン、余ノ輯録スル所ノ者恐ラクハ當ニ斯罪アル可シ、若夫斯學ニ志アルモノ寫シテ以テ閱セハ可也、而モ猶ホ已ム無クンハ則其唯剗記乎ト。即チ剗記ヲ刻ス、蓋シ先生學術ノ蓋底傾倒メ此ノ書ニ在リ、實ニ古今ノ傑作ト爲ス、先生自序中ニ云フ。

余剗記者、借倣河東讀書錄、寧陵吟呻語、及寒松堂庸言等、每有目之所觸、心之所得、筆之以自警、又以助發子弟之憤悱已矣。故子弟爲省轉寫之勞、胥

一曰太虛、  
二曰致良知、  
三曰變、  
四曰化氣質、  
五曰死生去處。

一曰即、  
二曰事、  
三曰虛、  
四曰心、  
五曰洗。

謀上諸梓、藏于家塾、而不公于世、則安得不許之哉、請者曰諾、舍彼梓此、將從命矣、雖然將來若漏出於世、則百毀千謗、必此甚乎彼矣、何則先生論學有不協於人情者五焉、一曰太虛、二曰致良知、三曰變、化氣質、四曰一死生、五曰去虛僞、夫太虛似釋老、致良知敵朱學、變化氣質客氣勝心者之所難、一死生、凡庸怯懦輩之所忌、而虛僞則中人已下、弗无始之妄緣、攙和於其血肉間者鮮矣、故無一不逆其意、欲免於世之惡得乎、百毀千謗、此甚乎彼之云以此也、先生宜三思焉、余對曰、誠然々々、而子等以此五者爲先賢之成語乎、又謂我之創說耶、我之創說則宜有後慮也、先賢之成語、而吾特發揮之焉耳、則又何足患哉、況此非如剗目釋一經之比、是以未嘗有賊經與貽儒先解經之累之罪也、要一家言也已矣、故縱百毀千謗萃於我、亦何避、必有益於我者矣、世之教我良師友莫過於其百毀千謗、是余望乎人也尙矣。

洗心洞剗記刻成ルノ四月、偶々山陽ノ子賴餘一東都ヨリ藝ニ還ル、便道先生ヲ洗心洞ニ訪フテ謀ルニ先考ノ碑面謚號ノ事ヲ以テス、先生即チ剗記ヲ出シ、

洗心洞外集  
下卷、賴興  
一尺、寄スル  
ノ尺、願參照

佐藤一齋著  
愛日樓集文  
政十二年刻  
成ル  
天文章同五  
郎兵衛通稱  
十一屋ト云  
大業一名ハ  
重富長涯ト  
號ス、ノ長  
子名ハ重新  
字ハ德盛確

齊下號ス、  
幸田氏ノ大  
鹽傳ニナ  
以テ大業ト  
スルハ、非  
也、大業ハ  
文化十三年  
三月二十日  
没ス、年六

之ヲ餘一ニ與フ。

割記附錄抄云

癸巳夏四月、餘一自東都還、藝便道訪余浪花之弊舍、謀以鐫其考碑而證號之字之大小、而其時割記刻既成、因與之餘一、吾心以爲猶贈山陽也、然山陽而有靈、必含不盡兩卷之憾於地下也歟、而今由其贈序之文以觀之、則知我者莫山陽如也、知我者、即知我心學者也、雖知我心學、則未盡割記之兩卷、而猶如盡之也。

是ノ時江戸ニ佐藤一齋アリ、林祭酒述齋ヲ助ケテ學政ニ參與シ、年六十ヲ踰テ兀々經ヲ修メ學問文章一世ニ高シ、而メ又竊ニ姚江良知ノ學ヲ信奉スト稱セラル。先生其著愛日樓集ヲ天文堂五郎兵衛ノ傳フル所ニ依テ曾テ之ヲ讀ム、因テ曩ニ割記中ノ七十九條ヲ抄録シ、問生ニ托シテ一齋ニ送リ以テ評ヲ請フ、今茲其新刻成ルヲ以テ眞文一簡ヲ附シ、再ヒ問生ニ依テ一齋老儒ニ送ル、文意懇勸極メテ素情ヲ披瀝ス、七月朔一齋ノ復書ヲ得タリ、是又推稱訓誨懇切

ヲ極ム。

寄一齋佐藤氏書

攝州大坂城市吏致仕大鹽後素再拜白、一齋佐藤老先生、僕雖未獲仰眉宇聽聲咳、吾鄉間某曾傳先生愛日樓集以投諸僕、々莊讀之乃知先生學深乎淵水、先生文繁乎星辰而不悖於素聞矣、既又讀祭酒林公序、因復了先生之閱歷與先生之不遇也、慕而悲之、悲而慕之、孰知僕志在乎先生哉、然而不投足門下、負臆請教何耶、是不惟山河相隔、嘗縛吏役、絆簿書、寸步尺行、不能恣致之也、故徒趨跂耳、而僕今乃辭職家居、如宜東行侍函丈、自在、然而不能遂其事、又何耶、以私讎充斥乎州内外、螻屈乃俟、時而終無其時、則聞先生年既踰六十而僕雖四十又一體孱病多、安知無失遭遇之期哉、然則憾無加焉、故略告僕志於未一面之先生、以乞教、夫僕本遐方一小吏矣、只從令長之指揮、而抗顏於獄訟筆楚間、以保祿終年無他求可也、然而不從事于此、而獨自尙志以學道、不容乎世而不愛乎人、豈不左計乎、吁、知僕者憫其志、不知

僕者以左計罪之宜矣，而僕之志有三變焉。年十五嘗讀家譜，祖先即今川氏臣而其族也。今川氏亡後委贄于我神祖，小田原役刺將于馬前而賞之以御弓，又錫采地于豆州塚本邑焉。當大阪冬夏役既老矣，不能從軍以伸其志，而徒戍越後柏崎堡而已。建臺後終屬尾藩而嫡子繼其家，以至于今，季子乃爲大阪市吏，此即我祖也。僕於是慨然深以從事刀筆，伍獄卒市吏爲恥矣。而其時之志則如以功名氣節欲繼祖先之志者，而居恒鬱々不樂之情，與劉仲晦未得志時之念亦奚異，而非謂器比焉也。而父母七歲時俱沒矣，故不得不早承祖父職也。日所接非赭衣罪囚，必府吏胥徒而已，故耳目間見莫不榮利錢穀之談，與號泣愁冤之事，文法惟是熟，條例惟是暗，向者之志欲立而不能立，依違因循，年踰二十，吏人未嘗有學問者，故雖有過失無益友誡之者，其勢不得不發欺罔非避驕謾放肆之病也。而無是非之心，非人，竊自問於心，則坐作語默獲罪於理者蓋夥矣。要與在笞杖下赭衣一聞耳，而無羞惡之心，亦非人治彼罪也，則不可不治已病也。治病奈何，當從儒以讀書窮理而後愈矣。故

就儒問學焉，於是夫功名氣節之志乃自一變矣。而其時之志則猶以襲取外求之功，望病去而心正者而不能免，輕俊之患也。乃與崔子鐘少年之態適相同，而非謂材及焉也。而夫儒之所授非訓詁必詩章矣，僕愉暇慣習之故，不覺陷於其窠臼而自與之化，是以聞見辭辯掩非飾言之具，既在心口，而侈然無忌憚，似病却深乎前日矣。顧與其志徑庭能無悔乎。於此退獨學焉，困苦辛酸殆不可名狀也。因天祐得購舶來寧陵呻吟語，此亦呂子病中言也，熟讀玩味道其不在焉耶。恍然如有覺，庶乎所謂長鍼去遠瘡，而雖未能全爲正心之人，然自幸脫於赭衣一聞之罪矣。自是又究寧陵所淵源，乃知其亦從姚江來矣。而我邦藤樹蕃山二子及三輪氏之後，關以西良知學既絕矣，故無一人講之者焉。僕竊復出三輪氏所鑿刻古木大學及傳習錄坊本于蕪廢中，更稍知用功乎心性，且以喻諸人，於是夫襲取外求之志又既一變矣。而僕志遂在以誠意爲的，以致良知爲工夫，爾來不瞻前顧後，直前勇往，只盡力于現在吏務而已矣。以是報君恩報祖先而報古聖賢之教，不敢讓於人也，不意虛名滿州

縣因思未有實得而虛名如此、是乃造物者之所忌、故決然致仕而歸休矣、非徒恐人禍然也、是時僕年三十又八矣、而今乃專養性于小窓底、改過遷善惟是務、然而以無良師友故、恐弛其志於五六十矣、是僕之日夜所憂也、自今如何下功夫、則其志益堅立而心歸乎太虛矣、先生亦服膺良知學者、僕因自知東行以其道、願相見則不<sub>レ</sub>以夫子之待孺悲者待<sub>レ</sub>僕、故裁是書以告志而乞教、便如此其簡率、則請勿罪焉、且社弟輩梓<sub>レ</sub>僕割記、以藏家塾、畢竟代其轉寫之勞耳、不敢示大方也、然僕志亦在其中、幸以<sub>レ</sub>問某頃<sub>レ</sub>寓<sub>レ</sub>大府司天臺、託<sub>レ</sub>斯人以呈割記二冊于左右、暇日賜覽觀、而彼此俱垂教諭、則幸甚々々、祭酒林公亦愛僕人也、先生寓其邸、故當聞知焉、冀先生覽後復轉呈諸林公、林公亦賜一言教、以共陶鑄僕、則其愛僕之誠、敢不感々々々、而僕爲求<sub>レ</sub>知于人、非云々也、伏惟先生鑒其文而厚其志、謹再拜。割記附錄

一齋佐藤翁俗牘

隨簡拜啓未接紫眉候處、秋暑時節御佳裕被成、御興居奉<sub>レ</sub>并賀候、抑先頃は間

佐藤一齋返書俗牘

生へ御轉托にて高著洗心洞割記二冊被<sub>レ</sub>惠副、以<sub>レ</sub>眞文手教辱致<sub>レ</sub>拜受候、眞文拜復可<sub>レ</sub>致之處、人事紛忙且老境精力薄相成候間、俗通書不<sub>レ</sub>取敢<sub>レ</sub>御報申述候、御恕察被<sub>レ</sub>下度候、先以兼て御芳名傳承罷在、いづぞは拜顔致度存居候處、此度不<sub>レ</sub>圖御手牘に預り御履歷且御志操之概詳悉被<sub>レ</sub>仰示披雲同様に存し欣聳不少奉<sub>レ</sub>存候、先達而間生出府之砌も御割記中抄出之冊子間生より被<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>今又新刻全部御惠被<sub>レ</sub>下反覆致<sub>レ</sub>拜覽候處、每條御實得之事共、使人感憤興起不勝欣躍拙老など可<sub>レ</sub>及所に非すと奉<sub>レ</sub>存候、就中大虛之說御自得致<sub>レ</sub>敬服候、拙も兼々靈光之體即大虛と心得候處、自己にて大虛と覺其實意必回我之私を免れず認<sub>レ</sub>賊爲<sub>レ</sub>子之様に相成難<sub>レ</sub>認事と存候、貴君精々此所御着力被<sub>レ</sub>成候へは、即御得力爰に可有之と存候、尙も實際に御工夫被<sub>レ</sub>着かしと祈入候事に、御座候扱又拙も姚學を好候様被<sub>レ</sub>仰越候處、何も實得之事無<sub>レ</sub>之、赧羞に堪<sub>レ</sub>す候、姚江之書元より讀候得共、只自己之箴砭に致し候のみにて、都ての教授は宋説計にて殊に林氏家學も有之候へは、其碍にも相成人え疑惑を生し候事故、餘り別説も唱不

申候事に候且又江都にては群侯百辟之間に周旋致し候事に候へは何學な  
 と、申す事詮も無之只自己にて乍不及迪哲之實功を骨折夫よりして君心  
 之非を格し遂に治務之間にも預り候へは漸々人之家國に寸補可有之哉に  
 存候兎角人は實を責すして名を責候ものかと被存名にて教の害を成す事  
 少からず候へは務て主張之念を祛りて公平の心を求め度候左候へは却て教  
 化之廣く及申候事有之哉と被存候返すくも其實無之ては何學にても埒  
 明不申た、自己之實を積候外無之このみ心掛候得共母々十か一も存意通  
 に參らす浩嘆に堪す候愚意之概聊申試候尙御垂教被下候將亦御割記中前  
 人未發之條不二而足候得共堯舜之上善無盡殊に御年齡強壯之御事此後幾  
 層御長進可有之歟不可測と御頼敷存候事故申迄も無之愈益御深造之處  
 翹望に堪す候御著篇□□□示し可申之旨致承知候未た案上に指置き申候  
 何れ見せ可申候左様御承知被下度候且又眞文拜答不致候に付雜文三篇塾  
 生認置候儘呈覽可正申候不滿貴意候所は御指摘を厭不申候尙追而御文

雜文三篇ハ  
 學問館入  
 爲我軒說等  
 也

通可申啓候先拜復鳴謝迄如是御座候時下玉燭不調爲道御自保可被成候  
 恐惶謹言七月朔封御記附錄抄

按スルニ先生ノ寄一齋佐藤氏書ハ後刻シテ洗心洞割記附録トナシ、間々同  
 志ニ頒チ、後割記ヲ以テ神廟文庫ニ奉納スルトキ共ニ之ヲ附納スルニ至ル、  
 是レ先生最モ意ノ在ル所ナリ、蓋シ其文佐藤一齋ニ寄セテ作ルト雖モ、之ヲ  
 讀メハ先生ノ自叙傳ナリ、即チ初メニハ身ノ多病孱弱ヲ言ヒ、既ニシテ家譜  
 ヲ讀テ志ヲ立ツルヤ又家難屢々至テ少年祖父ノ職ヲ承ケサルヲ得サルノ狀ヲ  
 説キ、志三變ノ逕路ヲ述ヘテ獨學ノ辛酸姚江ノ歸向ヲ述ヘ、吏務ノ用功、致  
 仕ノ止ムヘカラサルニ至ルマテ、先生ノ心事行略悲ムベク憤ルベク慨シテ慷  
 スベキモノ略之ヲ盡セリ、洗心洞割記ハ即チ其功ニ成ル、故ニ之ヲ知ラサレ  
 ハ割記ノ蓋底ヲ知ルニ足ラス、宜ナリ之ヲ以テ割記附録ト題スルコト、神廟  
 附納又之ニ因ル、是レ必スシモ一齋ノ爲ニ之ヲ作ルトスベラサル也、而モ名  
 ヲ以テスレハ實ニ之ヲ以テ一齋ニ致ス所、一齋ノ此ノ書ヲ得ル何ソ心ヲ動カ

先生八月九  
 日伊賀ヨリ  
 歸テ一齋ノ  
 答書ヲ得タ  
 リ因テ八月  
 十二日又一  
 書ヲ裁シテ  
 一齋ニ再答  
 ス書意切ニ  
 而モ痛切ニ  
 一齋ノ所謂  
 難ノ切ニ  
 置テ此ノ排  
 撃ノ心ヲ洞  
 外ニ見ルマ  
 シ就テ見ルマ

サマルヲ得ン、況ヤ割記ヲ讀メハ屢々先人未發ノ論多キヲヤ、故ニ一齋ノ復書又懇懇親切問々慰諭訓誨敢テ情ヲ盡サスンハアラス、夫レ是ノ時ニ當テ一齋ハ一私ノ挾ム所アルベカラサル也、若夫強テ之ヲ求ムレハ一齋ノ林家ヲ羽翼スル自ラ姚江ノ嫌忌ヲ恐ル、アリ、其先生ノ真文ニ答フルニ俗牘ヲ以テスル又此ノ意アラン、而メ老儒ヲ以テ後進ニ對スル是以テ禮ヲ缺クト云フベカラス、而モ彼ノ一ニ嫌忌ヲ恐ル、ノ心アリ、後遂ニ俗牘ニ名ヲ藉テ事變ノ後之ヲ以テ言トナシ自ラ欺キ人ヲ誣ヒ世ヲ罔セントス、陋ト云フベシ其ノ書大鹽後素簡後ノ文ニ云フ

此卷、係浪速人大鹽後素所寄真文書、余嘗聞其名、而未識其人、往年渠來江都、乞謁故林祭酒述齋先生、爾時余舍在林氏邸內、渠日過舍前而不入、人或問其意、渠答謂此行為見林氏、不爲見藤氏、故不入也、其言似有理而意則可恠也、渠既歸、作此書寄之、義理文詞並有可見、然余答以俗簡、而不以漢字、以其人有所不可測也、云々、嗚呼鹽賊、何前日之賢才如此、而後日之

此書先生歷  
江戸ニ遊フ  
ヲサ證ス

狂暴如此也、乃知人心惟危、道心惟微、可懼之甚也、愛日樓全集 第三十卷

先生既ニ割記ヲ刻シテ知己ニ山陽ノ靈ニ供へ、同學ニ一齋ノ左右ニ呈シ得タリ、是ニ於テ先生斯學ヲ以テ天下ノ學壇ニ問ハントシテ三都ノ儒者及ヒ諸藩ノ文學ニ贈ル、而モ之ヲ贈ル敢テ苟クモ贈ラス、贈ル必ス依ル所アリ、常ニ云フ若拙著非侯伯厚禮見求弗敢遺贈ト、故ヲ以テ一本ヲ得ルモノ猶ホ巨珠名玉ヲ獲ルカ如クス、而メ從來訓詁詞章ノ外曾テ學ナシトセルモノ之ヲ讀テ遽然トシテ聖學ノ因ル所ヲ知ル、蓋シ寬政異學ノ禁アツテヨリ、朱學ニアラサレハ經學ニ非スト爲セルモノ、況ヤ三輪執齋以來百年不講ノ王學ニ接スルヲヤ、小人儒ハ恐レ、君子儒ハ慨然トシテ初テ奮フニ至ル、其割記ヲ得テ懇懇詩文ヲ寄セタルモノ數十家、其中天保六年夏重ナルモノヲ收テ割記附錄抄一卷ヲ作ル、之ヲ讀ム當時學壇ヲ風靡シタルノ状態スベシト云フ。

今附録載スル所及ヒ先生ノ割記ヲ寄セタル、或ハ先生ニ請テ割記ヲ得タル大夫士儒生文學ノ文書ニ徵スベキモノ、氏名ヲ略記セハ左ノ如キヲ見ル可シ。

割記ヲ諸藩  
ノ大夫儒員  
ニ贈ル



佐藤一齋 通稱ハ捨藏名ハ坦字ハ大道ト云フ  
 齋藤拙堂 名ハ謙通稱徳藏津藩ノ臣也  
 杉本祐憲 通稱主悦、御室宮ノ家士  
 大友參 遠慮ト號ス筑前ノ人ナリ  
 淺井中倫 通稱太一郎大阪與力先生ノ外舅也  
 平松樂齋 名正整通稱健之助津藩臣  
 阿部伯孝 通稱富三郎松園ト號ス尾藩ノ臣ナリ  
 坂本鼎齋 通稱鉞之助名ハ俊貞字叔軒玉造與力ナリ  
 稻田候 徳島藩家老臨城主カ郎衛門尉植誠  
 新見伊賀 名ハ正路近江安土ナ領ス大阪東町奉行ナリ  
 猪飼敬所 名ハ彦博、字希文、京儒  
 三宅弘 字子白脇田氏ノ臣先生ノ外姻ナリ  
 小松巢松 通稱左金吾伊賀上野ノ人ナリ  
 角田簡 通稱ハ才次郎、字ハ大可九華ト號ス岡藩臣  
 牧岡猪 通稱進士、御川藩ノ儒臣也  
 川北重熹 通稱喜右衛門島原藩臣  
 吉村晋 通稱隆助字ハ麗明秋陽ト號ス藝州ノ人  
 宇津木泰 通稱ハ下總彦根藩ノ大夫也  
 福井晋 通稱近江禁裏ノ侍醫丹波守ト云フ  
 頼聿庵 通稱諱一、山陽ノ嗣子ナリ  
 宮本敬齋 名ハ矩、璋庵ト號ス讚岐高松藩儒醫ナリ  
 藤堂大夫 津藩士藤堂公ノ族弟通稱數馬ト云フ  
 川村竹坡 通稱貞藏名ハ尚道字ハ毅南津藩ノ臣ナリ  
 足代弘訓 通稱維太夫寛居ト號ス伊勢外宮ノ御師也  
 秋吉雲桂 有酒川宮ノ家士醫ヲ業トス  
 平岡左門 大和郡山藩臣

一四〇

石黒貞度 通稱後藤兵衛南門ト稱ス備藩ノ臣  
 桑原信毅 通稱幾太郎字ハ毅柳水戸藩士  
 津阪氏 津阪東陽ノ嗣子名ハ某  
 葉山鏡軒 通稱佐内名ハ高行字孝卿平戸藩士  
 松崎謙堂 名ハ復字明復肥後ノ人掛川藩ニ教授ス  
 河上春川 備前岡山ノ人孝子ヲ以テ聞ユ  
 田能村君彝 通稱行藏竹田ト號ス岡藩臣  
 分部侯 大溝藩主若狹守光貞也  
 矢部定謙 勘定奉行駿河守大阪町奉行也  
 川瀬教忠 水戸藩京都留守役通稱七郎右衛門  
 是年七月先生洗心洞割記ノ一本ヲ以テ是ヲ伊勢朝熊嶽ノ絶頂ニ燔キ以テ天照太神ニ告ケ、而メ一本ヲ富士嶽ノ石室ニ藏メ以テ後世人ヲ俟タント欲ス。是ニ於テ先生即チ門人湯川用譽、窪田玄政及ヒ家僮等ヲ携テ七月十日大阪ヲ發シ駿河ニ之ク、其十七日ヲ以テ富士山顛ニ上リ、書ヲ石室ニ藏シテ初テ平生ノ志ヲ爲ス、此日山上ニ宿シテ曉月朝暎ヲ同時ニ拜シテ其ノ偉觀ノ際太虚ノ二首ヲ得タリ。

口吐太虚容世界  
 心與太虚本一物  
 太虚入口又成心  
 人能存道只今乎。

獨記ヲ林崎  
盡宮崎兩文  
庫ニ奉納ス

千年雪映千年月  
下界祗今猶夢寐

況復紅輪未曉昇  
枕頭暗々五更燈

一四二

豫藩ニ游ヒ  
有志ト交繼  
ス

歸路ハ參州吉田港ニ出テ、夫ヨリ渥美灣ヲ航シテ伊勢山田ニ到リ、豫テ知ル所足代氏ニ寓ス、足代弘訓ハ山田ノ御師ナリ、是ヨリ先キ足代氏浪花ニ遊ヒ先生ヲ訪フ、先生告クルニ朝嶽燔書ノ意ヲ以テス、弘訓詳ニ神宮ニ宮崎林崎兩文庫ノ設備アルヲ説キ、且勸ムルニ奉納ノ事ヲ以テス、先生之ニ從フ也、是ニ於テ足代氏ヲ紹介者トシテ洗心洞刻記各一部ヲ兩文庫ニ納ム、且ツ其ノ序ヲ以テ兩庫ノ藏書ヲ拜觀スルヲ得タリ、而モ兩庫共ニ朱子文集、古本大學傳習錄ナク、又宮崎文庫ニ陸象山全集ナク、林崎文庫ニ王陽明全集ナキヲ見テ、先生慨然自ラ之ヲ奉納センコトヲ足代氏ニ約ス、有志交々先生ニ講經ノ事ヲ請フ、先生再訪ヲ約シテ歸ル。弘訓送テ共ニ津ニ至リ且ツ先生ヲ津藩ノ有志ニ紹介ス津藩同ト有志多シ、先生一タヒ過ルト聞テ平松樂齋、河村竹坡、齋藤拙堂、鹽田隨齋等爭ヒ迎テ交ヲ訂ス、先生川村氏ニ信宿ス、淹留數日其

出發ノ時ニ當テ平松樂齋等數人關驛ニ遠饒ス、先生八月九日大阪ニ歸ル當時齋藤拙堂ノ詩ニ云フ

浪華大鹽子起藏書富嶽歸路見過賦此爲贈

稜骨烟眼秋隼姿。擊盡凡鳥血淋漓。翻然高颺霄漢際。要與冥鴻相追隨。著書往藏名山上。手披青雲究勝狀。歷險不做昌黎哭。豪吟飛下膽氣壯。陸離長劍帶在腰。猶餘寶氣衝九霄。從來邪黨皆潛伏。何況夔魑山澤妖。久悔由瑟多殺伐。安身不任白猿術。更有利刃能殺人。十年鍊磨方寸鐵。

是年八月先生足代弘訓トノ約ヲ以テ、朱子文集、古本大學、傳習錄ヲ豐宮崎林崎兩文庫ニ、陸象山全集ヲ宮崎文庫ニ、王陽明文錄抄ヲ林崎文庫ニ奉納ス、即チ八月廿七日門人橋本忠兵衛田馬不動二郎ヲシテ宰領セシメ、專介ヲ山田ニ發シ、足代氏ノ紹介ヲ以テ是ヲ兩文庫ニ奉納ス、每書各跋文アリ、以テ其由ヲ書ス、字ハ每本門人ヲシテ之ヲ書セシム、朱子文集ノ字ハ松本乾知ニ、古本大學ハ白井後行ニ、傳習錄ハ男尙志各之ヲ作ラシム、後門人其跋ヲ聚メ先生

不動次郎ハ  
但馬守約ノ  
幼名後ノ田  
結莊千里也

一四三

ノ序ヲ請テ塾ニ刻ス、奉納書籍聚跋是也、九月刻成ル以テ有志ニ願ツ、洗心  
洞劄記以下書籍奉納ノ意朱子文集ノ跋ニ具ハル、其文ニ云フ。

朱子文集六十冊

奉納

林崎文庫而如其由則跋於卷餘幅焉

大阪府騎吏致仕 大鹽平八郎 後素

紹介 足代權太夫 弘訓

以上先生自書首卷々頭

致知盡天

朱子文集奉納伊勢豐宮崎林崎兩文庫跋

陋撰洗心洞劄記成焉、而社弟輩刻諸家塾、後素欲以其一本燔伊勢朝熊嶽絕  
頂以告

天照太神、而一本藏富士岳之石室以俟、人是乃有意在而非人所知也、干

時適足代弘訓訪後素、弘訓即伊勢山田御師職、而有學識人也、後素因竊語此  
志、弘訓詳告 神宮有宮崎林崎兩文庫、而從來藏奉納之典籍、且勸以奉納  
焉、而止以不燔、後素終從其德、與之結奉納之約、而今秋先登岳藏書、歸  
時航吉田海、到山田、寓足代氏、劄記各一部以弘訓之紹介、奉納兩文庫矣、故  
得一覽兩庫之牙籤、和漢之載藉大抵略備焉、陽明王子之學、古今人情之所忌、  
然而其全集既在宮崎文庫之牙籤、而世所奉承、乃朱子之教、而其全集則反兩  
庫共未嘗有奉納之者也、後素於是乎益信、其奉承朱子者、只名而非實也、  
後素雖固奉王子致知之教、而於朱子博約之訓、寧亦廢之哉、故歸鄉之後、與  
社弟胥謀、慨然醮金若干、乃購和刻朱子文集二部各六十冊、復以弘訓之紹介、  
奉納兩文庫、是非後素矯情而故爲之也、只以學力微弱、材識拙庸、而身既隱  
矣、安得伸振頹助衰之志、故祈真知朱子之心、誠體朱子之學、而不願生死  
禍福、以扶助世道人心之一大賢儒、亦出於我  
扶桑之東焉、一洗陋染偏執之習而已矣、是乃與唐明宗焚香祝天、以待聖

人之出、事固異而情則同、嗟乎、此願不問人之信不信、惟是神明鑑焉、欽書此卷末以表赤心者也。

干時天保四癸巳秋八月

大阪騎吏致仕

大鹽平八郎

源後素花押

洗心源後

松本乾知

盟手焚香誦書

因ニ先生奉納書現ニ神宮文庫ニ存スルモノ左ノ六部アリ、劄記聚語ノ外五部書ノ内途ニ陸象山全集一部ヲ逸スルハ惜ム可シト爲ス。

一 洗心洞劄記

三 冊

一 朱子文集

六十 冊

洗心洞劄記  
ハ上下二冊  
ナリ三冊ト  
セルハ寄一

齊佐藤氏書  
ヲ附録トセ  
ルニ依ル

一 王陽明先生文鈔

一二 冊

一 標傳習錄附錄共

四 冊

一 古本大學

一 冊

一 儒門空虛聚語

二 冊

九月七日門人使命ヲ終テ歸阪スルヤ、先生之ヲ喜ヒ、即チ書ヲ裁シテ足代弘訓ニ謝ス、書中ニ云フ。

一 奉納書籍萬端相濟大慶仕候、丈人ニハ御忌中宮内殿周旋御世話共ニ奉存候、別紙を以て得貴意候得共、御序に宜奉願候、罷出候社弟共も御禮申上吳候様申聞候、

一 聖學之要者此間申上候劄記之別跋にて御學可被下候、書籍も無之以前神聖人之御心に尋候は、後世儒者之申條なる事は無之、簡易平坦のまゝ相覺候、此處看破致候は言語文字之力にても無之、奇妙なるものと被存候、只鄙人之所望者、此世之人に舉且誹を受度とは更不存夫故

太神宮へ奉し、富岳之神へ献し、歿後に知己を待而已に御座候、箇軀殷有之已來、人々異存候よう御座候、所希者此度の大變にて人鬼夢覺候て、七重鐵關撞破、天之虛明を御了得候は、眞致知格物於世間萬變如浮雲過太虛、亦何難之有、鄙人齒痛難堪、明十一日より藤樹書院へ罷越、夫より北山之紅葉を一覽仕候、右書院にて大學之講義被頼候に付初而良知之開講仕候、追而御訪申上候、於御文庫先般之債ひ一講可仕と奉存候、甚取紛亂筆を以右申上度勿々如此御座候以上(九月十日)

是年秋九月大溝藩有志先生ヲ聘シテ藤樹書院ニ講經ヲ請フ、蓋シ昨夏先生ノ藤樹書院ヲ訪ヘルニ當リ、其機ヲ失セルヲ深ク有志ノ憾トナシ、今茲書院ノ主事志村周治洗心洞ニ來リ請フ時ニ先生亦洗心洞割記ヲ書院ニ納ムルノ志アリ、即チ講義ノ聘ニ應ス、九月十一日門人數輩ト共ニ發ス、十二日小川村ニ入り志村氏ニ信宿ス、其十三日即チ書院ニ上リ大學首章正心誠意ノ條ヲ講ス。大溝侯分部若狹守亦タ講筵ニ臨ム、士民席ニ會スルモノ數十百人、先生

藤樹書院ニ  
講經ニ赴ク  
此行割記ヲ  
書院ニ納ム

力説士民大ニ感奮ス、是ヨリ以テ毎年講經ノ例トナス、志村周治以下門ニ入ル者多シ、明年正月九日佐藤一齋ノ書中ニ云フ

去年湖西へ御越之件如何にも爰元大溝藩より逐一致傳承候、上下共に推服致し候趣、於拙本懷之至に存候、小川書院御寄藏典籍之事是亦傳承仕候。

先生此ノ行大溝ヨリ湖ニ泛テ東ニ渡リ、湖北ノ古戰場ヲ探テ遂ニ志津嶽ニ登リ、感慨一詩ヲ賦ス

癸巳秋登江州志津嶽平臨余吾湖、是乃古者太閤曾與柴田氏北軍戰鬪處、慨然賦之、

曾自奸兇襲殺君、一家臣子裂爲軍。封豕俱存兩將志、長槍獨擅七雄勳。古戰場血空紅葉、壞堡烽煙只白雲。余吾湖上哀嘆久、以暗余吾私鬪紛。

先生一タヒ藤樹書院ニ上テ講經ノ事アルヤ、人心興起シ士民始テ學ニ向フヲ知リ、江西ノ遺風又將ニ興ラントスルヲ見テ愈々學ノ止ムベカラサルニ感シ、

先生志津嶽  
ノ古戰場ヲ  
訪フ

既ニ江西ヨリ歸テ門人ヲ督勵ス、是ニ於テ門人申合セ書院修繕ノ資ヲ義捐シ、之ヲ書院ニ致ス覺書アリ、今現ニ書院ニ存ス即チ左ノ如シ。

覺

一拾五金

右者拙者並門生共之内より藤樹先生書院へ致寄附候、三輪氏同様之心合に候間、永々右書院破損修覆之手當一助に御取計候様致度候、尤も先達而より聊つゝ寄附候へ共、當坐切に相成覺無之、既當九月於書院始而致開講候手續も有之、志村周次殿にも當方へ入門之事に候間、一同被申合書院取繕候様肝要也、拙者藤樹先生於吾

邦被開候、陽明王子致良知之學術致研磨候付、藤樹先生之學功を爲不忘寄附之義に候間、吳々前書之通被取計候様御願申候事

天保四癸巳十一月

大鹽中齋花押

後素圃

藤樹先生書院

諸生衆中

村役中

是年九月下旬勢藩齋藤拙堂浪華ニ遊ヒ先生ヲ訪フ、淹留數日、一日相携テ河州八尾久寶寺千塚原ノ古戰場ヲ弔フ、或ハ悲歌涙ヲ攪リ、或ハ慷慨氣ヲ振フ又一日ノ快遊ナリ、拙堂廿七日發足京都ニ之ク、拙堂一詩ヲ留ム

宿洗心洞

齋藤拙堂

退藏久占洞中幽

遙挹姚江混々流

洗却客心塵亦盡

杳然一夜對虛舟

是秋多度津藩士林求馬真齋遠ク笈ヲ負テ浪華ニ遊ヒ洗心洞ニ學ブ、時ニ年二十七、深ク先生ノ學術ニ感ス、居ルコト三四十日辭シテ歸ル、途ニ伊豫ニ近藤篤山翁ヲ問フ。明年再ヒ來リ學ブ

是秋松山藩士山田球方谷京師ニ在リ、始テ先生著ス所洗心洞劄記ヲ得テ之ヲ讀

齋藤拙堂來訪

林長齋名ハ久中字子虛自明軒ト號ス多度藩老職也

ミ、因テ慨然興起傳習錄ヲ抄讀ス、其十月割記ヲ有終館學頭奧蕉窓ニ贈リ江  
戸ニ赴ク、時ニ年廿九才

今般洗心洞割記なるもの差上候、則大鹽老吏得意之作と相聞申候、乍去平  
人には賣與不仕當□にも所司代奉行方へ差出候計、其外は堂上へ少々差上  
候のみに御坐候、去手筋より一部手に入申候故今般差上候、當時にては先  
珍敷書に御坐候、此書に付ては色々奇談も御坐候、追々御聞可被爲成と奉  
存候、御覽被遊候は、大夫方並に館中諸子へ御覽に御入被成下候様奉希  
上候云々 十月二日

是冬藝州ノ人吉村重介秋陽遠ク書ヲ先生ニ致シ、私淑ノ情素ヲ述ベ益ヲ請フ、  
先生即チ送ルニ割記ヲ以テス、秋陽ノ書中ニ云

往者仄聞道路紛々之言、大坂有大鹽君者出焉、才識雋偉、學有根柢、而治獄  
立異績、人人積頌不容於口、後復聞既致事、專心於學、卓然以道自任、欲一  
洗從前學者之陋、晉爲之奮興喜躍。吁嗟、天乎、當斯時而生斯人也、所謂聰明

特達豪傑之士、非斯人而誰也、我道復古之機、將在於是矣乎、真令人物々  
增氣、亦竊爲天下賀也、然躬猶多事故係累、未能直趨下風、請嚴政、恨嘆  
無己、是以姑且通賤名、呈情素、而後將有所就正、所以犯唐突之誚而不辭  
也。十一月望日

是年冬十二月備前岡山藩執政石黒貞度通稱後藤兵衛南門ト號ス人ヲ介シテ曾テ其藏スル所

中江藤樹先生致良知三大字真蹟卷ノ跋ヲ先生ニ請フ、先生即チ致良知歸一孝  
字ノ說凡千三百餘言ヲ題シテ之ヲ還ス、石黒貞度はニ於テ深ク先生ノ學術ニ  
感シ交情之ヨリ密ナリト云フ、此ノ文ハ儒門空虛聚語ヲ刻スルニ及テ卷首ニ  
附載ス、門人志村周治ノ請ニ因テ之ヲ書シテ藤樹書院ニ奉納ス、先生  
此文ニ力ヲ用ユノ意ハ大溝藩土前田原田二三子ニ依テ藩公分部若狹守ニ一  
本ヲ上レル書中ニ見ルヲ得ベシ

倍此節備前岡山藩臣石黒後藤兵衛、所藏藤樹翁致良知之三大字、並石翁が  
熊澤了介子へ被送候俗文を上卷にいたし、先年より三都並國々之士類儒者

有名の人々跋を染筆いたし有之、手筋を以て僕へも頼越則佐藤一齋も染筆有之、一齋始一同翁之致良知に大眼目之處者不書顯只其字畫、筆勢、墨色之巧拙美惡を論せざらばと綴候而已にて、一向翁之心學緊要は捨置不相見段、所有之人も右藩にては重祿執法家にて志有之向にて少し不満に付、僕之狂人に頼越申候と相覺、是も天時と奉存候付、別紙寫之通跋文綴、右卷軸書卷者直に返却、則一昨々日一齋に跋文送遣し候、依而寫本 若狹守様に献呈仕候、致良知之義右に御承知被爲在候様、乍憚被申可被下候、明春暖和に趣再び書院へ參候仕候、右孝之一字を講義可仕候。

此節幾内侯家藩臣重役之内、憤發入門、致良知之學に志候向出來、近衛殿領地攝州伊丹豪家之者、並其地一同良知を信奉仕候様相成、弟子共教授に遣し御座候付蒼生榮色飢餓之時一方一村成共孝悌之道を心得窮行爲致置候は、心得違も不法仕ものも自ら少く、右にて藤樹翁之宿志往々被行哉と奉存候、是全 若狹守様御決斷にて、先頃御招經義口述御開始被成候よ

り、段々右翁之致良知學再起いたし掛る基に相成、於僕大悅仕候、退隱之身外に慕且望候事更無之、講學事而已にて只上下共孝悌之風を起し度素心に御座候、神も感有之歟右之外勢州邊にも段々興起之者多く、乍序御物語得貴意置候。十二月廿四日

五穀凶歉穀  
騰貴初テ  
天下飢饉ノ  
聲高シ

是年三月遠藤但馬守胤純玉造組城番トナル○六月西町奉行久世伊勢守長崎奉行ニ轉任シ、七月八日矢部駿河守定謙堺奉行ヨリ轉シテ西町奉行トナル、夙ニ名府ノ聲譽アリ○八月跡部山城守良弼堺奉行トナル。

是年八月朔日暴風雨起ル數日ニシテ止マス、關東殊ニ甚タシ、五穀凶歉穀價日ニ騰貴ス、天下是ヨリ漸ク飢饉ノ聲喧シ、播州ノ民一揆騷擾ス人心恟々タリ先生平松樂齋ニ送レル書中ニ云

拙堂兄目擊之事に付御咄も可有之、播州邊石價踊貴騒動いたし、先鎮り申候へ共、倍々いやなる事に御座候、傷人も往々可出來仁人之可悲事に候。十月三日



天満水滸傳云 抑も今年の飢餓といふは、全く今茲一年の凶作に因て起るにあらず、文政の末年より引續き違作せし上、今年八月朔日の大風雨にて關東殊に不作にて一升二百五十文の價に至る、斯くの如きの凶年ゆへ米價は更なり諸式の價一度上りて下るときなく、唯々大阪のみ米價一升につき百五十文より二百文を限りとす、是は矢部駿河守殿政命宜しきに因るものにて、大阪には來秋までの飯米乏しからねは也云々、

按スルニ矢部駿州ノ救濟策ハ幕府ニ建言シテ江戸廻米ノ督促ヲ抑制シ、西國諸侯ニ乞フテ大阪廻米ヲ増加セシメ、堂島米市場投機ヲ嚴ニ取締リ、穀價ヲ平準スルヲ其ノ一般政策トシ、市中窮民ニ對シテハ難波、川崎兩官廩ヲ開キ、島町及漿碁島ノ糶藏ヲ發シテ之ヲ低價ニ分配シ、又市中豪商ニ諭シテ二回マテ金穀ノ醜出救濟ヲ爲サシメタル等最モ其ノ機宜ヲ得タルニアリ、初メ駿州ノ堺ニ來ル時、先生致仕シテ職ニアラサリシモ、先生ノ吏務既ニ關左ニ鳴ルモノ駿州早ク之ヲ熟聞ス、駿州堺ニ治スル三年政蹟大ニ舉ル、此ノ時先生野

矢部駿州ノ  
救濟策

ニ在リト雖モ亦能ク確聞ス、是ヲ以テ駿州ノ大阪ニ入ル、先ツ其子鶴松君ヲ洗心洞ニ入レテ教育ヲ托シ、又先生ヲ引テ賓ト爲シ政治ヲ顧問ス、頗ル獻策スル所多シト稱セラル、駿州ノ救濟策宜ヲ得タル以アリト謂フ可シ。

東湖隨筆云 平八郎は所謂肝癪の甚たしき者也、與力を務むる内豪富を折し、市民を救ひ奸僧を沙汰し邪教を吟味したる類天晴の吏といふべし、又學問も有用の學にて中々黃吻書生の及ふ可きにあらず、某(駿州自云)奉行在役中度々燕室へ招き密事をも相談し、又過失をも聞き益を得る事淺少ならず、言語容貌決して尋常の人にあらず、某曾て平八郎を招き共に食を喫せし折節、金頭と云へる大魚を炙り出せり、時に平八郎憂國の談に及ふ時、忠憤の餘り怒髮衝冠とも云ふべき有様故餘程に慰諭しけれども、平八郎益々憤り金頭の首より尾までワリ／＼噛み碎きて食ひたり、翌日に至り家宰某を諫めて曰く昨夕の客は狂人也、夢々高貴の御方可近にあらず、爾來奧通り指留め給へと、實に某が爲を思ひて云ひけれども、汝か知らん所に非すとて始終交を全ふせり此

一事小なりと雖も平八郎の人と爲りを知るに足れり

按スルニ國亂テ忠臣出テ家貧フシテ孝子顯ハルト、今年此飢饉ニ及ンテ世人先生ヲ懷フモノ多シ、其足代弘訓ノ問ニ答フル書中ニ云フ

一石價踊貴之義に付委細被仰樋口子息よりも御傳聲承り候、先頃齋藤拙堂上阪被致候假名物の荒政備用著作被見候、只今之處にては先いたし方無之哉臨事危急之場に至り候は、宜き勘辨も可出と被存候病人も五臟渴盡之後傷寒温疫等煩候は、雖名醫療法者先無之天下之事者都而一理と被存候ケ様成義者面謁口陳に無之候ては難盡候、しかし尊君御老境に未至國恩を被報度との御宿志義感心いたし候、然れ共能く時中に不至候は、詮の無之事に候、熟練第一に御座候、當表も石價此節又々踊貴人情不安候、五行逆診誠に可恐事とも御座候、調理の主さ大切之義に御座候、津者撫育厚く歡喜之由珍重之至に候、純良之口更有之候故と被存候 十一月二日  
猪飼敬所ノ川村貞藏ニ送レル書中ニ云フ。

貴國以西五畿山陽山陰四國皆七八分ノ作、九州ハ豊ニ候、東北一隅飢饉ニテ大阪より江戸へ回米依之大阪ノ相場師米價ヲ踊シ、播州之賊民乘之爲盜可惡之甚也、是ニ付テモ京大阪之米市場ハ停止シ度者也、此外ニモ三都ニハ官許ヲ受テ民害ヲ爲者多シ、竹山之草茅危言履軒之文稿ニ論之、是皆世人所知ノ民賊也、然れ共此輩は皆官吏之囊橐なり、吏をして皆々大鹽ノ如クナラハ一朝ニシテ皆禁スヘシ、然レ共和漢古今ノ状態皆如是噫。此書月日欠

### 天保五年甲午先生四十二歳

是年春正月元旦先生口號二首ヲ賦ス、時ニ城中ノ餓孳少シクモ衰ヘズ、饑民路ニアリ市中寂トシテ春色ヲ見ス、先生ノ心獨リ慘トシテ痛苦耐フ可カラザルモノアリ、即チ口號ニ發ス。

甲午元旦口號二首

新衣着得祝新年、

羹餅味濃易下咽。

忽思城中多菜色、

一身温飽愧干天。

一身温飽愧干天。

隱者寧無心救全。

鬪在隣鄉往讎笑。

默緝大學卒章編。

又蒼鷹ノ飛來スルヲ見テ

甲午春正月四日、出後視庭除、適值鷹隼屹立、一鳥終賦之以示同志。

風聲一陣自天來。星眼蒼鷹既立苦。游雀驚飛匿檐瓦。歌鶯潛出辭庭梅。

初惡邗都傲嚴酷。又欣文子取英材。寄語今休搏凡鳥。城狐窟兔用心哉。

正月四日賀年ノ書簡ヲ勢藩知友ニ送ル、先ツ平松樂齋ニ托シテ之ヲ藤堂大夫君並ニ齋藤拙堂川村竹坡諸子ニ示ス、簡端ニ云フ。

救荒之義尊慮苦辛ニ被成候事感心仕候、仁人之用心今一段之精義入神之工夫無之候ては難叶候、猶跡より愚慮可申上候、當年者甲午之卦に當り於易も蹇艱之秋に御座候、乍此上御心を御用被成度と存候。

是年正月先生儒門空虛聚語二冊ヲ塾ニ刻ス、聚語ハ張南軒ノ言仁錄、真西山ノ心經ニ倣フテ孔子ノ空々、顔子屢空ノ經文ヲ解スル普ク先儒ノ諸說ヲ引用

儒門空虛聚語二冊刻成

儒門空虛聚語ヲ神廟書院ニ奉納ス

シ、以テ先生ノ劄記ノ大眼目タル歸太虛ノ虛又空ノ依ル所ヲ明カニシタル者、上卷ハ經語十一則、註疏九十七條ヲ、下卷ハ先儒ノ遺語百十一條ヲ收メ卷首ニ先生天保四年十二月ノ自序ヲ載ス、稿成ル猪飼敬所爲ニ校讎ノ勞ヲ取り、先生之ヲ欄外ニ附刻シ以テ參考ト爲ス、是ニ至テ刻成ル、先生即チ其稿本ヲ以テ之ヲ神廟文庫ニ奉納ス、門人白井孝右衛門、茨田軍次等宰領シ、二月朔發足伊勢ニ向ハシム、尙ホ托シテ一本ヲ藤堂大夫數馬君其他樂齋拙堂諸子ニ送ル、且ツ拙堂氏ノ爲ニ古刀ヲ購ヒ又樂齋ニ寄スルニ一律ヲ以テス、共ニ門人ニ附送ス、詩ニ曰ク

天保甲午早春、歩野外、適見餓孳、不顧其赤子焉、惘然賦之、且述所聞與所恐、以似同志、不敢欲觸他人之眼已。

世將五事至无儀。五行乖睽民泣飢。

東海雪中食死馬。寒邨眼下棄生兒。

逢春新麥還枯寂。送曉朝暾何老衰。

薪木底合星點火。

阿誰撲滅惱心思。

齋藤拙堂、先生贈ル所古刀ヲ得テ踊躍禁セス、即チ七言古詩一篇ヲ賦シ、之ヲ先生ノ使ニ托シテ謝シ至ル、詩ニ云フ

大鹽子起爲余購古刀賦此鳴謝

三尺青蛇落掌中。

拔鞘颯然座生風。

一泓秋水波紋蹙。

不待閱欸知名工。

吾友子起命世器。

性愛古刀辨真僞。

爲我獲之試死囚。

三招入虛利無比。

君本從政稱能吏。

霹靂在手震天地。

殺人刀是活人劍。

根莠芟盡良苗遂。

嗟我碌々在下風。

鉛刀一割久無功。

得君意氣頗自壯。

猶將鈍質望磨礱。

况獲此刀百鍊堅。

如見君面氣凜然。

格之助ノ結婚

誰索空懷切悵友。

朝夕感佩當韋弦。

是年春正月廿四日養女みねヲ男格之助ニ妻ハス、みねハ橋本忠兵衛ノ女、天保元年先生請テ之ヲ養フ、蓋シ格之助ニ妻ハサンガ爲メナリ、是ニ至テ華燭ノ典ヲ舉ク、格之助時ニ二十三、みね年十六歲。

按ズルニ格之助結婚ノ事タル從來依ルベキノ史料傳説共ニ無シ、然レトモ舉兵四年前ノ事タルハ吟味書中誣妄ノ事實ヲ除ケバ自ラ了解スベシトセラレ、然ルニ勢藩平松氏ニ送レル左記書牘ヲ得テ、今之ヲ綜合スルニ本月廿四日ニ繫クルヲ以テ妥當トスベシ。

先生誕生日

當十九日より伊州御越一日御繰合弊廬へ御來辱被下候よしに付差支之有無御問合承知仕候、其頃さし支無御座候、當二十二日者私誕生日にて例年族類共參り居、二十四日愚息躬に付祝事有之候間、右二日御除ケ餘はいつにてもさし支無之に付何卒御來光奉待候、縷情連榻可申盡候、一宿弊廬にて御泊の積可然奉存候 正月四日